

---

# 憑神

右下

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

憑神

### 【Nコード】

N3319G

### 【作者名】

右下

### 【あらすじ】

僕は、強制的にとり憑かれた。綺麗な白い神様の霊に。そこまではいいとしよう、僕牧師だし。さらにその神様は、自分を殺した相手を探しに行けと言いだした。まあ、それもいとしよう牧師だし。なら、どうして行く先々で奇奇怪怪な出来事が起こるのか？ これは勘弁してほしい。人間だし。

## 【一章】第一話：神様の悪戯

広い広い並木道、空は藍く澄み渡たり、雲は洗いたての服のようにフカフカしてそうだ。

道は少しだけ整えられているデコボコ道、そんな所が田舎臭さを醸しだしている。

でも僕は町に住んでいるのでこのような田舎っぽい場所が好きである、自給自足は苦手なだけだね・・・戯言かな？

近々、僕の住む街の隣街では『復活祭』という行事が行われる季節だ。

そこで使用される神木をデルの村から引き取るために、今僕はこうして田舎道を歩いている。

何故僕がそんな事をしているかと訊かれれば、簡単な話、僕は自分の町で牧師をやっている。『復活祭』とゆうのは平たく言うと宗教的な行事、しかも街規模とゆう大きな物なのだ。だから隣街の大祭司様の命令で、よく僕は色々なことを頼まれる。

毎回、というのは別に人員がないわけではない。少し表現が牧師

的ではないが、むしろ人員は腐る程いる。

「『良い事をしろ』とはよく言うもんじゃが、それは具体的な意味とはなんじゃ？ 貧困で困っている者に金貨を与えることか？ 飢餓に苦しむ者に食糧を分けてやることか？ 確かにそれも良い事じやろう。じゃがそれは現状を少し良くしただけ、金貨を与え、食料を与えた、が、なら数時間後は数日後はどうじゃろう？ まだ金貨はあるか？ まだお腹はいっぱいか？ 所詮はその程度の事をしたくらいで、己の自己満足を満たす偽善行動にすぎん。現状ばかり救つても意味がない、その者の未来ごと救わなければ、決して『良い事をした』とは言い切れん」

こんな風に、大司祭様は僕にちよくちよく教えを説いてくれるため、僕には雑務めいれいを聞かなければならない義務的なものがある。

例えそれが、僕から頼んで教えを説いてもらってるわけではないとしても、だ。

「まあ、いいんだけどね？ どうせする事ないから暇なんだし」

うーん、我ながら今の発言は聖職者として駄目な発言かな？ でもこれが現実なんだけどねえ。

訂正させてもらおう。

「神の下、神に仕える偉大なる者の元で働ける事を感謝します。うんうん、完璧だねっ」

とりあえず今回の要件を振り返ってるうちに、いつの間にか村の入り口付近に到着していたようだ。



「ひっさしぶり〜!! クロちゃん元気だったかなかな? あたしは元気すぎて木端微塵になりそうだよっ!」

と、マナは何故か顔を赤らめてジタバタしはじめた。

コイツ、木端微塵の意味知ってるのか? 明らかに文章と合っていないが、マナとはそーゆー性格なのだ。

「はあ、マナもそのしゃべり方変わらないね。まあ、そこがマナらしいっちゃ〜らしいんだけどさあ」

どうも溜息混じりで言葉が出てしまう。久し振りのマナ相手に、早速疲れたのかもしれない。

「んん? どうしたのかなかな? クロちゃん元気だしてっ! 大丈夫、犬も歩けば棒に当たるからさ!」

パンツとない胸を張って、爛々と喋るマナ。

ああ・・・そうだね、犬も棒に当たるかもね。僕も君という出会いに激突しちゃったわけだし・・・。多分マナのしゃべり方は神様にでも頼まなきゃ、生涯絶対に治らないだろう。

「話は変わるけど、マナは何故に僕の元へ走ってきたのかな? まるで僕が村に来るのを待っていたみたいになさ」

「ああ〜、うう〜んと」

そう曖昧に返事をする、マナは何か考えこんでしまった。

そして、それから数十秒後、マナは唐突に口を開いた。

「ちょっと、クロちゃんに頼みたいことがあるんだ」

「頼みごと？ ふ〜ん、いつもは無条件で僕に手伝わせるくせに、  
一体全体どうした？」

「え？ そんな事ないよ？ それはただ、クロちゃんなら絶対に手  
伝ってくれると信じてるからだよ」

う〜ん、何か僕のことを扱いやすい男みたいな言葉だ。だけどいつ  
も手伝っちゃ僕はもしかしたら、マナの目からは軽い男として映  
ってるのかも。

「はあ、しょうがないなあ。あまり時間がないけど、僕に出来る範  
囲なら出来るだけ手伝ってあげるよ」

「え・・・本当？」

信じてると言っただけかりなのに、何故か疑問形で返された。

「ほんとに本当？」

え？ なんだなんだ？ 今さっき信じてるみたい事言ってたのに、  
何故すぐ信用しないんだ？

「もしあたしが、隣の家のミルおばさんが空中でばく転したよ！  
って言っても信じるくらい本当？？」

「うん、本当だつて。その隣の家のネイルおじさんが逆立ちしながら空中でばく転したつて言われても信じるくらい本当だよ」

自分でも、何言つてんのかわけが分からなくなつてきた。

「はあ、よかつたあ……」

と、物凄く安心した顔で、マナは安堵の溜息を深くついた。

「？　それで、頼みごとの内容は？」

「実はね……まだ神木を、採つていなかったりしてえ～みたいな？」

「え、まさか神木まだ切り終えてなかったの？」

ここで補足すると。

マナの家系は代々木こりである。だからして当然女の子のマナも継いでおり、木こりが今の職業だ。

この時季になると、さつきも言った通り僕は神木を引き取りに来る。これは毎年行っている事なので、当然ながらマナの家族も、毎年この時期に神木を用意しているのだ。

しかし家系で代々やってきた仕事の依頼を忘れてしまうなんて、これはかなりの驚きとゆうより、驚嘆だった。

「うん、ちょっとこっちで色々あってね」

そう答えて、少し元気が無い顔で、僕に事情を話してくれた。

「お父さんちょっと前から寝込んであってね、今回はあたしが切ることになったんだ。でも、最近森が少しおかしくなっちゃってるらしいの。神木の生えている場所が、急に、本当に突然森の奥深くに移動しちゃったらしくて、今結構熱いスポットになってるんだ」

なるほど。僕はマナとの付き合いも長いので、何が言いたいのかはすぐに分かった。と思う。

つまりは、僕に森への護衛を頼みたいわけか。

しかし、マナって結構真面目な話してても無意識に言葉が変になるんだっただなあ。危うく突っ込みを入れるところだったぞ。

「でもさ、よくそんな危険な状態の森へ自分の娘に仕事を託してくれたね」

これはいささか疑問である、僕が親なら、いや、普通の親なら我が子を危険なところに行かせるなんて事絶対にさせないはずだ。勿論マナの親がおかしいわけではない。

「えっとね、森がおかしくなったのは本当に最近で、お父さん森の事情を知らないのね。とゆうより教えてないの、だって教えたら絶対に無理を押ししても自分で切りに行っちゃうでしょ？」

確かに、僕の知るマナのお父さんなら、とる行動など容易に想像がつく。もしそんな事になったら、一大事じゃすまないだろう。

「だから、あたしが今回なんとかしたいんだ。代々家が継いでいる

家業に泥を塗りたくないの。でも無事に戻ってこれなかったらお父さんやお母さんが悲しむし、あとクロちゃんも。もし、そんな事になったらお父さん、きつと大変なことしかしちゃうと思うんだよ、猿も木から落ちたり、みたいな」

あのお父さんならきつと大変な行動を起こすだろう、下手したら森ごと村も焼き払ってしまうかもしれない。

「それで、頼れるのはあとクロちゃんだけなんだ。まさに唯我独尊だよ」

「そっか、なるほどねえ」

ふむ、僕は思考する。丁度神木が必要な時に親が病気にかかり、森に異変が起き、急に神木のある場所が森の奥深くになった。これは少し出来過ぎな感じがする、それともこれはただの偶然か神の悪戯か？ だが真意を知る術はない、これこそ神のみぞ知るってやつだ。

「つまり話をまとめると、今日僕はマナに付き添って森へ行き、木を持ち帰る。そして僕はマナに危険が迫ったらマナの身の安全を守ればいいんだね？」

「うん、そーゆーことなんだ。でも無理はしないでね？ あたしは危険に襲われても反撃できないからさ」

さらに補足を付け加えると。

マナは森の中じゃ戦闘行為、暴力沙汰をしてはいけない。古くから神木がある森は神聖な領域であり、この村の住人は先祖より、そこでは絶対に争ってはいけない決まり事があるらしい。

つまり森に入れば熊に襲われようが、狼達に周りを囲まれようが絶対にマナは反撃してはいけないのだ。となると、必然的にとれる手段は逃走のみ。

しかしこの近辺の熊や狼達は穏やかで、人を襲うなどそうそうない事だ。だから、その森へ行く時はなるべくこの町出身ではない人、ある程度護身術程度が使える人がいると安心なのだ。

「うん、わかってるよ」

だがこれは今までの森だったらの話だ。話に聞いた今の状態の森じや何が起きるかは見当がつかない。護身術程度でどうにかなるならいいが……。

「ちゃんと私の事守ってね？ おいてったりしたら、あの森に火つけちゃうんだからっ！ 無理心中だよ！」

冗談なのか、本当なのか。やっぱり親子だなあ、と改めて再確認した。

「さて、僕は明日の夜までに神木を隣街へ届けなきゃいけないから、すぐ森に出発したいんだけど。準備とかは整ってるかな？」

「うんつ。森の入口付近に道具とか置いてきてあるからすぐ出発できるよ、まさに用意周到だねっ」

僕の小さな心配もよそに、マナはちゃんと仕事に慣れていて手際がいい。

「了解、何事もないよう、牧師らしく神様にでも祈っておこう」

そう言って、僕は目を閉じ、首にぶら下げている十字架のペンダントを軽く握った。

目を閉じる瞬間、ふとマナの顔が見えた気がした。そこに写った顔は、どこか薄気味悪く笑ってるようにも見えた。

それはただの気のせいかもしれない、それとも何かあるのかもしれない。だが僕は前者の方を信じてみることにした、だってそれが普通だろ？

「神の御加護を」

【一章】第一話：神様の悪戯（後書き）

初めまして葦原です。

今回初めて書いた小説「憑神」読みは「つきがみ」ですよ  
何とも自分の趣味率100%で書かせてもらってますから、物語に  
変なキャラとか出てもしそれは自分の趣味に影響されてるんです。

この作品を読んで、少しでも楽しい気持ちを感じていただければ幸いです。

## 第二話：森へ

さて、自分から準備は大丈夫かと訊いておいて、僕は何の準備もせずに出発しちゃったけどよかったかな？

自分でも少し即決すぎたかなと、今更ながら後悔している。後悔先に立たずって最初に誰が言ったのかな？ うまい事言うよな。

僕の今の服装は真白なTシャツに、これまた真白で地面につくつかないかってくらい大きなコート羽織っている。

このコートはいわば聖職者を表す物の一つだ。主に牧師たちに供給され、僕はこのコートを安易な理由で脱いではいけない。すなわち、その日がどれほど炎天下だろうと脱いではいけない決まりだ。唯一の救いが白いコートだったってことくらいである。

ズボンは安い皮で作られた簡単な物だ、だが僕はこのズボンを気に入っている。中々このズボンも耐久性があり、履き心地も悪くはない。まあ一番の決め手は値段だけだ。

首には十字架の首飾りを付けている、これも聖職者の必須アイテムだ。別にこのアクセサリーに幽霊や化物を退散させるとか、血の巡りがよくなる、幸運が訪れる、みたいなオプションはついていない。

牧師やシスターなど、神にお仕えする者たちは他人を傷つけたりしていけない。これはまず最初に教えてもらう絶対の掟なのだ。時々破ってしまうの人も秘密裏にいるが。おもに僕とか。

さて、現在は春の陽気にしては熱く、僕の額いには薄らと汗がにじむ。

そつえば先程からマナとの会話が無い事に気付き、話しかける。

「どうしたのマナ？ さつきから黙っちゃって。気分でも優れないの？」

「ん。いや別に気分は悪くないよ？ まさに断崖絶壁だけど」

「そう、なら別にいいけど・・・なら森まであと少しあるんだし、久し振りに会ったんだからちよつと話さない？」

「え、えつと、あ！ そうだこの仕事終わったら一緒に『復活祭』見に行こうよ！」

マナはいきなり話の矛先を変えた。あまりにも不自然なだけあって、不審には思ったものの、僕は話を合わせた。

「復活祭に？ 別に構わないけど、マナが村以外の場所に出かけたいなんて珍しいね」

「えつと、その。あたしだって自分で切った木が、どんな風に使われるか興味があるんだよ！」

「ふん」

うーん、今日のマナはいささか様子がおかしい。別にいつも平常であるわけじゃないけど、なんとゆうか、ある程度マナのことを知っている他人と話てる気分だ。

「あ、クロちゃん！森に着いたよ！」

そう聞いて目の前を見ると、いつの間にか森へと到着していた。

大きさは都市ってほどではないけど、小さな町ならすっぱり入りそうなほど大きな森林だった。みるからには特に変わったところはないが、決して油断しないよう気をつける。

「へー、近くから見ると中々神々しいね。これなら何が出てもおかしくない気がするよ」

「うん、そうだね。神様が出てもおかしくないと思う、まさに千載一遇だねっ」

「あはは、本当にいるなら是非会ってみたいよ」

牧師として……ね。

「えっと、荷物荷物……あつたっ」

マナは茂みに置いてあった荷物の所へ行き、5分ほどかけて戻ってきた。

マナの服装は、あの村では一番高そうな真赤なワンピースを着ている。これから森に入るのに、その格好はいささか大変じゃないのかと思うが、きつと余裕の表れ何だろう。そしてそこに新たな装備が加わった、それは僕の身の丈分はありそうな大きな斧だった。いや、むしろ戦斧に近い。

しかもマナは、そのいかにも重そうな戦斧を片手で何回か振り回していてかなり危険だ。あの行動は準備運動のつもりなのか？ 二、三分あの危険行動を何回か繰り返している。

見る限り貧弱そうな少女が、片手で大戦を振り回す、それは随分といかれた光景だ。

ここで分かるように、マナはその体つきとは大きく反比例したかなりの力持ちなのだ。別に鍛えてるわけではない、純粹百パーセントのずば抜けた才能だ。

「よし、準備運動完了っ」

やはりあの行動は準備運動だったようだ。しかしマナの着ている赤いワンピースに、背中にしよった戦斧、その不釣り合いさが僕の視点からは一種の可愛らしさを感じている。

もしかしたら僕は、人より着眼点がどこがおかしいのかもしれない。いや、おかしくない!と思う。

「さて、準備も整ったし森へ入ろうか」

「うん、じゃあたし案内するからお先にね」

そう言って、あれほど危険視していた森へそそくさと入って行ってしまった。

さて、僕も少し覚悟しなきゃな。自分の一つ下の女の子は怖がらずに入ったんだ、僕だって堂々と入ってやる。

少しやけくそ気味に、僕はマナを後を追いつた。

しかし。

この後起きる出来事に対して、僕が決めた覚悟なんか雀の涙もいとこだと、僕はすぐ思い知らされることになる。

### 第三話：牧師と神様

ザツザツザツザツ。ベキベキベキ。ミシッ！ザツザツザツザツ…

そんな軽快な音を鳴らしながら、僕とマナは森の中を移動している。目的地は勿論神木がある森の奥深く、すでに森に入ってからこれこれ1時間は経過している。

「ふう……流石は大自然の森の中……中々足にくるね……」

森の中は大きな樹木が雑草のように沢山生えている。そりゃ当り前か……森なんだからさ。ただ歩いていても木の幹に足を引っかけたり、挟まったりなどさつきから足に負担がかかっている。

「クロちゃんががんばって！あともう少しははずだから」

まったく……こんな場所一時間も歩いて、息一つ乱さないとはおじさん恐れ入るよ。

これはマナの運動神経のよさなのか、あるいわ……。

先ほどから僕は体よりも、脳をフル回転させ考え事をしながら歩いている。今の悩みの種はマナのことだ。

さきほどからより確実な違和感を感じるマナの態度と言動。それに村で会話した時言ったあの一言。

『森がおかしくなった』



とりあえず僕は、疲れた体を休めるため、近くの大きな大樹の下で腰を下ろした。

マナはあの細身の腕からは想像もつかない馬鹿力を使い、僕の身の丈以上の戦斧を慣れた手つきで伐採していく。

もしマナが好きな人がいるなら……いやいるだろうなあ、マナ可愛いし。

もしもその人がこの光景を見たら、きつと百年の恋もさめるだろう。好きな女の子があんな戦斧で木を伐っている光景は、かなりの恐怖心を生み出す。

僕も何回かマナが木を伐る姿は見た事あるが、それでもまだ少し怖いくらいだ。

怖いと言えば現在進行形で、僕は今少し恐怖している。マナの木を伐っている姿もそうだが、もう一つ……それは僕が考えた仮説、それが少しずつ確実に確証を得ているからだ。

僕の考えたこの仮説が、ただの思いすぎし、いや戯言でもいい。それが真実じゃないと願いたい。だから僕は、真実かどうかを確かめる。

方法はいたって至極簡単だ。

「君は、本当のマナじゃないんだろ？ いったい誰だい？」

こんな風に訊けばいい。訊いて一刻も早くこの恐怖心を取り除きた

い。

だから僕は訊く。

僕の妄言であるように。諭すように。確かめるように。

僕は訊く。

「ねえ、マナ」

「んんっ？ 何かなクロちゃん？ 今仕事だからできればはな  
ー」

「……君はいつたい……誰なんだい……？」

僕はマナの言葉を遮って訊いた。

さあ早く笑ってくれ『何変なこと言ってるの？ あはは、変なクロ  
ちゃん』と、早く言っであの無邪気な笑顔を僕に向けてくれ。

だが……いくら待てど答えは返ってこない。

重い空気が何十秒間も続いた。まるで時が止まったのかと疑いたく  
なるほどの静寂に、僕の耳がおかしくなったのかと錯覚しそうなほ  
ど静かで重い時間。

とても気分が悪い、目に見えない重石が僕をゆっくり潰していく感  
覚がする。僕は胃の物を逆流させてしまいそうなその瞬間、答えが  
返ってきた。

「ふむ……お主、よくわしの事に気がついたのお」

その声にはあの可愛らしいマナの声ではなく、凜としていて、とても透明感のある声だった。目の前には確かにマナ以外誰もいない、すなわち声の主はマナだ。

「しかしのお……なぜばれたのかのお。お主を騙すなど容易いはずだったのに……まあよい、ここへ連れてこれただけでも成功じゃからな」

そう、マナらしき人物は一人でブツブツ言い出している。そしてこの時点で残念ながら僕の仮説は確信へと変わってしまった事をうなづけている。

「ふんっ。お主、どうやってわしに気づいた？ 神の命令じゃ、答える事を許す」

マナらしき人物はなんだかとても上目線だった。それに神様の命令だって？ 今の時点で非日常過ぎて倒れそうなのに、今度は神様と来たもんだ。牧師として、ここはどんな風に返せばいいのだ？

よーし。

こうなったら、僕もとことんついてってやるっ！

「ああいいさ！神様の命令となったらしょうがない、僕だって牧師を務めてる者だ、答えてやるよ！」

……なんて事は考えただけで、決して口に出せない。僕にそこ

まで勇氣は無い。

ここは一旦神だのなんだのどうでもよい事にした。今は素直に答えの方が良さそうだからね、ただの現実逃避にしか映らないけど。

「えっと、僕がマナの事を不審に思いだしたのは、村へ入った時に口にした言葉。それでこの森へ行く時に交わした会話、それをヒントに一つ仮説を立てることが出来ました」

「ほお」

「森の中に入り一時間程経過し、あなたは疲れて弱音を吐いた僕に、『あともう少しだよ』と言いました。つまりそれは、この森に入り、移動したはずの神木の場所を完全に知っている、とゆうことが分かります。だったら何故、村で僕の護衛を頼んだのか、護衛を頼むくらないのに、どうしてすでに森へ入っていたのか」

「ふむ」

と、自称神のマナは相槌を打った。

「マナがどうして全部しっているのか疑問ですが、でもよく考えると他人から訊いたとゆう可能性もある。まあ、それは一旦置いときましょう」

僕は少し間を開けて。

「次に気になるのは、この後言った『神木が森の奥深くに移動した』森がより危険になったのなら森へ近づく馬鹿はいないでしょう？だけでもし誰かが森に入ったとしましょう、その人は神木がいつも

の場所がない事に気がつく。まあ神木の場所を知ってるのはマナの一家だけでしようが、ここの問題点も一旦無視しましょう、そしてその人は神木がどこに行ったのか気になる、そこでその人は搜索を開始し森の奥深くに移動したことを知る、そして無事に森から出て、村の人達に知らせる」

「ふむ・・・なるほどのお、つまり『神木が森の奥深くにある』とゆう事実は誰も知りえない話なわけかの」

「そうですね。あの村でこの森へ近づく人は仕事の件があるマナの一家くらいでしょう。それにこの森ではあの村に住んでる者は、動物などに襲われても誰も手が出せません。そんなこと知りながらより危険が増した森へ入り奥深くまで搜索する、こんな行動する人なんてまずいないでしょう」

「ふむふむ・・・」

そう言つて僕の推理を咀嚼するように、何か考え込んでしまった。

そして数十秒後、唐突に口を開き。

「あっはははははははははははっ！！」

あまりにも突然すぎる高笑い、森の中を木霊する。

僕は思わず体をビクリとさせてしまった。なんだなんだ？ もしかして僕の言ったことどこか変だったのか？

まるで狂ったように笑い、空気が軽く震えている。この近くに熊がいたら一目散で逃げ出してしまいうくらいの、馬鹿出かい笑い声だっ

た。

「な、何かおかしい点でもあったでしょうか……？」

「あはは……はは……はあはあ……。ふう、ここまで人間に虚を突かれるなんて初めてじゃ。あまりにも傑作であやうく笑い死ぬところじゃった、いや、死んだ者がまた死ぬなんてとても笑えぬ冗談じゃな。お主！わしをまた死なせようとするのか！」

大笑いをしたかと思えば、急に怒り出し、本当に不可思議な光景だった。

「え？ え、えつと……。ごめんなさい」

何故僕は謝ってるんだ……。？ とても逆らえなさそうだけど……。

「なるほどのお、わしもわしじゃな爪がまだまだ甘かった。じゃがお主が賢いの確かじゃ、わしの事を気づいた事は誇りに思うが良い！！」

「は、はい！」

体がピンツとはり、子供のように元気よく返事してしまった。うわあ、マナの顔でしゃべってるけど、マナが木を伐っている時よりもなんか数十倍怖い……。

「お主は合格じゃ、是非わしの入れ物になる事を許してやる。寛大なわしを感謝するんじゃな」

「は？」

これが僕の運命を大きく変えた神様との、最初の出会いだった。

#### 第四話・牧師の終わり

「は？」

自分でもビックリするほどの、間抜けな声が出た。

「じゃくから。お主はそこそこ使えるとわしは判断した。じゃからお主にはわしの入れ物にしてやる、と言ってるんじゃない。わかったかの？」

「入れ物って……言葉通りに取ると、もしかしてあなたは体がないんですか？」

「そうじゃ。わしが今この小娘に入っているのはお主をここへ誘い出すためじゃ、別に好きでこの小娘に入ってるわけじゃないっ」

「えつとお。一つ質問させてください。何故あなたは僕をここへ誘い出した……いや、僕を選んだんですか？」

「ふんっそんなの決まっておろう、わしには今体が無い。じゃからとても困っておった、そこにこの森へ小娘が一人やって来た。わしは好機と見てこの小娘にとり憑いた、そこで小娘の脳の中、つまり小娘の記憶からお主の存在を知った。しかも、今日お主が村に来るとゆうではないか、こんな絶好のチャンス逃すバカはおるまい。じゃから、お主選んだ理由など微々たるものじゃ」

「つまり……あなたは神様で、しかも幽霊でもあるってことですか？」

「うむ。ちょっと前に失敗してお、わしとした事が不覚じゃったわ。そのおかげでわしは一回殺された、じゃからわしは一刻も早くマシな体がほしいわけなんじゃ」

「は、はあ。大体わかりました・・・」

まさか相手が神様であり、さらに＋幽霊だとは驚きだ、とゆうか神様って死ぬんだなあ。

あれ？ いつの間に僕は、このマナの中にいる者を神様と信じてるんだ？ よく分からないが、僕の直感なのか勘なのか、ただの幽霊としてではなく神様の幽霊として認識していた。

とゆうより、それ以前に幽霊の存在も信じているのも、いささかおかしな話だ。

「さて、わしは問いを問いで返された上、その問いを答えてたやつだ。わしの寛容さと器量のの大きさを改めて感謝するがいい。そして今度こそお主の番じゃ、わしの要望を承諾するかの？ それとも拒否するかの？」

「そりゃー、拒否しますね」

僕は、何の迷いもなく刹那的に答えを返した。それにはいくらなんでも神様も面喰ったようで、目を大きくパチパチと、啞然とした表情をした。

「なつ。お、お主真面目に答えんか！」

「すみません、これでも大真面目の答えです。もう一度いいいます、

拒否しますね。これは何があるかと、僕はこの答えを覆す気はありません。僕の目的はただ一つ、速やかにマナの体から出ていってほしい、とゆうことです。ですが、変わりに僕の体に入るのも簡便ですがね。ちよつと詭弁ですが」

僕は至極当たり前のごとく、キツパリと言った。

「お主……ふんっ、お主のその眼、決して適当に答えたわけではないようじゃな。だったらわしにも色々と考えがあるがの」

やはり揺すつてきた。

僕の否定意思程度で『ああそうですか』と引くわけがない。仮にも相手は神様だ、きつとそう簡単には折れそうにない。こっちはどう言い作ろうかに骨が折れそうだったのに。

「わしがこの小娘の身体か精神に危害を加える。もしくは一生このままとり憑いて、この小娘の精神を完全に乗っ取る。とまあ、出来る事などこんな感じじゃが。…どうじゃ？ 答えは変わったかの？」

「いいえ。残念ながら、答えを変える気はまったくもって一ミリたりともありませんね」

「ほう……？ お主、人としての仁徳に満ちた心を持つてるようじゃなあ。この世も随分と面白くなったもんじゃ」

と、ニタリと不気味な笑みを浮かべ、皮肉たつぷりで言った。

「いえいえ、お褒めの言葉ありがとうございます」

僕も負けじと、少しおどけながら答える。

「ですがね、僕はマナの事を見捨てる気もありませんね。あなたは神様なんでしょう？ そのようなお偉い方が、さきほどおっしゃった様な下劣な行為をするわけがない、と僕は信じていますよ、はい」

「そんな安っぽい挑発にわしに乗るとでも？ ふむ。じゃが何故そう言い切れると思うんじゃ？ わしならやりかねないぞ？ 神がみな善良と思っているなら、それはとても哀れで滑稽じゃ」

「」心配無用です」

力強く、少し言葉を尖らせながら僕は言った。

「ふむ。その根拠は？」

少し間をおいて、僕は答える。

「僕はですね。神様の事が大っ嫌いだからですよ」

「.....ほう？」

「嫌いで嫌いで憎くて憎くてしょうがない。神様が全て善良？ そんな考え方反吐が出ますね。それが僕が神様に対するたった一つの思い。昔の僕だったらきつと真逆の答えを言うでしょうがね。時間はすべてを変えてしまう、人間も、考え方も、外見も、運命もね」

だから、と続け。

「全ての神様が善良って考えは僕には存在しません。でもあなたは

マナには危害を加えないと思いますね。何故かって聞かれると、色々あるんですが。まあ、まとめると僕はあなたがそんなに悪い神様には見えません」

「お主の今の言葉は、矛盾している。神を嫌い、憎んでいながら、わしを悪い神には見えない。もう少しマシな嘘をつくんじゃない」

キツと僕を睨めつけて、すぐに顔を僕からそらした。

「じゃが、概ね分かった。それがお主の答えか……なら、致し方ない」

そう、小さな声で呟き。口を閉ざした。

その瞬間、重力が増した。

いや、どこか静かで重みのある強烈な雰囲気は漂い始めたのだ。

もしかしたら、僕の神様に対する侮辱で怒った？

いや、しかしそんな怒りの沸点が低いとも思えない。いったい次は何を言い出すか、さらに緊張しながら言葉を待つ。

そして。

「お主を殺す」

……どうやら沸点は低かったらしい。

ビュンッ！と音が鳴り、その刹那。僕は無意識のうちに、横に身を

引いて避けていた。危なかった、当たっていたらきつと胴体と下半身がおさらばだ。

音の正体は考えなくても分かる、マナの持っているあの道具、いや、武器。

軽く振るだけで人の体なんかひとたまりもないだろう。しかもマナの馬鹿力が加わってるから、まさに鬼に金棒を与えた状態。今のマナは軽く人型兵器かもしれない。

「ま、待って下さい！もしかして今の言動でお怒りに！？ そりゃあ、あなたの提案を拒否しましたし、あなたの前で神様の暴言を言いました。い、いきなりは酷いですよ！」

「ほう？ 散々神の事を貶しておいて、今更酷いじゃと？ だってらお主は、わしが『今からお主を殺すぞ』と最初に合図しとけば、構わないのかの？」

「ええ！そんなの詭弁じゃないですか！！」

「なんじゃ？ 未練たらしい男は嫌われるんじゃぞ？ 諦めてさっさと腹をくくるんじゃな」

腹をくくられて……。

いきなりの急展開でパニックになりそうなのに、そんなすぐに腹はくくれないよ……。

って、早くこの状況を打破しないと確実にヤバイ。

でもどうやって？

「ほれほれ〜。二激目いくぞ〜」

ビュンツ！先ほどは真横に水平、今度は上から下への縦一線。今度は意識していたので、余裕を持って避けれた……。わけがなかった。

あの戦斧の破壊力は、想像するだけで軽く目眩がする。

一発当てられたら、そこで終わりだろう。だがあの戦斧を使う上、リスクも当然も発生する。それは戦斧ゆえの超重量だ。あんな物を振り続けるには、相当の筋力が必要だ。

だからペース配分的に攻撃は一定の速さに制限されるはず。思いつきり振ったとしても、スピードなんてたかが知れてる。

とまあ、ここまでは普通の人の場合の事だが。なにせあの体はマナだ、これが指す事実は僕の幻想を憐れたたきつぶす。

さきほど、マナの事を軽く人型兵器と称したが、あながち間違えてはないかも。なにせあの戦斧のリスクを、全てカバーしてしまっている。小細工なんて必要無い、純粹に、あの馬鹿力だけで十分だ。

一撃目は不意打ちに近かったからか、スピードを遅くしてくれた配慮があったんだろう。だが、今回は違う。先ほどとはまったく比べ物にならない速さで攻撃してきた。

つまり今回の攻撃は意識こそしてたが、結局は避けたと言うより、無様にも適当に転がってなんとか避けれた様なものだ。余裕なんて

言葉、この状況下では何の意味も持たない。

「ふむ、お主中々運動神経はあるようじゃが、もっと華麗に避ける努力をせぬか」

「な・・何言ってるんですか。華麗に避けるなんて・・・はあ・・・僕はそこまで凄くないですよ。はあはあ・・・そう言えば、思ったんですが」

「うぬ？」

荒れた息を整えてから、僕は言った。

「えっと、何でマナの体じゃダメなんですか？ 決してマナの体を渡していいとは思ってませんが、マナの常人ではない運動能力に気づいているでしょう？ なのに、何で僕に乗り換えよう？」

「中々いい質問じゃな。確かにこの小娘の運動能力は素晴らしいのお。じゃがな、この小娘じゃダメなんじゃ。理由は」

少し言葉を区切って、僕の眼をジッと見つめながら答える

「—————」

僕の体が突然斜めに傾き始めた、そしてゆっくりと、僕の体は重力に従い地面に吸い寄せられていく。バタツと体が完全に倒れたところに、やっと僕の脳は状況を確認できた。

理由を口に出しながらそれと同時に、フルパワーの振りが刹那的な速さで僕を斬りつけた。今回は人間の反射のスピードでも追いつく

事が出来ない、完全なるスピードだった。

きつとあの恐ろしい早さの二激目でさえ、スピードを遅くしてたんだろうなあ。そういえば、結局理由も聞こえなかったなあ……。斬られたにも関わらず、そんな事を僕は考えていた。

最初は切られた箇所はどこかわからなかったが、少し遅れてやって来た鋭い痛みで、どこを斬られたかすぐ理解できた。

脇腹がとても熱い、高温の鉄を思いつきり押しつけられたような恐ろしい熱さ。血がドクドクと体の外へと流れていく感覚がする。

マナの方へ顔を向けると、血の付着した戦斧を持ちながら僕の事を見下している。その表情はどこか悲しげで寂しげな表情だった。

何でそんな顔をするんだろう。

そんな顔で僕を見ないでくれ。

僕は、マナの顔を見つめながら。

あの日以来。数十年ぶりに神様に向かって微笑んでみせた。

## 第五話：憑神

ざわざわと、木々が静かに揺れている音がする。とても静かであり、緩やかで穏やかな時間。

噂に聞く天国とはこれのことだろうか？ 今僕はとても幸せな気分だった。

倒れている体の上半身だけを起こし、周りを見てみるとそこは森の中だった。

「あ、あれ？」

今度は全身で立ち上がり、二本足で周りをうかがってみる。そこは今までいたあの森の中だった。

周りを確認していると、ふと目についた者がいた。二メートル程離れた場所に倒れている女の子。

「マナ！」

僕は思わず叫んで、彼女の傍へ駆け寄る。外見から判断すると怪我らしきものは一つも見当たらない。顔色も良く、スースーと可愛く寝息を立てている。

マナの身の安全を確認して、僕は安心したからなのか、やっと僕の脳は完全に覚醒し始めた。今まで起きたことが走馬灯のように頭をよぎっていく。



その者の言動、素振りや、マナにとり憑いているとゆう異能力。それらを総合するとマナの中にいる者が神様とゆう可能性がかなり高く、僕はそれを信じた。

ここまで思いさせた。さて、問題はここからだ。

あの神様は僕に一つ要望を出した、それは僕の体をさしだすこと。だけど僕はそれを拒否した。大まかに言うと、そのせいで僕を殺すと言いだし、いきなり戦闘が始まった。戦闘と言っても一方的に僕はやられてただけだけど。

結局僕は彼女の一撃で即ノックアウト、命にかかわる致命傷を与えられたはずだ。でも現在僕は生きてる、いったいどうなってるんだろう？

ここでいったん思考をやめ、僕はズボンに入っている小さな懐中時計を取り出し、現在の時間を確認する。この時計が狂っていないなら、森へ入ってからまだ4時間ほどしかたっていない。

あの物凄い出来事が、つい数十分前に起きたなんてまったく実感がわかない。それに、あの神様はどこに行ったのだろうか。それともまだマナの中にいるのか。

だが、今はそれを確かめる術はない。だからとる行動はすぐ決まった。

この森でいつまでも考えこんでるわけにもいかない。早く村へ戻らないと、またおかしな者にトラブルに巻き込まれるかもしれない。そんなのまっぴらごめんだ。



ふとマナの顔を見ると、まだマナは可愛い寝息を立てて寝ている。  
この顔を見てみると、あの神様はまだマナの中にいるんじゃないかと心配になる。

「ふむ。その疑問に答えてやろうかの」

「!?!」

僕はものすごい速さで声のした方へ顔を向けた、だがそこには森の入口が不気味にあるだけだ。

「・・・・・・・・」

疲れているのか・・・僕は。とうとう幻聴が聞こえるようにまで疲れが溜まったようだ。と心の中で思ったその時

「わしはもうその小娘の中にはおらんよ。わしは今、お主のすぐ傍におる」

「!?!」

またあの声が聞こえた。

今度は立ち上がり、あたりをキョロキョロと見回す。だがいくら警戒しようがマナと僕以外誰もいない。

「ふむ、神からの優しいアドバイスをくれてやろう。お主、周りを警戒するなら、時には上を見ることも試した方がよいぞ？ 意外と盲点じゃからな」

バツ！

と言われた通り、勢いよく顔を上空へ向ける。

そこには一人の美しい女性が空中にフワフワと浮かんでいた。

「『誰だ？』みたいな顔してるの。ああ、わしの本来の姿でお主の前に現れるのは初めてじゃったな。なら改めて自己紹介でもしようかの」

「戦乙女、安全と混沌を守護する者、戦の破壊神、断罪と裁断の剣とまあ色々と長ったらしい名前があるが、わしの本名はネリアス」シロナと申す。お主が天に召すまで、今後ともよろしく頼むの」

そう言つて、彼女はシニカルに笑った。

〈 〉  
〈 〉  
〈 〉  
〈 〉  
〈 〉  
〈 〉  
〈 〉  
〈 〉  
〈 〉  
〈 〉

村と森をつなぐ平坦な道。僕とマナ、そして彼女がいる。

僕はマナをおぶりながら歩き、彼女、ネリアスさんは僕の隣でフワフワと浮きながらついて来る。

彼女を一言で表すなら、白<sup>ハク</sup>だろうか。

何にも染められていない、全てを無に帰すような潔白の白さ。それが、僕が彼女を見た時に最初に思ったことだ。

見た目は20歳位、肌は透き通りそうなほどの真っ白い肌。

手足も長細くて綺麗である。だが、あの体に欠点を言うとならば一つ、それは胸が皆無に等しいくらい無い事だ。

今歩いてる道のように平坦だ。あ、別に僕は大きい方がいいと思っ  
てないよ？

と僕は誰かに弁解した。

顔も非常に整っており、十人中十人が振り返るような美しい顔だ。  
美貌も神様級とゆうわけなのだろうか？

髪の毛は雪のように真っ白で、腰まで伸びているロングヘアー。

瞳の色は僕と同じで真っ赤な深紅の色。その瞳をずっと見つめて  
いると、まるで吸い込まれてしまいそうな魅惑がある。

服装は、胸のあたりに大きなリボンが付いているだけで、フリルな  
ど一切付いていないとても簡素なドレスである。だが彼女の美貌が  
その簡素感を完全に打ち消していて、丁度いいくらいだ。

「なんじゃ？ 神の体をジロジロ見よつて。わしの体に穴があいた  
らどうする」

あくわけないだろ！と心の中で突っ込む。穴があくほど見るって言  
葉を鵜呑みにしているのだろうか？

「いえ、決してあなたに見とれていたわけじゃありませんよ。ええ、  
違いますとも」

どうやら無意識のうちに、僕はネリアスさんのことを見入ってしまったようだ。煩惱退散っと。

「ふむ、正直な事を言う。その言葉に免じて許してやるう」

「それはどうもです」

ネリアスさんは自分の美貌にかなり自信があるようだ。まあ、それに値するほど綺麗なんだけどね。

「それで、ネリアスさんはいつまでついてくるんですか？」

「いつまで憑いてくる？ そんなものずっとにきまっておるう。あと、わしの事はネリアスと呼ぶでない。ネリアスと呼ぶのは、わしが気に入ってない奴だけじゃ」

僕はいつの間にか、ネリアスさんに気に入られてるようだった。何かちよっとうれしかった。

「だったら、なんて呼ぶのがいいですか？」

「ふん。そんなの好きにするがよい。シロナでも、シロちゃんでも、シロ様でもよい」

「はぁ……じゃあ僕はシロさんと呼びます」

「分かった。じゃがお主ならきつとシロ様と呼んでくれると思ったのにお……残念じゃ」

「呼ぶかつ!」

それが、シロさんに対する僕の初ツツコミだった。

「えっと、話を戻しますが。ずっとついてくるとは、一体どういう意味で?」

「そんなもの決まっておろつ、先ほども言ったとおりお主が死ぬまでじゃ」

「その、なんで僕が死ぬまで?」

「お主は先ほど死にかけた。それは覚えておろつ?」

「はい、おもいっきりシロさんに斬られましたね」

アレは痛かったなあ。

「お主を斬り付けたあと、わしはお主の事を救ってやったんじゃ」

「えつとお……え?」

どうゆう意味だ? 救った? 僕のこと本気で斬り付けたくせに救った?

「わしはお主の答えを聞いてから、お主に殺すと言った。じゃが、決してわしが怒ってあんな事を言ったわけではない。そこをはき違えないようにの」

「え、そうだったんですか？ 僕、シロさんの沸点が低いだけかと思っていましたよ」

「お主……まあよい。わしはな、別にお主の事を殺す気などなかった」

「うん？」

「あれは最終手段じゃ。お主がわしの要望を拒んだら、わしはあーするしかなかったんじゃ」

「僕を斬り付ける事……ですか？」

「別にお主の事を斬りつけたくて斬ったわけではない。お主の精神を弱くするための強硬手段じゃ」

僕の精神を弱くする？ そう訊こうとした瞬間、シロさんが答える。

「わしはあの時お主に言った。お主の体に入れてくれと。わしは生身の体がどうしても必要であった、だが誰でもいいとは限らないが。じゃが、お主はわしの想像を超えるほど、要望通りの体と精神じゃった」

「そんな……この僕がですか？」

「うむ。じゃからわしはこのチャンスを逃すわけにもいかなかった。強引にでもお主にとり憑きたい、もとい入りたい。じゃが強引にとり憑くには少し手間がかかった」

「それが僕を傷つけた理由、ですか？」

「お主の精神が少し強すぎた、じゃからこの小娘みたいに一方的にとり憑くとゆう手段が出来んかった。そこで仕方なく最終手段の出番じゃ」

ニヤつと薄く笑う。

「精神が強いなら弱くすればよい」

ああ、成程。単純明快で、かなりぶつ飛んだ思考だが、少しだが分かってきた。

「察しのいいお主なら理解してきた所じゃろ。精神を弱くする有効な方法は二つ、内面に負荷を与え精神を弱める。もう一つは」

「体に危害を与え、痛みなどの感情を強くし、精神を脆もろくする。こっちの方が手っ取り早くて有効ですね」

そうシロさんの言葉を遮って、僕は言った。

「うむ、その通り」

「それで僕が気絶している間にとり憑いたと……。じゃあなんであの傷は治ったんです？」

「わしは体を手に入れた、じゃがお主にも手に入ったものがある」

「え？」

「体の基礎運動力。お主の体は先よりも、何倍ものパワーアップを

しておろう。傷の治癒力もしかりじゃ。戦の神の守護を受けた者は、  
そういった加護を受ける事が出来る」

つまり僕のパロメーターが何倍にも強化された、ってことか。それ  
なら傷の件は納得できた。けど、また一つ疑問が浮上した。

「成程。けど一つ辻褄が合わないことがありますよ」

「ぬ？」

「僕はマナをおぶって森を歩きましたが、今現在とても疲れていま  
す。僕の体力も数倍になっているなら、この程度で休憩したいほど  
疲れないと思うんですが？」

「確かにお主の元の体力ならそうかもしれんの。じゃがそれは、お  
主にわしが入っている時の話じゃ」

「どう言う意味ですか？」

「わしが今お主の目に映っているのは、お主の中にいないからじゃ。  
じゃから今のお主は今まで通りの体じゃ。わしがお主の中に入って、  
同調すればお主の身体能力は向上する」

「じゃ、じゃあ僕が起きた時からシロさんは僕の周りに……？」

「うむ、お主の真上からずっと見ていた」

そんな……確かに真上までは周りを伺わなかったけど。じゃあ  
シロさんは僕の苦勞しているところを上から高みの見物ってしてたっ  
てことか、思った以上に性格悪そうだ……。

「なんじゃ〜仏頂面しおつて。わしがお主の事手伝わず上から見てた事に怒っているのかの？」

「・・・・・・・・」

僕は無言で肯定をした。

シロさんもそれを肯定ととらえたらしく『はあ〜、仕方ないやつじや』と言って僕の前から突然消えた。

「案ずるな、わしは今お主の中にいる。ほれ、疲れは残っているかの？」

そう、胸の内から声がした。なんとも不思議な感じだ。

僕は腰を上げて立ち上がり、少し体を動かしてみる。

これは思った以上に凄かった。軽くジャンプするだけで、マナくらの身長を軽く跨げるくらい飛べた。疲れも微塵として残っておらず、体中にエネルギーが疾走して逆走しそうな勢いだ。

「ほれほれ、村までは手伝っておるから機嫌直せ」

「あ、ありがとうございます！さあ、早く村へ行きましょうー！」

さっきの言葉は撤回、シロさんは面倒見がいいようだ。

「まったく、以外に現金な奴じゃな」

と、シロさんは少し苦笑まじりに言った。

僕はマナを背中に乗せ、かなり軽くなった体を試すように村に向けて走り出した。

「あとさっきの話の続きじゃが、わしはお主から出て行くなんて微塵にも思っていないから、その所よろしくの」

僕は早速こけてしまった。

## 第六話：平和な一時

薄暗い部屋、少し高い天井に備わっている大きな照明器具が見える。この部屋が薄暗いのは決まっている、僕は寝ていたからだ。誰でも寝るときは明かりを消すだろう。

「ん……今何時だろ」

まずは僕の腹時計で確かめてみる。

7時30分、このあたりだろう。枕の隣に置いてあった懐中時計に手をのばし、現在の時間を確認する。

「7時26分、か。起きよっかな」

だが起きる前に少し頭を整理し、昨日の事を少し思い出す。

あの後予想以上の速さで村へ着き、すぐにマナの家に行った。そこで一日泊めてくれるよう頼み、一部屋借りて就寝したのだ。

マナはあのまま起きることなく寝っぱなしで、少し心配になった。だがシロさんが明日になれば元気になると言っていたので、仕方なくそれを信じて寝る事にした。

ちなみに晩御飯は、マナのお母さんが手料理をふるってくれた。いつもいつも僕の好きな味のツボを見事に刺激していて、どうも食の手が止まらなかった。

ちよつと図々しいかったかな。

朝ごはんの時は自粛しよう。と、少しだけ決意した。

晩御飯の時も勿論シロさんは僕と同行していたが、僕以外の周りの人は見えていないようだった。当然マナの親にも見えていなく、最初はこつちが困惑してしまった。

マナの家に着くまで、シロさんの事をマナの親にどう説明しようか必死に考えていたが、その努力はまったく無駄になった。

マナのお父さんは本当に病気でいて、僕を森へ誘い出すためのあの理由も筋は通っていたようだ。シロさんがどうにかしたんだろうか？

マナが寝てしまっている理由は、マナのお母さんには適当に言い繕えたが、お父さんが寝込んでいたのは不幸中の幸いだ。きっともつとややこしい事になっていたに違いない。

「大体このくらいかな」

僕は体を起こし、隣に寝ている彼女に目をやる。

「ぶ。ぎ。や。る」

それが、今日僕が初めて聞いたシロさんの言葉だった。

意味のわからない言語をブツブツ呟きながら、フワフワと空中に漂いながら気持ち良さそうに寝ている。

神様も人間と同じように睡眠をとるようだ。しかもこの顔はそうそ

うだせる顔じゃない、物凄い熟睡している顔だ。

そんなに疲れたのか。

どうやら食の欲求もあるようで、僕が晩御飯をいただいでる時に隣ですごい形相で僕の事を睨んでいて、かなり居心地が悪かった。

あの顔はあからさまに『うまそうに食いやがって』って顔だった。

そんな顔されても僕はシロさんに食事をあげれないし、体がないんだから食べる事も出来ないだろう。

そう、シロさんは幽霊なので、自分の肉体はないのだ。僕は悪くないのに、一つシロさんに恨みを買われたようだ。

晩御飯の後、シロさんに『僕の体に入れば食べれたんじゃないんですか？』って社交辞令で訊いてみたが、不機嫌な顔で『食べる事は出来るが、体は主の物じゃから味も満腹感も得られんのじゃ』と渋々説明してくれた。なのに食欲があるなんて、結構可愛そうなのかも？

とりあえず、僕に残った時間は夜までなので早く行動をとることにした。

まずはシロさんを起こそうと思ったが、触る事が出来ないのです。起すのは一苦労だ。

起こす手段としては声をかけるしか手段がないが、あんまり大きな声も出せない。マナの親に聞かれてしまったら、後で『ただの毎朝



「はい、ぐっすり眠れました」

「それはよかったわ。丁度朝ごはんも出来ましたし、料理を運びますからテーブルで待っていてくださる？」

「ああ、とてもいい匂いがしますね。僕も料理をテーブルに運ぶの手伝います」

「あらあら、マナなら絶対に言わない言葉ね。助かりますわ」

「いえいえ」

二階から降りてくればすぐにリビングがあり、マナのお母さんが早くも朝食を作り終えていた。

しかしマナは料理の配膳すら手伝わないのか。確かにマナは食べる専門かもしれないけど、もう少しは親孝行をするよう後で言っとくか。

「あ、おばさん。マナを起こしてきましょつか？」

僕は料理をテーブルに運びながら、マナのお母さんに尋ねた。

「それは大丈夫よ。そろそろ匂いが二階にも届く頃だから、起きるのも時間の問題ね」

「はあ、そうなんですか」

チエツ。

あ、違うよ？ 決してマナを起こしに行くとかゆう大義名分で、マナの部屋を覗こうなど一片も思っっちゃいないよ？

「よし、これで最後ね。助かったわ」

マナのお母さんはにっこりと笑って、自分の席についた。

僕もマナのお母さんに向かい合う形で席に着いた。マナのお母さんの隣には椅子が置いてないので、僕の隣にマナが座る形になる。

席に着いて一息ついたその時。

ドタドタドタドタツ。

階段が壊れてしまうのではないかとゆうくらい大きな音で、寝ぐせだらけの髪でマナが降りてきた。

「マナー。朝からあんまり大きな音出さないよう言ったでしょ」

「あ、ごめんなさ〜い。なんかすっごくお腹空いてて、ついカツパの川流れだよ〜」

と、あのマナ特有の言語が出て、マナの目と僕の目が合った。

その瞬間目の見開く限界じゃないかと思うくらい大きく開き、僕を指さしながら口をだらしなく開け、目を高速にパチパチと瞬きをしている。

そしてしばしの静寂。



「あう。うん、わかったあ」

何とか問題を先延ばしに成功し、とりあえずは朝食を終えたらマナと家を出てゆっくり話そう。

「それじゃ。マナ、クロドちゃんの隣に座ってちょうだい」

言われるままマナは僕の隣に座った。

「偉大なる自然と命に感謝いたします。いただきます」

「神よ感謝します、いただきます」

「いただきます」

さて、どれから攻めていこうか。目の前には麦粥によく味が染みてそうな漬物に、この村で採れる甘い芋の蒸し物によく熟れてそうな林檎と梨が置いてある。

これは美味しそうだが、だが昨日の事を思え返し思わず箸を持つ手が止まる。

ふと隣を見るとそこには必至の形相で食べ物を摂取していくマナの姿が。右手で芋をほおばり、左手で林檎にかじりついている。

何もそこまで必死に食べる事なかるうに……前々から見てきた光景だが、やはり今でも顔が引きつってしまふ。

ホント、これから冬眠に入るための準備でもしてるんじゃないかと錯覚してしまうくらいの勢いだ。

しばし呆然と眺めていたら一つの過ちに気づいた。バツと顔を自分の麦粥があるところに目をやると、やはりそこには何もなかった。

しまったっ！！

僕の麦粥の行方は何処へ！と考えるまでもなく犯人はマナだ。マナの目の前には自分の麦粥が入ってた茶碗がカラッポの状態で置いてあり、その隣にカラッポの僕の茶碗が置いてあった。

マナの食事は狩りの時間。目の前にある食物とゆう獲物を片っ端から食らい尽し、自分の強靱な胃へと送る。久しぶりのマナと一緒に食事ですっかり気が抜けていた。

マナと一緒に食事をとる時の注意事項

その一 一時も隙を見せるな。

その二「いただきます」が始まりの合図、「ごちそうさま」までは決して気を抜くな。

その三 一度取られたら奪取することは不可能である。(マナの握力で握られたら対応のしようがないから)次の食べ物を死守することが先決である。

この重大三カ条を作ったのはマナのお母さんである。

半ば涙目でマナのお母さんを見つめると、ふるふるると首を横に振り残念そうな目で僕の目を見つめ返す。

そんなわけで個人的に一番楽しみだった麦粥が消え、しょうがなく芋と漬物と梨を食べて僕の朝食はすぐ終わった。



もしかして永眠したんじゃない？ と思ってしまっくらいずっと寝ている。

「ああ、クロちゃん神木を取りに来たんだね。今年も『復活祭』やる季節になったねえ」

「うん。期限は今日の夜までだから悪いけど早急に頼むよ、マナ」

「りょくかいつ！マナちゃん張り切って仕事やっちゃいます」

「ありがとう、助かるよ」

「えへへ」と可愛らしく笑い返してきて、思わず恥ずかしくなり顔をそらしてしまった。

時折見せる、僕に向けられる無邪気なマナの顔にはどうも慣れない。

「あ、そうだ。クロちゃんクロちゃん」

「ん？」

「どうして斧持っていていなくていいの？ あたし力には自慢あるけど、流石に素手じゃ切れないよ？ って言うより折れないよ？」

「ああ、それは……えっとお……」

言葉を濁してなんて返そうか考える。

うん。昨日のことを説明しようにも肝心のシロさんがマナに見え

なきゃハッキリ言っつて僕が必死に説明しようよと、ただのうわごことしか聞こえない。

これはかなり困ってしまった……。

だが、必死に打開策を考えるがまったく思いつかない。

マナは顔こっちに向け「？」の表情ですつと見つめてくる。

ぬ、ぬう……どうしたもんかな。

『主』

思わず体がピンと硬直してしまった。

いきなり硬直した僕を見て、さらにマナの表情は「??」になった。

右隣を見てみると、先ほどまでぐっすり寝ていたシロさんが寝起きの表情でこちらを見ていた。

マナの顔からして、シロさんの声は聞こえていないようだ。どうやら僕の心の中に直接語りかけてきてるようだ。

『おはようございます。とても早起きなんですね』

『たわけっ。お主があまりにも困っているのだからわざわざ起きてやったんじゃぞ。感謝より先に敬わってほしいくらいじゃ』

『え。そ、それはありがとございます。とても困ってます』

『ふむ。まったくのお、これで貸しは二つじゃぞ』

昨日の晩御飯での出来事は貸しになったのか。いつかその貸しを出されるか心配である。

『それで？ お主はどうしたいんじゃない？』

『えっと、単刀直入に言うと、シロさんの姿をマナに見せたいんですが、できませんかね？』

『ふむ。その理由は大方昨日の事を小娘に説明できんからかの。まったく伝達力の乏しい主様じゃな』

返す言葉が無いが、流石に昨日の出来事は説明のしようがない。

『結論から言うと出来る。あまりにも簡単に拍子ぬけしてしまつたわ』

『え。出来るんですか？ なんか実体化するには副作用がある的なことを言つと思つたんですが』

『そんなことはない。わしが見えないのはただ姿を消しているからじゃ』

『それなら昨日言ってくださいよ。マナのお母さんになんて説明しようか必死に考えたんですよ』

『うむ。昨日のお主の悩む姿、とても滑稽で面白かつたぞ』

なっ！この神様は性格はひねくれているとゆうより、90度にねじ

曲がっているって事を再確認した。

『……………えっと、じゃお願いできますか？』

『ん。よいじゃろ』

そう言つて、シロさんのフワフワと浮いていた体が徐々に地面へと降りて行き、足がゆっくりと地面についた。

隣に歩いてきたマナに目をやると、そこには驚きの表情でピタッと固まっていた。

つまり、シロさんの姿が見えるようになった事を表情が表していた。

「お初にお目にかかるの、小娘」

にやっと笑いながら、スタスタとマナの目の前に来た。

「き……………き」

やはりかなり混乱している。まあしょうがないだろう、何もないとこからいきなり綺麗な女性が出てきたら誰でも混乱するだろう。

「きれ……………い……………!」

あらっ。思わず何もないとこでこけそうになった。

流石のシロさんもそんな返しが来るとは思っていなかったらしく、今度はシロさんが面くらって固まってしまった。

「すごいすごい！！すっごく綺麗！肌とか髪とか服装とかお姫様みた〜い！！」

『な、なんじゃこやつは』

心の中に、シロさんの言葉が漏れる。

すでに神としての威厳はなくなっていた。

あんなシロさん、そうそう見れないだろう。昨日の仕返しができた感じがして、もう少し見ていることにした。

「マナ、ちょっと落ち着こう？ シロさんも困ってるでしょ」

いい加減助け舟を出してあげて、シロさんを助けてあげた。

「あ、ごめんごめん」

謝ったものの、今度はじつくりとシロさんの事を舐めるように上から下まで見ている。

シロさんも居心地悪そうで、キリキリと頭を動かして苦笑いの表情で僕を見つめてくる。

「とりあえずマナ。昨日の事を説明するからちゃんと聞いていてね。途中の口出しはなし、質問は話が終わってからだよ」

そう言って、僕は昨日の出来事を分かりやすく最初から細かく説明することにした。

どこまで伝わるかは、マナの感受性にゆだねて。

く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

説明が終わる頃には、すでに森へ到着していた。

時刻はお昼前。天気は晴天。しばしの安息は、昨日の出来事など嘘  
なんだと錯覚させてしまうほど、平和で穏やかな一時だった。

## 第七話・出発

「あつたあつた〜！私の大事なカトレアちゃんっ！」

と、謎の名前を呼びながら昨日から森に放置してあつた斧に駆け寄るマナ。

「マナ〜。えっと、カトレアって誰？」

「この子だよこの子〜。私のだ〜いじなカトレアちゃん！昨日から一人で寂しかったよね、うんうん、大丈夫すぐお家に帰れるからね」

やっぱりだった。謎の名前の主は、マナの斧の名称だった。親しい友達のように話しかけて『お〜よしよし』と撫でまわしている。

そんなマナの姿を見てシロさんは姿を消して、僕にしか見えない状態になりお腹を抱えながら大笑いしている。マナの目の前で大笑いせず、ちゃんと姿を消してから笑ったのは親切な配慮だろうか、それとも好き放題笑える自分への配慮なのか。いずれにせよ、狂ったかのようにずっと大笑っている。

「僕、今までマナの斧に名前があるなんて知らなかったけど、前からあつたっけ？」

「ん〜ん。名前をつけたのは一カ月くらい前かな？ 久しぶりに旅人さんが村に立ち寄って、色んな地方の話をかきかしてくれたんだ〜」

旅人には目的地がある者と、ただ色んな所を放流している者がいる。

マナの村に来たのはきつと後者の方だろう。デルの村みたいな田舎は村のみんなが知り合いであり家族同然だ。家に鍵など掛けなくても泥棒など絶対にならない。だから犯罪などほぼ皆無に等しく、いつも平和である。

言い方を悪くすると、いつもみんなは暇なのである。

だから時折村を訪れる旅人は最高の暇つぶしであり、ほぼ村の全ての住民は旅人に会いたがる。旅人は各地を転々としているので、色々な町の民話や伝承、近頃起きた事や流行りなど沢山の情報を持っているので、みんなそれを聞くのが大好きなのだ。

「その旅人さんがね、こんな話をしてくれたんだよ」

『最北にあるミケドと言う町にはこんな言い伝えがあった。「人には物をいつまでもいつまでも大事に扱おうと、やがてその物に魂を宿らせ力がある、そしていつかはしゃべり、動くようになり、今まで大事に使ってくれた者に最高の幸福を与える」と言ったものだ』

「だからだから、私がずくっと大事に扱ってるこの斧に名前をつけてあげたの！そうした方がもっと愛着が沸くし！何か前よりも可愛くなつた気がするんだよ！」

「そ、そうなんだ」

話を聞いてみて判断した結果、それはきつと作り話だろな……。

今の言い伝えなど、ちよつと中身を変えた話ならゴロゴロあるものだ。多分子供は物を粗末扱うからすぐ壊してしまう、だからそうならないように作った作り話なんだと思うなあ。



腹が立つからその辺を散歩しに行く』と言ってフラフラと行ってしまった。僕からそんなに離れられるのか不思議に思ったが、どうやら僕からエネルギー、つまり体力を貰った分比例して遠くに行っても大丈夫と言っていた。

だからなのか、今までに感じたことのない不思議な疲労感を感じている。まあ今は休んでいるしすぐ回復するだろう。

お弁当の中身はサンドウィッチで、お肉と野菜が入っているシンプルなやつだがとても美味しかった。

僕達の昼食が終わったのを見計らったのが、丁度よくシロさんも帰って来た。

「さて、そろそろ出発しようか。マナ、僕も神木を運ぶの手伝おうか？」

「え、いいよいよ。神木って他の木より重量があるからクロちゃん腕じゃ無理だよっ」

むう、女の子にそこまで言われると何か男として立つ瀬がない。

「いやいや、マナ。僕をあんまりみくびっちゃダメだよ、やる時はやる男ってのを見せてあげるよ」

そう言っ僕は、神木にくくり付けてあるロープを手に持ち、おもいきり引っ張ってみた。

ゴキッ！

と、何とも鈍い音が森にこだまして、僕はへナへナと倒れてしまった。どうやら腰をやってしまった様だ。いくらなんでも情けない……立っ瀬どころか、立ってすらない。

「わぁー！クロちゃん大丈夫っ！！？」

「うう……何故だ、何故世の中はこんなに不平等なんだっ！神よ!？」

目の前にいる、薄ら笑みを浮かべた白い神に僕は吠えた。

だがしかし、こうなったら意地でも神木をこの手で運びたい。

だからそんな訳で。

『お願いします』

心の中の会話で、シロさんに思いつきり頭を下げて感を出して協力を要請した。男としてかなり無様だった。

『はぁ……これで貸しは三つじゃからな』

もう半ば呆れた様子で、僕の体の中にスーツと入って来た。その瞬間爆発的に力が湧いてきて、何とか自分の手で神木を運ぶことが出来た。

マナにはこの能力の事を説明してないので、いきなり僕が重い神木を運べるようになって、かなり驚いていた。

ふ、どうだマナ？ 僕だって本気になれば、何だって出来るんだよ



て自分で……あ、そっか。あの時のマナはシロさんの発言だから、マナに記憶はないのか」

すっかり忘れていた。

しかしなら何故シロさんは僕と一緒に街へ行くなど言ったのだろうか？

「そ……それじゃクロちゃん、さ。私もついて行って……いいってことなのかな？ かな？」

「ん？ そりゃ勿論だよ。たまには街の祭りを見るのも悪くないなあって思ってたし、マナが来たいなら一緒に行こうよ」

異論などない、むしろこちらから誘おうかと迷っていたから、好都合である。

「本当っ！？ やったやったー！！じゃ私すぐ荷物まとめてくるから、ほんの少し待っててねっ！！」

そう言っつて、今日一番の速さでスタタタツと家にダツシユで行ってしまった。

『まったく、騒がしいやつじゃの』

『はは、確かに少し騒がしいところもあるけど、一緒にいると楽しいですよ』

『確かにの、先ほどは大いに笑わせてもらった』

『あ、そう言えば。さっきの会話で不思議に思ったんですが、どうしてシロさんは僕と一緒に街に行きたいって言ったんです？』

『んあ？ あれはマナの中に入ってすぐに、マナの心の中を覗いたんじゃない。そうしたら、一つ大きな想いがあっただんじや』

『なんですか？』

『ふん。こんな事言うのはがらじゃないが、お主に対する想いじや』

『なっ、僕ですか？』

『うむ。マナはの、お主が来るのをいつも楽しみにしておって、来るとそれはもううれしくてたまらんのじや。じゃが、お主が帰ってしまったいうと数日は元気がなくなっておっただんじやぞ？』

『……初耳ですね。まさかそんな事があっただなんて』

『マナのやつは顔に出さんだけで、本当は結構寂しがり屋なんじや。胸の内を通してよく分かった。だからじゃろうか、わしも思わずあんなことを口走ってしまっただけじや』

『だったら、言ってくればいいのに。一緒に見たい、一緒に行きたいって』

『分からんかの。マナも結構奥深くで色んな事を考えとる。表面上はあれでもの。お主と一緒にいてうるさくないか、迷惑かけてないか、色んな事を』

『なっ、そんな！マナを迷惑やうるさいなんて思った事なんてあり

「ませんよ！」

『だったら今からでも遅くなくろう？ マナに対する感情を表ちやんと出して、しっかり見てやればよい』

マナはいつも明るくて元気で笑顔の絶えないやつと思っていたが、それは僕が勝手に想像していた一部のマナに過ぎなかった。僕は今日まで勝手にマナの事を何でも分かっていると自負していたが、まったく見ていなかった事に酷く心が痛んだ。

そこへ、スタタタツと先ほどよりも早い足音が近づいてきた。

「お、おまたせー！いきなりだったから何持っていこう少し考えちゃったつ。だけどこれでバッチリですつ！！」

「了解。なら、出発しようか」

「うらじゃー！！」

「うむ」

「あ、マナ」

「うん？」

「一緒に色々な物沢山見て、一緒に美味しい物沢山食べて、目一杯楽しもうね」

僕は出来る限りの、最大の笑顔で言った。

「うんっ!」

マナの顔は僕の笑顔よりもはるかに大きい笑顔であった。この何気ない笑顔を見れるのは幸せな事なんだと、改めて思った。

「よし、それじゃダンバに向けて出発!」

僕は静かに幸福を感じながら、デルの村を後にした。

一人、白い戦いの神は二人の光景を見て呟いた。

「世話のかかる人間じゃ」

## 第八話：嘘

『ダンバートン』みんなからは『ダンバ』と呼ばれ親しまれている。毎日色んな街から物資が届き、ダンバはつねに物で溢れて賑わっている。

ダンバの自慢は、沢山の上級裁縫職人が住んでおり、一級品の衣服を仕立てる仕立て屋が沢山あることだ。

ダンバは言わば衣食住の衣が盛んな街だ。

ちなみに衣食住の住が盛んな所、とゆうより住宅が沢山あるのは街ではなくずっと北にある王国、ミッシェルハイド王国だ。

僕達が現在いる場所はダンバートンの中央広場。流石に街となると人通りが多く、夜の現在でも人が沢山行きかっている。

デルの村を出て数時間ほど歩き、ダンバに着いたのは日が落ち始めるおつまが時の夕方だった。早速街の中央に建っている大聖堂に向かい、現在、依頼の神木を届けてようやく僕の仕事が終了したわけだ。

その後、僕達は街の東区にある宿屋にチェックインをして、現在は三人で街の中央広場に来ている。

「わあ〜。すっごい沢山の人だ〜、お祭りってやっぱり賑やかだねっ！」

物珍しそうに、マナは周りをあたふたと窺っている。マナが人が多いとこに来るのはめつたに無いらしいから、この光景に驚いてるのも無理ないだろう。

「うむ、わしもこんな人を見かけるのは何百年ぶりじゃ。いったい何が始まるのかの？」

こちらの神も何百年ぶりという、人が一生使わない言葉を言っている。そういえばシロさんの過去についてはまだまったく聞いてなかった気がする。

「えつとですね、今日はまだ下準備です。明日行われるのが、この街の伝統行事『復活祭』です」

「ふうむ。して、その復活祭とやらはつまり何じゃ？」

可愛らしく小首をかしげて聞くシロさん、思わずドキッとしてしまう自分がいた。

「えつと。この街には古くから『ダンクネス』と言う美しい女神が住んでいると言われていて、その女神はこの街に幸福と平和をもたらしたと伝えられています。だからこの街に住んでいる人々の半分以上はダンクネス教っていう宗教の信者なんです」

「へえ〜そうなんだ。半分以上ですつごいねっ！」

「美しい女神、か。まあ、わしより美しい神など存在せぬがな」

ふふりと笑みを浮かべ、シロさんは一人勝利の余韻に浸っていた。

今の発言で、ある意味勝敗は決してると思うが決して口には出さないでおこう。

「それですすね。明日がその女神が死んでしまった日なんです。だから明日行う復活の儀式でダンクネスを復活させ、毎年ダンクネスに今年も平和で幸福が続く一年にしてもらえるようお願いする行事なんです。あ、別に本当に復活させてるわけじゃありませんからね？」

「死んでしまったって、女神様死んじゃったの？」

「うん、そう伝えられてるよ。昔は一時期平和を保っていたダンバだったんだけど、それも長くは続かず、過去最悪の災厄がダンバを襲おうとしていた。しかしそれをすぐに察知したダンクネスは、我が身を犠牲にして街を守りぬいた。だからこの街の人たちは今でもダンクネスに感謝しているんだよ」

「そうなんだ、でも女神様が死んじゃったって、ちょっと悲しいね・・・」

とても悲愴な顔で顔でマナは言った。見ているこちらも悲しくなってきたりしまう程の顔で、僕は顔をそらした。

「ふん。いつまでも死んだ神にすがりつき、街の平和を願うなどいかに人間らしいの」

一方シロさんは少しイラついてるのか、急にちよつと怒り気味のよっだ。

「ダルクネス……」

蚊の泣くような小さな声で呟いたシロさんの言葉は、僕達には聞こえなかった。

「さて、それじゃとりあえず腹ごしらえしようか。近くに美味しい店があったから、そこへ食べに行こっか」

「うんうん、だ〜い賛成〜！四季折々〜」

ご飯の提案をしたら、マナの先ほどの悲しい顔などまったくの嘘かのように表情が一変した。本当食い意地が張っているやつだなと、ある意味感心してしまう。

しかしマナとは対照的に、何故か表情がさらに険悪になったのはシロさんだった。だが勿論理由は分かりきっている、僕としても出来る限りシロさんに食事をさせてあげたいよ？ でも僕の方じゃどうしようもないのだ。牧師だからって、神に何でもするとは限らないんだよ？

「シ、シロさん」

恐る恐る話しかけてみる。

「……なんじゃ」

ブスツと答えるシロさん。この様子じゃ今はご機嫌斜めを通り越して、ご機嫌下り坂だった。

「えっと、やっぱり何か方法はないんですかね？ シロさんが食事をとれる方法、とかは」

「……ない、こともない。じゃがよいのじゃ、心づかいは感謝するでしょう」

「ダメだよそんなこと!!」

いきなりの横やり。当然、声の主はマナだった。いきなり大声を出したので、周りの人達も何だ何だとこちらをチラチラと窺ってくる。

「シロナちゃんっ!?! 食事が出来ないって事は死ぬのと同じなんだよっ!!」

あまりにもマナが迫力たつぷりで言うから、シロさんも思わず目をパチパチしている。とゆうより、シロさんはすでに死んでいるのだけだ。

「し、しかしの、この方法はそう簡単に出来んのじゃ。じゃから別によいのじゃ、じゃから」

「ダメっ!!」

シロさんの言葉を遮り、一步も譲らないマナ。まさかマナがこんなに異議を唱えるとは思いもしなかった。マナにとって食事は、もしかしたら命より大事なのかもしれぬと言っても過言ではなさそうだ。

「マナ、とりあえず落ちついて、ね？ シロさん、もうこうなったらその方法を教えて下さい。今の状態のマナを押さえつけるのは、

僕には不可能ですよ」

「ぬー……わかったわかった。じゃが、きっとその方法を聞いたらお主達も諦めるざるおえないじゃろう」

諦めざるおえない、そこまで断言するってことは一体どんな方法なんだらう。こちらから聞いといて悪いが少し怖くなってきた。

「主、わしがお主にとり憑いてまでやり遂げたい理由を覚えているかの？」

「え？ あ、はい。確か自分を殺したやつに復讐？ でしたっけ？」

「ふむ、大体そんな感じじゃ。じゃがわしはどうやってそ奴に復讐する？ 体もなければ力もほとんど残っていない、今のわしに」

「えっと、嫌ですけど、例えば僕の体に入って戦う………ですかね？」

「それは無理じゃ。奴はとても強い、フルパワーのわしでも太刀打ちできんかった程にの。闘ってもお主の体じゃすぐに壊されてしま」

さらっと恐ろしい事を言うなあ………。

「そ、それじゃどうすれば？」

「わしは今、お主にとり憑いていることによつて、少しずつ本当に少しずつじゃが力を蓄えて昔のわしに戻ろうとしている。じゃがわしの力が完全に戻ってもお主の体じゃ満足に戦えん、じゃからわし

には生身の体、つまり肉体が必要じゃ」

「え、今のシロさんの状態は実体じゃないんですか？ てつきり他の人に姿を見せる時にあるあれは実体かと思ってました」

そう、今はシロさんも姿を現しており、他の人の目にも映っている。だからシロさんの美貌と、その珍しい服装に周りにいる男性達は、先程からシロさんをガン見してる人がちらほらという。

「うむ。確かにわしの今の状態はお主以外の者に見える、じゃがなお主。今の状態のわしに触れた事はあったかの？」

「……いや、ないですね。あ、もしかしてシロさん」

「その通り、わしには人も物も触ることは出来んし、誰もわしに触れない、見えるだけのただの幽霊じゃ。じゃからわしには肉体がいる、実体があれば触れるし食べる事も出来る」

「じゃあ簡潔に言つと、いったいどうすればシロさんは実体を手にする事が出来るんですか？」

「その方法を今言つ。きつとこれを聞けばお主達の気も変わるじゃろつな」

ごくつと無意識に唾を飲み込む僕、マナも少し不安そうな顔でシロさんの言葉を待っている。

「ずぼん」

「ずぼん」

「ずばりっ!?!」

一番目にシロさん、二番目に僕、三番目にマナが声を揃えてシロさんの言葉を復唱した。

「特にな〜んもないわい」

.....???

一時停止、思考が完全ストップ。

世界が止まったんじゃないかと錯覚してしまうくらい時が止まった。

「わっははははは、ひっかつかたの〜!や〜いや〜い。あ〜腹がいたいわっ!」

「へ?.....えつとお、え?」

「じゃ〜か〜ら、全部ウソっぱちじゃ!そんな深刻になるような方法など無いし、それに本当はわしに食欲などいっさいないわっ」

「つ、つまり今までの素振り、全部.....演技?」

「うむ、その通りじゃ。よく考えてみい、死んだ者に食欲などあるわけなかるーにっ!実体も時間がたてばその内力が溜まり勝手に手に入る筈じゃ。すっかり騙されおって、本当面白いやつじゃなお主達は」

わっはっはっは、いつものもの狂ったような笑い声を上げ、周りの人

々はビクリと一歩後ずさっていた。

ピキピキピキ。

「さっ。マナ、そろそろお店行こうか」

「うん、そうだねっ。お腹ペコペコだよ」

満面の笑みで僕とマナは店に向かって歩きだした。目だけは完全に笑ってなかったが。

「ぬ、お主達どうした？」

「あそこはね、鳥料理がとっても美味しいんだよ」

「本当！？ やった！ たつのしみ」

「おゝい、無視かの？」

「今日は勿論僕がおごるから、好きなだけ食べていいからね」

「うわ〜！ クロちゃん太っ腹！！ よっ！ 質実剛健！！」

「ぬぬぬぬ」

僕とマナはシロさんの存在を、頭の中から完全に除外して、歩みをさらに速めた。

後ろから「すまん〜！」「孤独じゃ〜！ 孤独は嫌じゃ〜！」「ほんの可愛い悪戯じゃよ！？ おべっかが過ぎたかも知れんが、それが

わしじやる!?」と雇気楼のような声が色々と聞こえたが、きつと僕達には関係ないので気にせず店へ向かった。

お店で食事をしている最中も、ずっと謝罪のような言葉が聞こえていたが、きつと僕達には一切関わりがないので、美味しく食事を頂いて宿屋へ帰った。

牧師を務めている事がバカバカしくなるほどの、久々の憤りだった。

## 第九話：事件

チュンチュンと雀の音が、朝早くから空に木霊しているのが聞える。今日も早朝に目が覚めてしまったようだ。この時間帯からしてきつとマナはまだ寝ているだろうな。

隣に目を向けると、綺麗な朝日を浴びた、神々しくて真っ白な壮麗な女性が窓際に座っていた。

「……………妖精さん？」

「たわけっ」

どうやら謎の妖精さんの正体は、シロさんだったようだ。ま、だろっね。朝日を目一杯浴びてるせいかな、さらに白さが強調され、どこか幻想的で美しかった。

「目が覚めたか？ 主」

「あ、はい。それよりシロさん、今日は随分と早起きですね。早起きだとしても早すぎるくらいですよ？」

「ふむ。いきなり目が覚めてしまったの、昇ってくる太陽を見ていたら、すっかり目が覚めてしまったわ」

そう言ってシロさんはシニカルに笑った。しかし、今度は悪戯っぽい笑みを浮かべこちらに近づいてきた。

「ふふふふふ」

しかも口を引きつり、不気味な笑い声を出しながら。

「な、何です？」

「そらっ！」

どんっ！といきなりシロさんの手が僕の胸に伸びてきて、僕を後ろにおもいつき張り倒してきた。

「うわ、うわわわわわ。ぎゃふっ」

何とも間拔けな悲鳴とともに、僕は無残にも後ろへ倒れてしまった。布団が敷いてなかったら、朝っぱらから頭を強打していただろう。

「いきなり何するんですか！酷いじゃないですか、いきなり僕を張り倒すなん……て。あれ？」

「ふっふっふ」

おかしいな、シロさんには肉体が無いから僕に触れる事が出来ないはずだ。現に昨日、シロさん自身が色々と言ったではないか。なのに昨日の今日で僕は今こうして、シロさんに張り倒されているのだ？。

いったい何が起きたのか、脳内が完全に混乱してきて言葉が思いつかない。

「その様子じゃ相当混乱しとるようじゃのお。ふふふ、そろそろ種

明かしをしてやるかの」

勝ち誇った顔で、バシツと僕に人差し指を突き付けてきた。

「なんと！肉体が手に入る力が溜まりおった！！！」

無い胸を自慢げにそらせ、ふふんっと子供のような自慢げな顔をしてこちらの反応をうかがっている。

「あ、えっと。おめでとございます」

律儀に頭を軽く下げ、僕がそう言った瞬間シロさんの顔が一気に変わり、眉間にしわがよりはじめて明らかに『はあ？ つまんね』とゆう顔をしている。

「なんじゃ？・・・その無愛想な反応は？」

「いや、えっと、すみません。僕、まだ頭の整理が追いついてなくて、驚くところなのは分かっているんですが、どうもつまくりアクシヨンが」

「なんじゃ、ならちゃんと驚いてるのじゃな？ ならもういいわ。さてお主、わしに聞きたいことがあるじゃろう？ 浅慮せずに言うてみい、今日のわしはすべての生物より寛大じゃ」

と、シロさんは期待に満ちた顔で僕に問いかけてきた。ここでまた気にそぐわぬ事をしたら、肉体を手に入れた祝いに絞殺されそうだ。

「えっと、ではまず。シロさんって、僕にとり憑いて今日でまだ三日目ですよ？ その、元の力を取り戻すために力を蓄えるのって、

そんなに早く溜まるものなんですか？ 僕はてっきり何か月、何年もかかるんじゃないかって思ってたんですが」

「ふむ。まあ、その通りじゃの」

そう言って、またシニカルに笑った。どうやらお気に召した回答だったようだ。

「実はわしも内心かなり驚いておる。力が溜まるのはこんなに早くはないはずじゃ、まさに異例、異端、不可思議、謎が謎を呼ぶ……。まだ完全ではないが、肉体が手に入る程回復したとはいくらなんでも早すぎる。これはわしの推測じゃが、これはきつとお主が関係しとるんじゃないかと思う。いや、それ以外考えられんし、ありえん」

「僕、ですか？」

僕が関係してるだつて？ まさかそんな、思い当たる節といえば自分の職業が神の教えを説く牧師だとゆう事くらいだ。それ以外僕に神様と特別な接点など無い。

「わしはお主から力を貰い、少しずつ溜めて回復しとつた。今まで伏せておつたが、もうよいじゃろう」

と、シロさんは少し間を開けて口を開いた。

「厳密に言つと、その力とは『魔力』じゃ」

「魔力ですか！？ そんな力が本当存在していたんですか！？」

驚きのあまり無意識に声が大きくなってしまった。しかし、それほどまでに驚きの事実だった。なぜなら魔力というのは。

「うむ。人間には一人一人に魔力が備わっており、その量は個人差がある。しかし、今の人間には自分に魔力があるかどうかなど、わしのような者に教えてもらわねば一生気づかぬ。いや、もう気づく者はおらぬ、と言った方が正しいかの。それに例え魔力の存在を知ったとしても、使う術を知らんからの」

まさかそんな、魔力というのは大昔、人間が自在に扱えたと聞いた事がある。しかし、人間は欲深い生き物、その強大な力のせいで沢山の地で戦争が起こり、大地を焦がし尽くした。それに憤怒した神が、人間から魔力を使う術を取り上げた。だが、一人一人に必ず魔力があるなんて初めて聞いた。そんな記録は当然残って無く、それ以前に魔力の存在を信じている人など、今の時代学者などくらいしかない。

しかし今話を聞いて、一つ思い当たる事があった。それは神木を採りに行ったあの森で、僕とマナが昼食を食べる時、シロさんは少しその辺を散歩すると言って行ってしまった。あの時は僕から力を貰えば、その分遠くに行く事も出来るって言っていた。あの時僕は今まで感じたことのない、不可思議な疲労感を感じた、もしそれは僕の魔力を、人生で初めて削ったから、そう考えれば辻褄が合う。

「神には魔力を使う知識を持っており、じゃからつねに万物の頂点にあり、神という完全な存在として扱われておると言っても過言ではない。逆を言えば魔力とは、使用では神にも匹敵する力なのじや。しかし、お主と出会った頃のわしには魔力が完全に無くなっておった、そのせいで自分の力で魔力を回復することが出来なかった。そこでお主から少しずつ分けてもらい、力を取り戻す計算じゃった」

「成程……。魔力つてのは完全に無くなると、自分では回復できないんですか？」

「ふむ、そうじゃ。人間は魔力を完全に使い切ってしまうと、もうその者に魔力が戻る事は無い、神は例外じゃがな。しかし、神であろうと魔力が底をつけば他人から分けてもらわねばならない」

そう言い終わった後、シロさんは一瞬暗い表情になったが、すぐにいつもの不思議な笑顔に戻った。

何だ今の表情は？ 少し考えてみると一つ思いついた事があった。もしかしたら昔に自分を殺した存在を思い出したのかもしれない。これは僕の推測だが、シロさんの魔力が完全に無くなったのはその存在のせいなんだろうか、それとも死んでから、自然に風化してしまったのか。

「さて。説明は大方終わった、つまりそういう事なんじゃよ。どれ、そろそろ飯にしようではないか、久々の食事じゃ、財布の中身は多めに持っていくとよいぞ」

「えっ！？ シロさん昨日、自分で食欲などないって、もしかしてまた嘘ですか！？」

昨日あんなに懲らしめたのに、まだ嘘をついてたのか！？

「まあ落ち着け、確かに食欲は無いと言ったが決して食べれないとは言っていない。現に体も戻ったんじゃ、ここは一つわしの体が戻った事を祝して飲んで食べ尽くそうではないか。それに、これからもお主達の食事に付き合っつて、いつまでも指をくわえて見ているのも

我慢できんっ」

「はぁ・・・分かりましたよ。少しは食事代気遣ってくださいよ、昨日のマナとの出費も凄かったんですから・・・。僕だってそんなに給料良くないんですよ」

「何じゃ何じゃ、そんなにけちけちするでない。ささっ、とっととマナを起こして行くぞよ」

くう、三人分の宿代に、昨日聖堂に行った時にお布施とゆう、大義名分を掲げた祭司にお金をかなり取られたし、とどめはマナの食事代!!もう僕は破産しそうで泣きたいくらいだったのに・・・。てゆうか、シロさんは宿に泊まる時は姿を消してくれよ!!。

そう言えば、さっきは魔力の話で本題とはそれしてしまった。結局、驚異的な速さで力が回復していく事と、僕の関係の話が止まったままだ。

だが今の状態のシロさんは、体が戻った事でいつにもなく上機嫌だ、さっきの話を蒸し返せな雰囲気ではないし、とりあえずは保留で。

仕方ない、朝食を食べて一息ついたらまた後で聞いてみよう。

「それじゃ、マナを起こしに行きましょうか」

「うむ、そうじゃな。しかし、肉体が戻ったのはいいが、長い間浮遊状態で慣れてしもつたしなあ、正直疲れるのお。よっ」

よっとゆう掛声を合図に、シロさんの足が少し宙に浮き始めた。



今僕達は東区から街の大広場に向って歩いてるところだ。あの後マナに事情を話し、マナはシロさんが食事ができるようになった事にとっても感激し、すぐに着替えて出発したのだ。ちなみに説明が長くなるので魔力などの話はしていない、後々話してやるうと思う。

「またあそこですか？　まあ、いいですが。マナはいいかい？」

「うんつ。全然おっけ。あそこ美味しかったしね！」

マナはいつもと変わらず、朝から太陽に負けなくらい、満面の笑みを浮かべている。

「いやいや楽しみじやの。．．．ん？．．．．．なんじゃあの人だから？」

シロさんが指をさした方向に目を向けると、こんな朝早くから大勢の人々が集まっている。

どうも人々が集まっている場所は、東区から大広場に向かう途中の道であったので、無視するわけにもいかず行ってみることにした。

復活祭の日に起きた過去最悪の事件、それに僕達は巻き込まれて行く事も知らずに。

## 第十話：悪夢

「何か沢山人がいるね、死屍累々みたいだよ」

「マナ、勝手に殺しちゃダメだよ」

人だかりに近づいてから、マナが発した珍発言に適当にツッコミを入れて、周りの人々が見てる方へ僕も顔を向ける。

しかし人がかなり多くて、一体何が起きたのか確認することが出来ない。あ、別に僕の身長が低いとか、マナより若干、そう若干小さいとか、そんな理由で見えない訳じゃないよ？。

仕方ないのでシロさんに頼み、空から何が起きたのか教えてもらうことにした。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『どうかしましたか、シロさん？』

シロさんは今空に浮いているので、他人には見えない状態に切り替わっている。だから、空に向かって話しかけるわけにもいかず、心の中でシロさんに問いかける。

『お主達は見ぬ方がいい』

シロさんは、そうキツパリ言い放った。

『えっっ』

『とても悲惨な光景じゃ、朝っぱらから嫌な光景を見てしもつた』

そう言つてフワフワ降りて来て、人が見ていないのを確認し姿を表した。シロさんの顔色から少し血の気が引いていて、瞳が少しだけうるんでいるよに見えた。

「マナ、特にお主は見ないように。見たらきつと好きな食事が出るかもしれないぞ」

マナに嚴重な注意を促し、シロさんは人だから離れて行つてしまった。

「どうしたんだろシロナちゃん。気になるけど、食事が出来なくなるってのは絶対にやだしなあ。うゝんうゝん」

少しの間マナの中で葛藤が起こつたが、やはり天秤は食事の方に傾き、僕に一声かけてシロさんの後を追つて行つてしまった。

一体なんなんだ？ どうも僕はこうゆう時だけ好奇心が高まるように、シロさんの不可解な言い回しが、僕の好奇心にさらに拍車をかけ、確認せざるおえなくなつた。

しかし見えないことに変わりがないので、僕はただ茫然と前の人の頭を見ていた。

そこへ、東区の宿の方から人が何人が走つてこちらに向かつて来る。数秒後すぐに姿を確認できた。服装は動きやすいハードレザーに、腰には一本の剣がさしてあつた。つまり、この人達は東区を担当している街の警備兵だろう。

東区からここ中央大広場まで走って来たと思われるが、やはり警備兵ただけあって息はまったく切れておらず、早速状況を確認して作業を開始した。

「みなさん、下がってください！あまり近づかないでください」  
2人の兵が集まった野次馬達を現場から遠ざけて、一人の兵士が何かを見下ろす感じで何かを見ている。その顔はシロさんが出した表情よりひどく、どんどん険しい顔になっていった。

「これは酷いな……。ケニー！本部へ連絡してくれ、あと死体を隠す布と運ぶための担架を4枚ずつ持ってきてくれー！」

死体？ 死体だって！？ 死人が出て、しかも四人も！先ほどまであった生ぬるい好奇心はすぐに消え、一気に僕の表情は真剣になっていた。

そこに街の市民と思われる女性が、なるべく死体を見ないよう顔を伏せ、死体を見ていた警備兵に近づき、何かを伝えている。

「なに？ はあ……。ケニー！担架を三つ追加してくれー！たくさん……。倒れるくらいなら、見にくんじゃねえよ……」

呼び止められたケニーとゆう警備兵は、こくりとうなずき北区にある本部へ向かって走るのを再開した。

どうやら好奇心にかられ、すぐに見にきた先頭の野次馬が死体を見て倒れてしまったのだらう。僕と同じ後ろにいて、状況が見えなかった人々も徐々に状況を把握し、顔色がみな青ざめてきた。

「隊長ー！これからどうしましょう？」

「まずは市民の安全が先だ、みなさん！よく聞いて下さい、死人が出ましたー！これから街は危険度のフェイズを上げると思いますが、みなさんは夜の外出を極力避けてください！それと・・・」

隊長と思しき人物は、周りの市民たちに状況を伝え、注意事項を色々と言っている。それを聞いた市民たちも、即刻まわれ右をし足早にこの場を去っていった。結局残ったのはまばらな人たちと僕だけになってしまった。

「ん？ そのあなた、今の話聞こえましたよね？」

死体を見ていた警備兵が僕の存在に気づき、こちらに近づいてきた。

「あ、はい。すいません、ボーツとしてしまいました」

「ひどい有様ですからね、あまり見ないようにして下さい。長年警備兵をしている私でさえ、少々きついですからね」

と、少し自嘲気味に言って、隊長の元へと行ってしまった。

今ならまだ死体をこの目で見れるが、恐怖からか、僕の体は動こうとせず固まってしまった。

ここで僕はある事を思い出した。

そういえばシロさん達どこ行ったんだろう？ とゆう疑問が頭に浮かんだので、結局シロさん達の後を追うことにした。

『シロさん、今どこですか？』

『今は宿屋に向かって歩いておる。まったく・・・今日は朝からついておる、と思つてたのにあの光景じゃ。食事は当分せんことにしとく、あんな光景、昔でもそうそう見れんかつたわ』

先ほどの警備兵の話から、現場の死体のあり様はだいたい想像出来る。やはりその光景を見たシロさんは、食事する気など吹っ飛んでしまつたのだらう。

『あとお主、あんまりわしから離れない方が身のためじゃぞ？ 離れば離れる分だけお主の魔力はわしに流れてくるからの』

そういえば、先ほどから体に不思議なだるさを感じる。しかもドンドンたるさが強くなってきてくる！明らかにシロさんに魔力をあげすぎてるせいだ！は、早くシロさんに追いつかなくてはっ！！

『つて！シロさんが近くで待つてればいいじゃないですか！！立ち止まつてくださいよ！』

『ふん、流れた時間は決して止まらない。じゃから後悔のないよう歩き続けなければならぬのじゃよ』

『何意味分かんないこと言つてるんですかっ！それでも神様ですか！？』

僕が抗議してる間にも、どんどんシロさんとの距離が広がっていくのをだるさで感じる。

とにかく早く追いつかなくては体が危険だ！。

僕は元来た道を戻り、宿屋に向かい走り出した。

だがこの時、僕は誰かにジツと見られていたことに気付きはしなかった。

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

現在の時刻はお昼過ぎ。宿屋の僕とシロさんの部屋に三人ともいる状況だ。

朝からあんな事があつたため、僕達は朝からまだ何も口にしていない。とゆうより、そんな気分ではない。しかし僕の意思とは反してお腹の空腹の鐘は常に鳴り響き、お腹の中の虫は騒ぎっぱなしだ。

シロさんは宿に着くなり『ちと考え事をしている、少し話かけなくてくれ』と言い、今もまだ腕を組み考え事の真つ最中だ。その表情はあまり良いは言えず、少し苦い顔をしている。一体全体何を考えているのか。やはり訊いてみたいが、今のシロさんの表情を見る限り、訊ける雰囲気ではない。

そして僕の隣にいるのは、うつ伏せのままぴたりと動かないマナだ。芋虫みたいにくったりと伸びており、無駄なエネルギーを消費しないようにする、マナの本能的な救済処置をしているが、ちゃんと呼吸しているのか心配してしまうぐらいの無動作だ。

原因は勿論言うまでもなく空腹だろう。シロさんは今こ挺でも動かない状態なので、無理に外に行く事も叶わず、今現在まで飲まず食わずなのだ。

やばい……ついにお腹の虫達が暴動テロを引き起こしそうだ……。

そんな、限界に達する時。

「ふむ、これは困った事になったかもしれんの」

数時間ぶり、ついに朝から閉ざされていたシロさんの口が開き、困ったようにさらに呟いた。

「しかし何故？ どうしてじゃ？」

「シロさん、どうかしたんですか？ やっと口を開いたらと思ったら、何か問題でもあったんですか？」

「そうじゃな……お主にも話した方がよさそうじゃ」

「？ それで一体なんです？」

「先ほどの事件、死体が四人ほど出たじゃろ？」

「僕は実際には見ていないですが、確か四人出たと耳に聞きましたね」

現場で会ったあの警備兵の話声を思い浮かべる。

「あれは確実に殺しじゃな、しかもただの殺しではない」

「と、いいいますと……？」

何かただならぬ予感に、ごくりと唾を飲み込む。

「あれは人による殺しではない。あれは多分、わしのような存在がやったんじゃないかと思う」

「つまり・・・人ではない、神様が人を殺したと!？」

思わず声が裏返ってしまった。しかし、それほどの衝撃の発言だったのだ。

「うむ、多分じゃがな。かすかに死体から魔力の痕跡を感じた。つまりこの世で魔法が唯一使える、神が犯人だとわしは思う。人間にも魔法が使える奴がおるなら、話は別じゃがの」

「でも、もしシロさんの仮定が正しかったら、この街にいる神はシロさんだけですよね？ シロさんが犯人じゃなかったら、その仮定は間違いなのでは？」

「いいや、それは違う」

「え？」

「もう一人おるではないか、昔っからずっとこの街を守ってきた神がの」

その答えはすぐに分かった。が、しかしそれはありえない!何故なら彼女は。

「そんな・・・シロさんは彼女が生きていたんですか？」



数時間ぶりのパンの味は、脳が裏返るほど旨かった。

お昼ご飯をすませた後、僕達三人はまた大広場に向かった。

いつもは賑やかな筈この場所も、朝の出来事により今では小鳥のさえずりしか聞こえてこない。さらに今日は『復活祭』の日、『復活祭』当日にこの様な事件が起きるなど異例の事で、夜行われる予定だった『復活の儀』を中止か、決行かどうかを街のお偉い方は急いで検討しているらしい。

「クロちゃん、今日いつたいどうなっちゃうんだろうね・・・」

マナは珍しく元氣のない声で僕に尋ねてきた。

「今日に限って四人もの死体が見つかったとなると、まだ何とも言えないね」

僕の言葉を聞いた途端、マナはさらにしょんぼりした顔になり、いつもの明るさはまったく感じられない。

「だ、だけどさっ！『復活祭』は毎年欠かさずやっている、この街の最大の行事なんだよ！きっと今年もやってくれるよ、ね？」

僕は慌てて言い繕い、マナもそれを聞いて少しだけ笑顔になってくれて、ほっと胸をなでおろした。

特に目的はなかったのですがそのまま西区に入り、ぶらぶらと観光して十分にマナを楽しませ（依然としてシロさんの顔は険しいままだっ

た）時間を潰し、ついに復活祭の儀が始まる、闇夜の時間になった。早速会場の中央区の大広場に向かったが、事件のせいかまだ人は完全には集まっていなかった。よく見てみると、何やら人々がみな一つの看板を見ている。

あんな看板お昼に通った時は無かったのに、貼り紙でも貼ってあるのかな。

何とか人ごみを押し分け、看板に近づき貼ってあった貼り紙を読んでみる。

【今日の朝方、殺人事件が起こりました。犯行は非常に残酷であり、今日に事件を起こしたのも計画的な犯行と思われる。これは我々の偉大なる神、ダンクネス様に対する暴挙であり、最悪の冒瀆である。犯人の目的は、恐らくこの『復活祭』の中止が目的だろう。だが、このまま中止にしては犯人の目的を達する事になる。毎年行われている、伝統的な『復活祭』を中止にするのは誠に遺憾であり、だからして今年も平年どおり『復活祭』は執り行う事にする。しかし、事が事なので復活祭は明日に延期するものとする。市民達には、どうか配慮ある見解をお願いする。】

張り紙の内容を一通り読み終え、どうやら明日に延期された事が分かった。

「なんじゃ？ 明日でもよいのかの？ 今日やってこそ『復活祭』ではないか」

「僕もそう思います。だけど、この貼り紙を出したのは大祭司様ですからね、街の人々も納得するでしょう」

『ふむ』とシロさんは少し考え。

「大祭司とはそんなに偉いのかの？」

「大祭司様は、宗教的立場では一番高い位ですからね、別に教祖様とも呼びますし、読んで字のごとく教えの祖である人ですから。えっと、簡単に説明すると偉い順番に、大祭司、副祭司、祭司、修練士、そして多くの信者たちですね。この街の人々はダンクネス教の信者ですから、大祭司様の命令には逆らえませんが、逆らえばそれはダンクネスに逆らうことを意味してますから」

「なるほどのお、しかしお主詳しいな」

「はい、僕は牧師ですからね」

「ああ、そうじゃったな」

あれ？ 僕の職業を忘れられていた・・・？ 神に仕える仕事なのに、神からこの仕打ちかよ！。

「と、とりあえず。明日に延期されたなら、今日は大人しくもう宿に向かいますしょう」

「仕方ないのお」

「りょうかい」

く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

宿に着き、宿屋の主人さんに簡単なまかない料理を作ってもらい、晩御飯も軽く終了した。(ちなみにシロさんは食べなかった)今日は割と出費が少なく、僕としては助かるのだが、お腹的な意味では助かってない。

マナは『それじゃ、また明日。楽しみだねっ！おやすみなさ〜い！』とお休みの挨拶して自室へ戻って行った。

僕とシロさんもすぐに自室へ向かい、早速就寝することにした。だが、シロさんはまだ寝ないといい、僕にひとつ頼み事を言ってきた。

「お主これから寝るじゃろ？　つまりしてお主は今日もう動かないとゆうことじゃ。じゃったら、ちよっとお願ひがある」

「ん、何ですか？」

「これからわしは一人で外に行く、もしかしたら少し遠いかもしれん。じゃからお主からそれなりの魔力を頂きたいんじゃが」

「え、こんな時間に一人で外に？　一体なんの用でしょうか？」

「すまん、それは言えん。じゃが、いずれちゃんど話す。じゃからここはわしのお願いを聞いてくれないかの？」

シロさんの目を見ると、決しておふざけではなく真剣そのもの目であつたので、快くお願いを聞いてあげる事にした。

「分かりました、シロさんも何百年ぶりに街に来たんですもんね、一人で行きたいとか多々あるでしょうし」

「ふふ、お主分かっておるではないか。なら遠慮なく魔力を貰っていくぞよ。結構の量を持っていくと思うから、お主は明日起きるのが遅くなるかもしれぬが、我慢してくれ」

「はい、分かりました。全部持っていかないで下さいよ?」

少し茶化すように僕は言い。

「分かっておるわ、心配せんでいい」

シロさんも柔らかな笑みを浮かべた。

「それとお主、一つ注意することがある」

だがすぐに笑みは消え、シロさんはまた真剣な顔になる。

「何でしょうか?」

「あの事件の犯人、もしかしたらこちらに接触してくれるかもしれない」

「え! あちらから接触ですか?」

「うむ。わしのような存在があるから、この場所もすぐにつきとめてくるかもしれん。狙いは分からんが、きっと近いうちにこちらに来るはずじゃ」

「そうですね・・・気をつけます。注意ありがとございます」

具体的に何か対策が立てれる訳じゃないが、心の持ちようは大事だ。



「すみません、あの後早速疲れが来て、すぐに寝てしまいました」  
体をゆっくりと起こし、シロさんから懐中時計を受けとり、首に掛ける。

「えっと、あれ？ シロさん、マナはまだ起きてないんですか？」

「ん。そういえば、今日はまだマナの顔を見ておらぬの。まだ寝ておるのではないか？」

「そうかもしれないですね。なら、そろそろお昼なのでちょっと起こしに行つてきます」

まだ少しぼやけた頭で部屋を出て、寝起き眼のまま隣のマナの部屋の前にやって来た。

まだ頭がよく働いてなかったからか、僕はノックの事を忘れていて、そのままドアノブに手をかけた。

その時。

ブワワワワッ！と何かが背筋に伝わり、突然に胸騒ぎがした。一気に冷汗が出て、ぼやけていた頭も、すぐに活動し始めた。

な、なんだこの感じは!？

蛇に睨まれた蛙みたいに動けなくなり、ドアノブを握ったまま固まってしまった。身動きが取れなく、手の甲に物凄い量の汗が噴き出てきて、ドアノブがだんだん濡れてきた。

すると頭に何かがよぎった。

それは昨日の夜寝る前に言われた、シロさんの言葉だ。

も、もしかしてマナの身に何か起きたのか!!!?

だが、体は僕の思いと裏腹にまったく動かない。一体何分間この体勢でいたかもわからぬまま、必死に僕は体に命令する。

動け！動け！動け！動け！動け！！！！

ガチャツとゆう扉が開く無機質な音が鳴った。

扉は古いらしく、油を随分とさしていないのか、そのままキキーンと甲高い音を鳴らしながら、一人で内側に開いていく。

そして僕はやっと、部屋の中をこの目で見る事が出来た。

そこには血だらけでベッドに寝ている、マナの姿があった。

## 第十話：悪夢（後書き）

どうも葦原です

何とか10パートまで続けることが出来ました（汗）

これも僕の小説を読んでくれて、みなさまのおかげです！

まだまだ文章に拙い部分がありますが、これからもよろしくお願ひします。

## 第十一話：片翼の天使

「マ……マナ？」

ガクツと力なく膝が折れ、そのまま座り込んでしまった。

なんだよ……これ？ これじゃまるで……。

「お〜い、一体いつまで起こすのに手こずってるんじゃない？」

この場にそぐわない、のほほんとしたシロさんの声が聞こえたが、返事をしようにも口も体も力が入らず頭の中も真っ白で、ただ茫然としている事しか出来なかった。

シロさんも何か異変を感じたのか、隣の部屋から小走りで僕の元へ駆け寄ってきた。

「主!!どうした!?! しっかりせい!どうしたん……ッ!  
！」

シロさんの表情が一瞬にして固まった。その顔は部屋の中に向いており、どうやらベットの上的存在に気づいたようだ。

しばしの沈黙の後、僕の耳に思いもよらぬ言葉が聞こえた。

「ふう……お主そこで伏せておいて、ついておったの。不幸中の幸いと言ったところか？」

「……え？」

今の僕がついていたって？ その言葉がさらに僕の頭の中をグチャグチャにかき回し、謎に引き込んでいた。

「お主、落ち着いて見るんじや。何か変だとは感じないかの？」

こんな状況に落ち着けとゆうほうがおかしいと思うが、相手はシロさんだ。僕は出来る限り、落ち着くフリをした。

変？ シロさんは何が言いたいん……？

あれ？

「血の匂いが……しない？」

そうだ、この部屋から血の匂いがまったく臭わないし、勿論外からもまったく臭わない。部屋の中はきちんと整頓され、床もゴミが少なく、それなりに清潔感が漂っている。真赤になったベットを見た所、大量の血が流れている事は確かだ。だがこの部屋はなんだ？ マナを死体としてまだ定義したくないが、死体からはまったく悪臭一つ漂ってこない。

「その通りじや。それにあのベットよく見てみい、何か思わぬか？」

ベット？ 僕は言われた通りマナの下にある、血だらけのベットを見た。ベットはマナの血を吸って真っ赤になっており、元の純白の白さが失われている。あのベットを見る限り、相当の量の血が流れているのが推測できる、しかし一つだけおかしな所があることに気がついた。

「あれ？」

ベッドの下の床に、血が垂れていないのだ。それも一滴も。

大量の血が流れてベッドに染み込んだのは分かる、シーツは薄いからか端から端まで真赤に染まっている。なのにシーツの端からは血の滴が垂れていない。普通なら血がゆっくりと端に集まり、滴が床にぽたぽた落ちるはずだ、だが床には血のしみすら見つけられない。まるでベッドと床が隔離されているような、そんな感じだ。

「あれは作られた虚無、ない存在。つまり畏じゃ」

「わ、畏？」

「あのベッドから魔力を感じる、しかもかなり強力じゃ」

そう言つと、シロさんは僕の方を向き右手を僕の首へ伸ばしてきた。

「すまん、ちと借りるぞ」

シロさんが右手を引くと、そこには何かを握っていた。

「あ、僕の懐中時計」

僕の懐中時計で何をするのかな？ と思って見ていたら、次の瞬間シロさんの行動に目を疑ってしまった。

『よっ』とゆう掛け声と一緒に、懐中時計をベッドへ投げってしまった。

懐中時計は宙でぐるぐると回りながら、綺麗に弧を描きベツトに吸い込まれてしまった。この吸い込まれたとゆうのは比喻ではなく、言葉通りでそのままベツトに吸い込まれてしまった。何度よく見ても、僕の懐中時計はどこにも見当たらない。

「なっ！」

「やっぱりの」

今ので確信を得たのか、シロさんは何か考え込んでしまった。

僕はこの状況に完全に取り残されてしまい、呆然とシロさんの顔を見てるしかなかった。

じゃあマナはどこにいったんだらうか？　そして僕の大事な懐中時計もどこにいったんだらうか？

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

「じゃ、じゃあマナは生きてるんですね!!?」

声が裏返り、ほぼ悲鳴のように僕は叫ぶ。

「うむ。おそらくマナは人質みたいなものじゃらうな。まさかこんなに早く接触するとはの・・・不覚じゃった。お主に責められても、何も言えせぬ。すまぬ」

現在時刻は太陽が真上に上ったばかりの、お昼まったただ中。今日も空は青く澄み渡っており、先ほどの光景とギャップが強すぎて、何

か違和感を感じてしまう。

あの後僕の部屋に戻ったが、シロさんは色々と分かっているようだから、休む間もなく僕は質問攻めしてるところだ。

「い、いえシロさんの事は気にしてません。だけどマナの事は別です、マナは今どこにいるの分かります？」

「それが分かれば苦労せん。少しは落ち着け、きつと危害は加えんはずじゃから」

僕はとりあえず二三回深呼吸をし、何とか精神を安定させた。

「……すみません、とり乱しちゃって」

「いや、そうじゃな。取り乱すなとゆう方がおかしかったの。まず、じゃ。これから色々と説明するから、質問などは後じゃぞ、よいな？」

シロさんの口調はとても冷静でいて静かだった。

「今回の一件、恐らく犯人は昨日起きた殺人事件の犯人と同一じゃ。さらにわしには犯人が誰なのかも目星もある」

「え！本当ですか？ いったい誰で」

あ、いけない、質問してしまった。シロさんがじーっと僕の目を見つめて来たので、目で「すみません」と謝った。

説明は続く。

「わしは最初、昨日までは犯人はダンクネスかと思っただけじゃ」  
やはりダンクネス！？ この街を守ったあの女神が？ だがしかし  
過去形とゆうことは違っただのか？

「最初はダンクネスかと思っておったが、結局違っておった。じゃ  
が本当の犯人も分かった。そして何故そいつがわし達は狙うかはわ  
しの存在が原因じゃな、理由はまだ分らんがこれは確実じゃろう」  
犯人はダンクネスかと思われた違っていた、じゃあ一体誰が？ だ  
が、少なからず犯人は人間ではない事が分かった。

「大雑把じゃが、簡単な説明はこれで終わりじゃ。お主の顔を見た  
所まだまだ疑問だらけじゃろう？ 質問を許すから行ってみい」

質問が許されたので、僕は最初に訊きたかった事を口にした。

「何でシロさんはダンクネスが犯人だと思っただんですか？」

「昨日見た死体の体中から、今日ベットで感じた魔力と同じ魔力を  
感じた。魔力の存在、これで犯人は限りなく絞られる、さらにこの  
街にはダンクネス神がおった、安直じゃが最初に疑いが行くのは自  
然とダンクネスとゆうわけじゃ」

「成程、でも違っただんですよね？」

「うむ。昨日の夜にある者から話を聞けたんじゃ、それで真犯人が  
誰なのか分かった」

ある者？ なぜ伏せているんだ？ しかもその人に会って新犯人が分かったとは、一体誰なんだ？。

「夜とゆうと、僕が寝る前にシロさんが一人で外に行った時ですか？」

「そうじゃ」

昨日の事件から既に僕達は巻き込まれていたのか。確かにシロさんの推理通りダンクネスが一番怪しい、だけど彼女はこの街の幸福の女神である、動機もまったく分からない。結局犯人は違ってしたが、それじゃほかに誰がいるんだ？

「あ、そういえばあのベット、一体なんだったんです？ それに僕の愛用の懐中時計もどこに……」

「あれは魔力を根源に作った異空間の入口、あそこに触れると前もって作った出口に出る仕組みじゃ。マナの死体や血は、お主をベットに誘い出すために作った幻影じゃな」

「僕を誘い出すって、何で僕を？」

「それはこれから訊きに行く。そろそろあやつもわし達に会いに来るじゃろ」

「え！？」

相手は仮にも殺人犯だ、しかも人間ではない存在。

神。

その言葉が頭をよぎった。それ以外に考えられない、魔力は神にしか使えないとシロさんが言っていた、なら相手は神なのでは？ こちらはただの人間一人に、力を失った戦士の神、さらに相手にはマナを人質に取られている。もし戦闘にでもなったら確実にこちらには勝ち目がない、そんな絶望的な状況からマナを救いだす事が出来るのか……？。

「あんまりしけた顔をするでない、こちらまで暗くなってしまうじやろ。大丈夫じゃ、相手は人質を取った、つまり相手はこちらと交渉をしたいんじゃない、少なくとも最初は争い沙汰にはならん」

シロさんの顔は微かに微笑んでおり、僕に気遣って明るいう口調で言った。

まったく根拠など無いのに何故だろう、シロさんの言葉は力強く、不思議と安堵感が湧いてきた。

「そうじゃ、外に行く前にお主に伝えたい事がある」

「？ 何ですか？」

「昨日の夜、ある者に会って話を聞いたと言ったじゃろ」

「言っていましたね、そのある者っていったい誰ですか？」

「それを今いう」

ふとシロさんの顔を見ると、どこか悲壮感を感じさせる表情だった。この時僕には

まだその表情の意味が理解できなかった。

「朝見た死体がどうも頭から離れなくての、そこで夜お主に頼んで外に出てみた。わし一人なら何か掴めるかと思ってふらふらと街を回っておったんじゃ。月が雲に隠れ、闇が完全に街を覆ったその時じゃった、あやつに会えた」

「名は……」

〽

昼の街は賑やかでいて、さらに今日は『復活祭』を行うのでそれが拍車をかけて、街は大いに賑わっていた。

昨日起きた事件など本当にあつたのかどうか疑ってしまうほど街は活気に満ちていた。誰一人昨日の殺人鬼に対して恐怖心を抱いてないような、何故かそんな風に見えた。

「なんじゃなんじゃ、誰も怯えておらぬの。どうなっておるんじゃ？」

「多分大祭司様が『怯えるなダンクネスの信者達、我々にはダンクネス様が見守ってくれておるのだ！きつとこれはダンクネス様が我々に与えてくださった試練なのだ！』みたいな感じで言えば、民はきつと元気になるでしょうね、大祭司様の言うことは、ダンクネスの言葉、正しき言葉、みんなそう思ってますから」

「ふんつ。殺人が試練とは片腹痛いわ。さらにその言葉を信じて疑わないとは、哀れを通り越して滑稽じゃな」

『ええ、確かに滑稽ね。ふふ』

「!」

何だ！？ 今の声は一体どこから？ 急いで警戒心をむき出しにする。

いきなりの声で、シロさんも警戒しながら、注意深く周りを見ている。

僕も周りを見回してみる。そこである異変に気づいた。

止まっている。

人が。

風が。

物が。

空が。

時が止まっている。

先ほどまで賑わっていた街は完全に静寂に包まれており、周りの通行人達は石像のように動きが止まっていた。空を飛んでいる鳥たちも空中で固まっており、まるで空気まで止まっているのではないのかと錯覚し、思わず呼吸が苦しくなる。

今この世界で動いているのは、僕とシロさん、それに謎の声の主だ

けだと直感して分かった。

「お主！そこじゃ！」

シロさんは声の主を見つけたらしく、右前方斜めに指さした。

僕も慌てて顔を指さした方へ向いた。

そこには片翼の天使が、僕達を見下ろしていた。

## 第十二話：命の選択

そこには女性の天使がいた。

自分以外のすべての存在に興味がなさそうな虚ろの目、なのにごくか物悲しい雰囲気を感じる。

目の前の異常な存在に、僕は知らぬ間に一步後ずさっていた。

歳は20代くらいの容姿、所々はね放題のぼさぼさな真っ黒い髪。あの虚ろな目に、背中には左右に大きな翼が生えている。だが、左の羽は途中でなくなってしまうている。まるで誰かにむしりと取られたような、そんな有様だ。

僕は彼女を見て反射的に天使を思い浮かべた、だがよく見て考えてみると天使とは大きくかけ離れた姿だった。

特に、背中に生えている翼は、天使とは正反対の真っ黒い漆黒の翼だった。

「本当、人間って醜くて汚い種族ですわよね。いいえ、世界そのものが汚いからかしら？」

上空からは、冷めた声が雨のように降ってくる。

!？。

突然、彼女を見ているとすさまじい恐怖心が僕を襲ってきた。耐え切れず顔を背けようとした、が、出来なかった。僕は金縛りにでも

あつたのかの様に、一步も動けなくなり呼吸すらままならない。

な、なんだこの力？ 指先すら動かせない・・・これじゃまるで蛇に睨まれた蛙みたいだ。

そうだ、シロさんは！？

だがシロさんを見ようとしても首がまったく曲がらない。すぐ右隣にいるのに少しも動けない自分が腹立たしい。ただどうしようもなく、僕はかかしの様に突っ立っているしかなかった。

「おい、お主が殺人鬼・・・いや、今は誘拐犯じゃったな」

右隣からシロさんの声が聞こえる。少しおちよくった口調で言っているが、いつものシロさんからは考えられない、どことなく声が震えてるような、そんな風に聞こえるのは僕の気のせいなのか？。

「殺人鬼に誘拐犯、そんなの人間が人間にだけ付けられる愚かな名称ですわ。少なくとも私達にはそんな言葉、適用されないわ」

私達？ 一体誰のことだ？ 考えてみると、自然と僕はシロさんを連想していた。

「ふんつ。その愚かな言葉が今のお主にぴったりじゃと思うがの、それともちゃんと名前と呼んでほしいかの？」

「ええ、そうですね。丁度名乗ろうと思ってましたし」

スっと、急に金縛りが解け、僕の体に自由が戻った。ほんの数分の間だけだったのに、今感じている僕の体は、本当に自分の物なのか

と疑ってしまいうくらい脱力していた。

「名はルシユカと申します。シユカとでも呼んで下さいまし、今後ともお見知り置きを」

ニコツと笑って名乗ったが、目は完全に笑ってはいなかった。

「やはりお主がルシユカか・・・随分と変わったしまったようじやの」

「？ あなたとお会いするのは初めてのはずですが？」

シユカさんは不思議そうに首をかしげた。

「そうじゃな」

「?? わけの分からない事をおっしゃる神様ですね。さて、自己紹介はまだ終わってませんか、そのあなたは何とゆうのです？」

「えっあ、はい」

突然話の矛先が僕に向いて驚いてしまった。

とりあえず一旦落ち着け僕・・・ふー・・・ふー・・・ふー。

「僕はクロド・ノワと言います。小さな町で牧師をやらせていただいています」

「あら、ノワ様は牧師をやっていたんですか。成程・・・しかしただの一般人が一体どうしてその神様と一緒にいるんです？」



「てめえーら神はいつもえらそおに構えていて！何か起きれば私達  
天使に押しつけやがる！！手柄はいつも一人占めして！いつもいつ  
もいつもいつもいつも……！！！！！！！！！！」

狂おしいほどの痛みと絶望が彼女を支配していた。そのあまりにも  
の以上で狂ったな光景が眼下に広がってるせいで、尻餅をついたま  
ま立ち上がれない。

そして、またシユカさんは頭を抱えたまま固まってしまった。

その光景を呆然と見ていたら、横から手が差し伸ばされた。

「ほれ、いつまで座つとるんじゃみつともない。よお分からんが、  
今の内に次何が起きてもいいよう心の準備でもしとくんじゃ」

「あ、すいません」

僕は差し出された手を取り、何とか立ち上がった。まだシユカさん  
は固まったままである。

「シロさん、シユカさんって何者なんでしょうか？ 天使ってこと  
は今までの言葉を拾っていけば推測出来たんですが、それ以外僕に  
はまったく」

「悲しいやつじゃよ、あやつは」

「？」

悲しいやつ？ それは思いがけない言葉だった。一体前体何が悲し  
いのか僕には分からないが、もしかしてシロさんは何か知っている

のかもしれない。

「ふう」

またシユカさんの言葉が聞こえ、急いでシユカさんに目をやった。

今度は最初に会った時と同じ表情をしていて、声からも先ほどのような憎しみの感情は読み取れなかった。

「どうもすみませんでした。驚かせてしまったでしょう？ 私たまくに感情が抑えきれない時があつて、ついつい言動が暴走してしまふんです。だからこれからは言動に気を付けてくださいまし、運悪く殺してしまうかもしれませんから」

うふつと薄笑いを浮かべながら、シユカさんはさらりと恐ろしい事を冗談のように言った。

「さあ、お互い自己紹介も済んだことですし、そろそろ本題に入らせていただきますわ。この魔法もそう長くは続きませんし、手短かにお願いしますわ」

この魔法とは、万物に影響を与える程の恐ろしい現象の事だろう。

「あなた方も分かっていると思いますが、あなた達のお仲間のお嬢様は、今私の手の内にいます。目的を言いますと、私はノワ様との交渉をしたいんですわ。ただこちらには交渉に値する物がありませんでしたので、言い方は悪いですがあのお嬢様には人質になつてもらいました」

やはりこちらとの何らかの交渉だったか。一体どんな条件を提案し

てくるのか……僕は静かに唾を飲み込んだ。

「私の望みはその、シロナ様の完全なる存在の抹消ですわ」

「え？」

「良い返答が返ってくれば、あのお嬢様は傷一つつけずちゃんとお返ししますわ。けどもしも悪い返答でしたら、ふふ」

そう言つて、にこにこ笑いながらこちらの返答を待っている。

シロさんの顔は、驚いても無ければ、怒っても無い、まったくの無表情だった。この条件に対し、シユカさんに反論せず、ただ僕の答えを見守っていた。

この瞬間、僕はこの選択肢から逃れられなくなってしまった。

必死に考えて考えて考える。だけど答えは浮かんでこない、いや言葉の文字すら頭の中で紡ぐ事すら叶わない。ただ必然と、止まっている時間が経っただけだった。

「あら、やっぱりまだ決めるのは早いでしょうか？　なら今日の零時にて街の大広場でお待ちしてますわ。そろそろ魔法も解けますし、私もこの辺りで失礼しますわ」

「あ、待って下さい！」

僕は反射的に叫んでしまった。

「何でございましょうか？」

「えっと、そうだ。あのベットの罨はあなたが仕掛けたんでしょ  
う？ 僕があ罨にかかっていたら、どうするつもりだったんですか  
？」

「ああ、あれですか。あれはただの力試しですよ、その神様のね  
わざと魔力を消さずに作ったとゆうのに、隣部屋にいても気づかな  
いなんてびっくりしましたわ。もしノワ様がかかってしまったら、  
それはそれでこちらとしては好都合でしたので、どっちでもよかつ  
たんですけどね。・・・さて、もう私は行きますわ。ではまた夜  
に会いましょう」

にっこり笑って、シユカさんの体がどんどん薄くなっていき、後ろ  
の背景が透けて見えてきた。

結局答えを先延ばしにした僕を、どんな表情で見ているか気になっ  
てシロさんに顔を向けるとまだ無表情のままだった。

シユカさんの姿は完全に消え、瞬きの間に街は元の人々の声が戻り、  
止まっていた人々は命を吹き込まれた石像のようにまた動き出した。  
完全に時間の歯車は動きだし、先ほどの時間は幻想にも感じる。

シロさんの表情を伺うと何かを考え込んでいて、動き出した人々と  
は反対に動かなくなってしまった。

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

作戦会議と銘打って、僕は宿屋へ戻る事を提案した。

そして宿屋に戻ってから数時間、部屋の中で僕はベットに突っ伏していた。

提示された交換条件、シロさんの命か、マナの命。そのあまりにもの惨い選択肢、選べるわけないじゃないか……。

シロさんには悪いが、僕にとって大事な方はマナの方だ。けどもシロさんを切り捨てる理由にはならない。まだ出会って何日しか経っていないのに、僕はシロさんを裏切れるほど浅い関係じゃなくなっていた。

「……」

「主」

シロさんが数時間ぶりに口を開いた。

「……」

僕はしゃべらない。

「わしの命をやつに差し出すか？」

「……」

僕は言わない。

「マナの命をこのまま見過ごすか？」

「……」

僕は語らない。

「お主はどちらを取るんじや？」

僕は。

分からない。

### 第十三話：取引

真つ暗な闇に塗りつぶされた部屋の中で、僕はベットに横になりながら呆然と天井を見つめていた。

外では人々の歓声や熱気が室内からも強く感じられる。それもそのはず、今は昨日中止になった街一番の最大行事、『復活祭』が行われている時間帯だからだ。

一年に一度、春に行われる復活祭。現在この宿には僕とシロさん、そして『彼女』以外誰もいない。宿の主人でさえ宿を空けて、『復活祭』に参加しに行ってしまったくらいだ。

マナと楽しみにしていた復活祭を、まさかこんな形で一緒に回れなくなってしまうなんて誰が予想していたか。僕は苦虫を噛み潰したような顔になり、そのまま表情を変えない天井を見上げた。

シロさんと『彼女』はベットの横にある窓枠にもたれかかりながら、外の様子を虚ろな目で見ていた。

聞こえてくるのは外の人々の声だけ、部屋からは物音一つしない静寂と暗闇の世界だった。

寝返りをうち、僕は久々に天井から目を背けた。次に目に映ったのはシロさんと『彼女』、会話などせずにと二人で外の光景を見ている。

僕は静かに目を閉じ、微かにあった光さえ失われたその時、真つ暗闇の中から、いつもの太陽のような笑みをこぼしているマナの姿が

見えた。

僕は4時間後にまたあの天使と会い、マナの命かシロさんの命、そのどちらかを選ばなければいけない。必ずどちらかが残り、どちらかが消されてしまう。その結果からは絶対に逃れられないと思っていた……が、今は違う。

目をゆっくりと開き、シロさんに顔を向けて言った。

「シロさん、すみません。この後に備えて少し休んでおきますね」

「……うむ」

返事を聞いて、すぐにまた眼を閉じる。そのまま僕はベットに身をゆだね、浅い眠りについた。

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

外の喧騒はすっかり無くなり、静まり返っている。あれほど賑わっていた街は、風の音すら聞こえない静寂の街へと変貌した。まるで街全体に魔法をかけられたように。

街の大広場に建てられている時計塔を見ると、長針と短針が零時を指し重なり合っている。そのまま針は固まってしまい、時計は時間を刻まないで、零時を指したまま停滞している。

「昼間かけられた魔法かの」

「そのようですね」

大広場に来る途中、何百人もの動かない人々に出会っている。この事から、今日の昼間に起きた現象が現在起こっている事に気付いた。そしてその現象を起こした張本人が、今僕たちの目の前にいる。

黒い翼の、方翼の天使。

外の暗闇をまとっているような真黒い服に、真黒なぼさぼさの髪の毛。シユカさんは昼間に会った時と同じ表情で、僕たちの前にたずんでいた。

「お時間ぴったりでしたわね、素晴らしいことですわ」

「まさか遅刻するわけにもいきませんからね」

「ふふ、でしょうね」

シユカさんは静かにほほ笑みながら、蛇のように目を細めて余裕の眼差しをこちらに向けてくる。

彼女を目の前にすると、今でも体中がぴりぴりとし頭がじーんと痺れる。だが昼間の僕と同じ二の舞になるわけにもいかない。深く深呼吸をしてなんとか心を落ち着け、僕はゆっくりと話しを切り出す。

「取引のことなんですが」

「あら？ まさかとは思いますが、どちらも選べない……なんておっしゃるじゃありませんよね？」

「大丈夫ですよ、だけどここのままじゃ釣り合わないと思ひまして」

「……と、言いますと?」

シユカさんはさらに目を細め、自然と僕に鋭い威圧感を放っている。一瞬乱れかけた精神を落ち着け、話を続ける。

「いや、あなたには人質がいてこちらから手が出せない。それにこんな取引をしないで、シユカさんには僕たちを簡単に未梢出来る力を持つてるんじゃないんですか? 例えもし取引をしてマナを返してもらってそのまま、はいさようならって簡単に逃がしてくれるとも限らないでしょう?」

「クロド様の言い分は分かりますわ、確かに私にはあなた様方がどう足掻いても、絶対に逃げ切れない力をお持ちしてますわ」

「でしょう? だったらこちらがアンフェアじゃないですか。だからこれは僕の提案ですが、僕、ちよつとシユカさんに質問をしたいんです」

「なんででしょうか? 出来る限りの事ならお答えしますわ」

「大丈夫ですよ、簡単な質問ですし、シユカさんにはなんのデメリットもありませんから」

その言葉を聞いたシユカさんは少し怪訝そうな表情になり、僕とシロさんの顔を交互に見つめる。

シロさんは不敵な笑みを浮かべ、シユカさんの目線を返す。

そのままシユカさんは考えるのをやめ、僕の言葉を静かに待っている。

「僕はシユカさんの事を訊きたいんです」

「私の事ですか？」

「はい、そうです。訊きたいことは三つ。シユカさんの正体、街の人を殺した動機。そして『彼女』、ダンクネスとあなたの関係を」

僕の質問を訊いてシユカさんは目をぱちぱちと瞬きを繰り返し、突然狂ったかのように笑い出しはじめ、昼間に現れたシユカさんのもう一つの一面。狂人のような人格が忽然と現れた。

「あつはははははは。なぐんだそんな事ですかあ、いいですよ教えてあげても、ふふ」

今のシユカさんの眼の奥から、深い悲しみと憎しみが瞳の奥にくすぶつているのが分かった。ぎらぎらと眼をぎらつかせ、先ほどまでのシユカさんの面影は微塵として残ってはいなかった。

「これはむか〜し昔のお話」

淡々と喋り出すシユカさん。僕はその一語一語を聞き漏らさないように、両耳をシユカさんへ傾ける。シロさんも真剣な表情でシユカさんの言葉を聞いている。

「天使が神様をぶっ殺しちゃうお話です」

## 第十四話：天使と神様

ある所にダンバートンと呼ばれる、とても廃れた街がありました。

ダンバートンには毎年自然災害が多発し、気候や風土も非常に悪く作物などまったく育てられません。そのせいでほかの街との貿易が出来ず、街の治安も悪化し、街に近づく者など誰もいませんでした。

そんなある日、ダンバートンを救うため女神様がやってきました。その女神様は幸福をもたらす力を持っており、この悲惨な街を見て酷く心が荒み、救いにやって来たのです。

女神様が不思議な力を使うと、毎年何十回も起きていた自然災害は夢のように消え、気候も穏やかになり、土に栄養が溢れ、美味しい作物が沢山とれるようになりました。そして、見る見るうちに廃れていた街は、活気溢れる素晴らしい街になっていました。

街の人々は街を救ってくれた女神様に感謝し、街の大広場に偶像を立て、街の全ての人が毎日感謝の気持ちをお祈りしました。

女神様も街の人たちの多大なる感謝の気持ちを裏切ってはいけないと、このダンバートンをずっと守っていくことを心に誓いました。

街に初めてやって来た平穏な日々、そんな時間が何百年間も続きました。

しかし、ついに恐れていた事態が街に迫りました。

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

街に一人の天使が派遣されました。

天使とは、みな神様に仕えており、神様のサポートや人々に幸せを運ぶのが仕事でした。

そして優秀な天使は大天使へと昇格し、ある試練に成功した者だけが神様になりました。

毎日しっかりと働き、善行を積み重ねていく。その姿は、どこか神を慕う人間のようでした。

そうしていつかは神様になる、それが天使たちの大きな夢でした。

ダンバートンにやってきた天使もみなと同じく、神様になる事が彼女の夢でした。

しかしこの天使は仕事の覚えが悪く、ミスや失敗をつねに起こし、いろんな神様に仕えては違う所に飛ばされ、仕える神様を転々としていました。

早速女神様の所で働いたものの、いつもどおり失敗の連続でした。しかし、いくらミスをしてもいくら失敗しても、女神様が天使を叱る事はありませんでした。むしろ優しく励ましてくれて、天使は初めて悲観の涙ではなく、幸せの涙を流しました。

そして天使は変わりました。少しずつ着実に仕事をこなしていき、失敗もミスも段々しなくなっていきました。

天使は女神様の事を大好きになるのも時間の問題でした。

くくくくくくくくくくく

月日は流れ、天使は仕事の成績から、天界から立派な大天使にへと昇格してもらいました。

大天使になった天使はつねに自信に溢れ、女神様からも大きな信頼を得ていました。

そしていつも通り仕事をこなしていた天使に、ある神様が街に訪ねて来ました。

天使は早速要件を訊くため、女神様の変わりにその来訪者に会いま  
した。

その来訪者の正体は『運命を司る神様』で、近々この街に起きる災  
厄の注意に来たのでした。

しかし、要件はそれだけではなく、天使にある事を言いました。

『あなたはもう大天使です、魔力を自在に扱うことも自然と出来る  
でしょう。もし、この災厄をあなた一人の力で切り抜けたら、きつ  
と神様になる夢も叶うはずです』

それは思いもよらぬ言葉でした。

何百年の長い長い年月を経て得た地位、そして神様になれる、とゆ  
う夢があと一歩で叶う事を知った天使は大いに喜びました。

しかしよく考えてみると、いくら大天使と言えど強力な力は持って

いません。つまり、この件を天使一人で乗りきるのは、まだまだ力不足でした。

だが『運命の神様』はその事も知っており、さらに言葉を付け足しました。

『私が力を授けてあげましょう、さすればあなた一人でも乗り切れる程の十分な力が手に入ります』

この言葉を聞いた途端、天使の心に光が射し込みました。

『それと一つだけ注意して下さい。今から与える力は、あなたにはまだ完全には扱える力ではありません。ちゃんと感情をコントロールしないと自発する危険性があります』

天使はその言葉をちゃんと肝に銘じ、慎重に扱う事を『運命の神様』に約束しました。

しかし、ここでようやく天使はとても不可解な事に気付きました。なぜ見知らぬ自分に、このような力をくれるのか、あまりにも話が出来過ぎている。

天使はどうしてここまで自分に親切なのかを訊きました。

『私はただチャンスがある者に、助力したいだけです。それに・・・この街にいる神は、私は嫌いなのです。いずれあなたにも分かる時が来るから、気をつけて』

そう言って、天使にとって理解不可能な言動を残して、『運命の神様』は行ってしまいました。



そして無意識のうちに悲しみの涙は、怒りの涙へと変わっていました。

感情が以上に高ぶり、手には見た事のない光の剣を握っていました。奇声を上げ、その剣を持ったまま、女神様を後ろから体に突き刺しました。

そのまま女神様は息絶え、残ったのは笑みを浮かべる天使だけでした。

その後訪れた厄災を払いのけたのは、皮肉にも天使でした。

## 第十五話：前篇：ダンクネス

「どう？ 面白い話だったでしょう？」

「ダンクネスを殺したのは・・・あなただったんですか」

シユカさんは昔の事を思い出したか、くつくつと小さく笑いながら言う。

「ご明答ですわ。おかげで厄災を払った後、私は罰をくらって背中  
の羽を一本持つてかれたましたわ。今思うと、よく羽を取られるだ  
けで済んだのか不思議に思うわ。ねえ・・・？ 私の羽を取ったシ  
ロナさん」

え！？ シロさんが取ったって！？ まさか二人にそんな繋がりか  
あったとは思ひもしなかつたし、シロさんもそんな事は微塵として  
話してはなかつた。

直感だが、僕にはこの街に来た時から、もしかしたらこうなる事は  
運命づけられていたのかもしれないと思った。この運命も『運命の  
神様』は知っていたのだろうか？

シユカさんは満面の笑みを浮かべながら、僕の方へ向いて言った。

「さあ、昔話も済んだ事ですし、そろそろ本題に入りましょうか」

僕が選ぶ命の選択。

シロさんの命か、マナの命。そのどちらかを選ぶ。決して逃れられない選択。

「あなたの大事なお嬢様の命か、それともそこの神様の命、どっちにします？」

「僕は、どちらを選びません。厳密に言うとなんか選べません。僕は全身全霊をもってあなたに挑みます、挑んで勝って、マナを連れ帰ります。例えそれがどんなに無謀であっても、それが僕の出した答えです」

決意に満ちた言葉で僕はシユカさんに言い放った。

僕の答を聞いて一瞬にしてシユカさんお笑みは消えた。こめかみがぴくぴくとひくつき、嫌悪感と怒りの合わさった目で僕を鋭く睨みつける。

「はぁ・・・なんて愚かしいのかしら。私は、あなたがそこそこ賢そうだからいいお返事を期待できる、と思ってたのですが。大いに買いかぶり過ぎましたね」

「すみませんね、僕はそんなに賢くもないし、どちらかを選ぶほどの勇気もありませんから」

シユカさんの目を見据えて、僕は少しおどけるように言った。

だがその瞬間僕の見えていた世界が突如として反転し、ぐるぐると回転していた。それは僕がただ、空中に吹き飛ばされただけの事だった。

脳がその事に気付くのに時間がかかり、何にも理解できないまま、僕は後ろへ二メートルほど吹き飛ばされていた。

「主！大丈夫か！！？」

シロさんの声が聞えたが、あまりにも突然の事で僕はろくに返事も出来ず、ただ倒れこんでいるが精一杯だった。

その後、すぐに僕の隣に何か飛んできた。白くて大きなりボンが付いている服を着ている女性。

「シロ……さん」

ここで僕の脳が、やっと現状を把握する。僕は隣にいるシロさんの様に、無様に吹き飛ばされたのだ。決して僕が油断や瞬きをしていたせいではない、人間の肉眼で捉えるには不可能な速度の攻撃。

「結局は威勢だけですか、本当にあなたには失望しましたわ。それにその神様も、今となってはただの絞りカスですね。神の力は皆無のようですし、少しでも力が残っていたら、と心配したのですがね」

「ふん、愚かな奴め。まだ……真実に気付かない阿呆が……」

圧倒的に不利な状況下にいるのに、シロさんの言葉は力強く、決して引けを取っていない。

「……いい加減、あなた達の戯言を聴くのも限界です。いいですわ、その真実とやらは後でゆっくり考えますわ。あなたたちを殺してから、ね！」

シユカさんが突然手を振りげると、シユカさんの頭上に漆黒の二本の槍が忽然と現れた。

漆黒の槍はビビシと不気味な音を立てながら、空中で回転を始め、段々とスピードが速くなり、数秒で肉眼では捉えきれない程のスピードになっていった。

「いや、後で考える・・・事はない」

突如シロさんがそう呟くと、シユカさんは怪訝そうに眉をひそめた。

「今すぐ、分かるわ・・・」

その言葉を最後に、シユカさんはついに我慢ならず激昂した。

「なら・・・さっさと教えてみるよおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおお！！！」

激しい憤怒の言葉とともに、二本の槍が僕たちの方へ向かって真っ直ぐに飛んでくる。

鼓膜を引き裂いてしまうくらいの轟音を立てながら飛んでくる槍を、僕とシロさんは決して顔を背けずに見つめる。

そして、僕たちまであと数メートルの所で漆黒の槍はいきなりぴたりと止まり消えてしまった。

目の前に突如として現れた『彼女』のせいだ。

シユカさんの表情を見ると、彼女から今まで見た事のない衝撃の顔になって固まっていた。決して槍が突然消えたからではない、突如現れた『彼女』の顔に見覚えがあったからだ。

ずっとずっと昔から知っている、初めて優しくしてくれた、自分の一番の理解者である顔。大好きで、そして殺してしまった『彼女』の顔。

シユカさんは弱弱しく、かすれた声で言った。

「 Dankネス・・・様？」

## 第十五話：中篇：願い

いつたい何百年ぶりなのだろうか。

『彼女』ダンクネスは、シユカさんの前にその姿を現した。

「な・・・なんであなたが・・・ここに？」

シユカさんの声は弱弱しくて、生まれたての小鹿のようにふるふる  
と震えていた。

「さあ、後はお主の番じゃな、ダンクネス。お主の手で終わらせて  
やるのじゃ」

隣でシロさんがのろのろ立ち上がりながら、ダンクネスさんに言い  
放った。

僕も体に力を入れ、何とか立ち上がった。吹き飛ばされただけなの  
に、僕の体にはかなりダメージが蓄積していたようだ。自分のふが  
いない体に涙が出そうである。

ダンクネスさんはシロさんの方を向かず、じつと前を見つめながら  
言った。

「はい、そうですね。私が終わらせませす、今度こそ彼女を救ってみ  
せませす、絶対に」

その言葉には強い信念が込められており、シユカさんが一歩後ずさ  
ってしまふほどの気迫も放っている。

なぜ Dankネスさんがこの場にいるか、それは偶然でもなければ、ましてや奇跡でもない。

それは、数時間前。

くくくくくくくくくくく

「それでお主はマナの命、わしの命、どちらを選ぶのじゃ？」

「……………」

それは シュカさんと初めて会って、宿に帰って来た時の事だった。

そんなの選べるわけ……………ないじゃないか……………。

「どつちなんじゃ？」

残酷にも、シロさんは再び訊き返した。

この場合 マナを取るのが一番普通の答えだと思う。だってそうだろう？ 昔っからの知り合いで、いつも元気でニコニコしている マナ。みんなに優しく、見ているこっちも明るくなってしまっ程の。あの屈託のない笑顔。僕の数少ない、大好きな人。なのに心はどうしても簡単に マナ を選べない。

それに比べて、シロさんとはほんの数日前に会ったばかりだ。しかも人間ではなく大嫌いな神様で幽霊。僕に一方的にとり憑いたまったくの赤の他人だ。なのにシロさんと話していると、僕はとても楽しいと感じる。騙したり、悪戯をしたりして僕の事を散々振り回しているに、まったく悪意を持ってない。マナより大事、とまでは断定できないが、シロさんの命をないがしろに出来るほど、僕はシロさんの事が嫌いではないのだ。むしろ、好きなかもしれない。（恋愛感情ではないよ？）

「黙ってても分からん。約束の時間までずっと黙っているわけにもいかんじゃろ？ 何かしらのお主の答えを聞きたいんじゃ」

「ぼ、僕は」

まるで許しを請う罪人のように僕は力なく呟いた。

「どちらも選べません。はは、おかしいですよね？ 僕にとって今一番大事なのは自分よりも、マナの方だつてのに・・・素直にマナを選べないんです・・・。ホントに僕、どうしちゃったんだろう・・・」

「決しておかしくなんかいいわ」

シロさんは当たり前のように、強く優しく言う。

「わしはな、ここでお主がマナと答えたら、素直にこの命あやつにくれてやるうと思つてたのじゃ」

「・・・え？」

「お主にとってマナとわしを天秤にかけたら、確実にマナの方に傾く。わしもそれが分かっていたし、それなりに覚悟もしていた。じやが、お主はマナを選らばなかった。正直言うと、ほっとしておる、わしだって完全に消えたくないからの。じやが、お主はわしを選らんだわけでもないんじやがの」

「・・・もしも。もしも、僕がシロさんを選んでいたら・・・シロさんはどうしていました？」

「どうもせんよ。それがお主の出した答えならわしは口答えしない。じやが、きつとわしはお主にたいし、今まで通り接することはできんじやったるうな」

「そう、ですか・・・」  
ただ虚しく時間が進み、外は時間と共にさらに賑やかになりつつある。

「ですが、僕はどちらも選べない。でもそれじゃ！それじゃ・・・何の解決にもなっていない」

そう、一時的にこの問題から逃れただけで、あと数時間したら決断しなくてはならない。なのに僕の心は蝟燭に灯った炎のようにゆらゆらと揺らいで、決して止まらない。

「・・・一つだけ、わしに考えがある」

「えっ？」

何だって？ この状況下を打破できるような方法があるのか？ そうだとしたら、この言葉は僕が生まれてきた中で、今までに感じたことのない最高の救済の響きである。

「一つだけ、みんなが幸せになる方法がある。だが、みんなが不幸になる方法でもある」

「それって一体？」

「詳しく教えるにはまず、昨日の晩の事から話さんといかん……」

） ） ） ） ） ） ） ） ） ）

昨日の晩、わしはお主に頼みこんで力を貰い、夜の街に一人で行った。

突発的な行動ではない、わしなりに確かめておきたい事があつたらじゃ。

昨日の朝、いきなりわしに実体に戻った。最初はお主の異常な魔力のおかげと片づけておつた、じゃがその後外に出て、市民の変死体を見た所でわしの考えが変わつた。もしかしたら、実体が手に入つたのも、市民を殺した奴が必然的に関係しているかもしれんと。

そして、その犯人にわしは思い当たる人物がいた。じゃがまだ確信が持てず、その晩にわしは一人で外に出て確かめる必要があつた。

わしは確信を得るため、ある人物を探して街をくまなく探しまわつた。

すぐに探していた人物は見つかった。あやつは街の大広場にあるダ  
ンクネスの偶像の前に居た。いや、わしを待っておったんじゃ。

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

「その人物って？」

「ダンクネスじゃよ」

「!?!」

シロさんは昨日ダンクネスに会った!? この街を守り、死んでし  
まった女神。あのダンクネスに会ったのか!?!。

「ダンクネスがわしを待っておったのを見て、すぐに確信を持てた。  
本当に久しぶりじゃった、最後に会ったのがもう数百年前の事か・  
・・」

「も、もしかしてシロさんが死んで幽霊になったように、ダンクネ  
スも霊なんですか？」

「うむ。どうやらダンクネスは殺された後もこの街に留まり、あの  
天使に見つからんよう大広場にある自分の偶像に隠れておったよう  
じゃ。そしてあの天使と話をつけるために機が訪れるのをひたすら  
待ち、そうしてわしたちが現れた」

「そうじゃろ？ ダンクネス」

シロさんは天井を見つめながら同意を求めて言った。

「はい、シロナさんの言う通りです」

「!?!」

天井からすーっと何か降りてきて、足のつま先が見え、下半身、上半身、そして頭が見え、半透明の一人の女性が僕の前に降りてきた。

栗色の長髪で、線の細い体型。大きくとても穏やかで優しい瞳なのだが、その瞳の中には深い悲しみが籠っており、とても悲観な表情だった。

「あ、あなたが、ダンクネスさん？」

「はい、クロドさんだったかしら？ 初めまして」

「えっと、あなたに会えた事を一牧師として神に感謝します」

「よして下さい。この街の住民も私を敬って下さってますけど、力及ばずに死んでしまった、だめな神です。感謝などされる覚えはありません」

ダンクネスさんはだいぶ自嘲気味に言い、その表情はまだ優れないままだ。

「さて、話は戻るが。問題の方法をお主に今から言う、それを実行するかどうかはお主次第、決してお主の判断に口などはさまんから遠慮なく決めてくれて結構じゃ」

「は、はい」

心臓が高鳴り、シロさんの言葉を待つ。

「なぬに簡単な事じゃ。まずお主は、あやつに『どちらの命を選ぶ』と訊かれたら、『どう答えるのじゃ。』『どちらも選ばない』と」

「どちらも・・・え、選ばない？　そ、それってどういう意味で・・・」

「話はまだ終わっとらん、動揺しすぎじゃぞ？　お主」

「あ。す、すみません」

しっかりしろ僕、落ち着くんだ。僕がここで冷静な判断をしなきゃ、取り返しのつかない事になる。それは何としても避けなければならぬ。

「きつとあやつはその答えを聞いたら、かなり苛立つじやろうな。さらにわしもあやつに向かって挑発してあやつに畳みかける、そうしたらあやつは性格じゃ、きつとぶち切れてわしたちを殺そうと攻撃してくるじやろうな」

「確かにそうなりそうですけど、攻撃されたら僕たち終わりなんじや？」

「そこで Dankネスの 出番じゃ」

「ダルクネスさんの？」

ちらつとダルクネスさんの表情を窺うと、先ほどまでの悲観そうな顔はいつのまにか消え、決意に満ちた勇敢な戦士のような表情になっていた。僕の視線を感じて、ダルクネスさんは僕の方へ向き、にこりと笑ってみせた。

「ダルクネスは機が訪れるのを今までずっと待ってた。じゃからその間に少しずつ溜めた力なら、あやつがいかなる攻撃をしてきても一発だけなら防げる。じゃからここでダルクネスの出番じゃ、わしの今の力じゃ到底あやつに勝てん、不本意じゃがの」

「はい、そこで私がルシユカに何とか話をつけます。これ以上あの子を苦しめたくないんです、だからそこからは私に任せてください」

「あやつを怒らすのは、そうした状況の方がダルクネスが現れた時の方があやつにとって衝撃が強いからの。あやつの精神状態を乱しておかないと、冷静でいられたら話をする暇などなく、わたちと一緒に消されてしまう可能性があるからの」

「成程、それが僕に残された『第三の選択肢』ですか」

「うぬ。じゃがな、もしダルクネスの説得が失敗したらわたちは確実に死ぬ、マナも殺されるじやろう。マナを選んでおけば、お主とマナは助かる可能性は高い、元々わし狙いじゃからな。つまりみんな死ぬか、みんな生き残るか、誰か欠けるか、リスクの高い賭けじゃ」

みんな死ぬか、みんな生き残るか、誰か欠けるか、あまりにもリスクの大きい大博打だ。

だけでも僕にはこの選択肢以外考えられなかった、きっと僕の問題が甘ったるくて臆病だからかもしれない。だが僕はこの選択肢を選ぶ事に、不思議と後悔や心配など微塵も感じなかった。

「賭けます。そして、みんなであんなに笑いなご飯を食べてみましょう」

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

そして現在。

「な、なんで、なんであんなにそこにいるのよおお！！！！？」

シユカさんがヒステリックに叫び、強い風がこちらに向かって吹いてきた。僕の体に乱暴に当たり、思わず後ろに倒れるところだった。

「ルシユカちゃん、久しぶりね。またあなたと話せてうれしいわ」

とても穏やかにしゃべるダンクネスさん。

「何言ってるんだ！いきなり出てきて、私と話せてうれしいだあ！？何なんだよあなた！今さら何しに私の前に現れたんだよ！！？」

それに比べ、ほぼ叫びに近い声でダンクネスさんに問いかけるシユカさん。

「ええそうね、今さらじゃ遅すぎたのかもしれない」

でもね、と続け。

「ああ!？」

シユカさんは鋭い敵意をさらにむき出しにしながら、 Danknessさんを睨みつける。

「あなたをその苦しみを解き放ち、終わらせてあげたいの、それが私の最後の」

「願いよ」

## 第十五話：後篇：さようなら

「終わらせる……はは……終わらせるねえ……はははは」

突然シユカさんからあの鋭い敵意が消え、不気味に笑いだした。

「もうとつくに終わってんのよお……あの時からさあ……あんたも私もねえ」

「いいえ、まだ終わってないわ。少なくともあなたはまだ終わっていない、今ここで終わらせて、新しく始まるのよ」

「そつかあ……あんたもまだ終わってなかったわねえ……まだそこにいるもの……早く終わらせなきゃね……はは」

狂ったように笑い出したシユカさんは突然、ぶんつと腕をふつたと思うと、時が止まった街に吹く事のない風が、嵐のように吹き荒れ、鋭い突風と共に僕たちの所へ猛烈に吹き込んできた。

何とか立ち上がった所なのに、僕はまた尻餅をついて倒れてしまった。シロさんは何とか吹き飛ばされないよう、しゃがみ込んで石畳の地面に指をかけて耐えている。

一方のダンクネスさんは、まるで先読みしてたのかのように、空中へと逃げ、難を逃れていた。しかし、そこで僕は異変に気付いた。

よくダンクネスさんの足を見て見ると、つま先から足首までが薄く透けているように見える。

もしかして今の攻撃のせい？

「ちっ、やっぱり他人の心を読むのが上手ねダンクネス、今も昔も相手の心を身勝手に読んでいるのね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ダンクネスさんは喋らない。

「なら・・・これならどーお!?」

次は手を天高く掲げると、先ほど僕たちに目がけて撃った一本の漆黒の槍が出現し、また轟音を響きかせながらダンクネスさんに向かって放たれた。

しかし、またもや先読みをしたのか、今度はくるりと身を翻し、まるでダンスをしているかのように華麗に槍を避けてしまった。

そんな姿に、僕はただただ見入っていた。

まさに神業とゆうべき動きだった。

「はんっ、無駄だよお!!」

「……………!!」

ダンクネスさんに避けられ、無残にも後ろへ飛んで行ってしまった槍がいきなりピタリと止まったかと思うと、今度はくるりと反回転し、またもやダンクネスさんに向かって飛んできたのだ。

コンマ一秒の速度で異変に気付き身を翻したが、わずかに遅くれてしまい漆黒の豪槍はほぼ避けられない位置にまで向かってきていた。

「ザシュツ！」と柔らかい物を貫いたような音が耳に響きわたり、漆黒の槍に腹部を貫かれたダンクネスさんは重力に従い地面へと墜落した。

「ダンクネスさん!!」 「ダンクネス!!」

ほぼ同時にシロさんと僕は叫び、ダンクネスさんの元へ駆け寄る。

「大丈夫ですか!?!」 「しっかりして下さい!!」

うつ伏せになったダンクネスさんを抱え上げ、何度も呼びかける。しかしいくら呼びかけても、ダンクネスさんはまったく返事をしない。

「あつははは、あつけないわね。もう終わりかしら?」

シユカさんの勝利の高笑いが僕の耳に木霊した、その時。

「いいえ、まだ終わってはいないわ」

ダンクネスさんの声が聞えたかと思うと、目の前で抱えていたはずのダンクネスさんがスーツと消え、シユカさんの目の前に忽然と現れていた。

「ツ!?!」

だが負けじとシユカさんも刹那の速度で現状を把握し、距離をあけようと後ろへ下がろうとしたが、ダンクネスさんのが一步速く、高速で何かを呟いたかと思うと、突然シユカさんの両方の手首と足首に光を放つ鎖のような物が付いていた。

そのままシユカさんは空中に四肢を縛られ、完全に身動きがとれなくなってしまうた。

「拘束の呪文か！？ でもあなたの今の力じゃ私を縛りつけようなんて、たかが知れてるわ！」

「ええ、そうね。でもこれでやっと落ち着いて話ができるわ」

相手に攻撃させ、まるで読み間違えたかのようにダンクネスさんは攻撃を受けた。そして相手が油断したその一瞬を狙いダンクネスさんは、見事シユカさんを拘束した。どうやらダンクネスさんは最初からこれを狙っていたようだ。

「ふう……一時はどうなるかと思ったけど、よ、よかったあ」

安堵と驚嘆の声を上げ、僕はため息をついた。

「何よ！今さらあなたと話す事なんてないわよ！！」

「だったら私の話を聞いてるだけでいいわ」

「……ああ？」

ダンクネスさんは再び悲しい表情になり、シユカさんに優しく語りかける。

「神様ってね、なるにはとても難しいのよ。なぜだか分かる？ 答えは簡単、そう単純になれたら神様という存在と概念の価値がおかしくなってしまう、世の中の調和と秩序が乱れてしまうから。だから神にりたいたいなら、最初で最後の『最後の試練』に合格しなきゃいけないの」

「最後の……試練？」

シユカさんはおずおずと口を開き、ダンクネスさんの言葉を復唱する。

「そう『最後の審判』私たちはそう呼んでいる。天使の上、大天使の者だけが受ける事が出来る最終試験。だけどね、『最後の審判』は突然やってきて、本人はいつ行われたかすら気付かないわ。気付いたころにはすでに試練は終了し、成功していたら神へ、失敗したらそのまま一生天使のまま」

「あ、あたしにも……き…来てたの…か？」

「ええ、すでに行われたわ。そして、あなたはそれに失敗した」

「い…いつ…いつやったのよ！！？」

声が裏返り、ほぼ悲鳴のようにシユカさんは叫んだ。

「私が死ぬ直前よ」

「！！？」

ダンクネスさんが死ぬ直前？ 確か・・・この街に『運命の神様』が訪れて、それでシユカさんは神をも殺せる力を貰った、理由は勘違いのダンクネスさんの裏切りによるもの。それで己の私怨と感情にまかさられるままに、シユカさんはダンクネスさんを殺した。

この一連の出来事はよく考えたらおかしくはないか？ つまりはこの出来ごと自体が『最後の審判』だったら？ 次々と頭に散らばったピースが当てはまる。

「『最後の審判』の内容は、その試練を受ける対象者によって内容が変わる。あなたには昔の出来事があるから、相手を思いやる気持ち、相手を信頼する気持ちが欠落していたわ。だけどあなたは頑張って頑張って仕事をして、少しずつ努力して心を開き、私に好意を持ってくれたし信頼もしてくれた、すっごく嬉しかったわ……」

「……………」

昔のシユカさんの事を思い出しているのか、ダンクネスさんの顔には温かい幸せの表情が見えた。しかし、それも付かぬ間の事だった。

「だから『最後の審判』は、そこに目をつけた。あなたが本当に、他人を思いやり、心から信頼出来るようになったかどうか。私は信じていたわ、最後の最後までね……」

最後の最後、その言葉の意味に僕はすぐ気付いた。

「でもあなたは失敗した、あなたは神にはなれなかった」

そしてシユカさんはそのまま墮天使になり、残ったのは一枚の片翼と憎悪だけ。そんな真実も知らぬまま、時は残酷なまでに過ぎてい

った。

そして現在。

ついに真実をダンクネスさんが本人から口から全てが伝わった今、あの日の出来事、殺してしまったあの瞬間の事、何故自分に力を与えたのか、全てが完全に繋がった事を理解したシユカさんの顔には言葉では表現しがたい歪んだ形になっていた。

「……そんなの……そんなの……そんなの……そんなの……そんなの……」

つらつらとシユカさんから嗚咽の混じった言葉が吐きだされる。まるで何百年分の思いを吐き出すかのような勢いで。

時間が来たのか、シユカさんの四肢を拘束していた光の鎖が消え、ペタリと力なく座り込んだシユカさんを、僕たちはただただ見ている事しか出来なかった。

僅かな沈黙が流れ、そして。

「お主。最悪の大罪『神殺し』をしたお主が、何故に羽一枚程度で事が済んだのか」

最初に沈黙を破ったのはシロさんだった。

そう言われてみれば、確かに神様を殺したというのに、何故シユカさんは生きているのだろうか？ まずダンクネスさんは神様であり、シユカさんは大天使。いくら力を貰ったシユカさんが簡単に殺せたのも、それはダンクネスさんが最後まで抵抗しなかったからだ。

だったらこれは天界では前代未聞なのではないか？ 天使が神様を殺すなんて下剋上、そんなことをしたらまず、殺した天使も殺されるのでは？ この世の秩序と変わりないなら、それ相応の罰が来るのでは？

そう頭で試算していたが、すぐに答えがシロさんの口から放たれた。

「答えは簡単じゃ、ダンクネスがわしに殺すなと頼んだからじゃ」

「!?!」

ビクンツ！とシユカさんの体が大きく震え、ブルブルと体を揺らしながら、ゆつくりとシユカさんの顔がダンクネスさんの方へ向く。

「勿論天界からの決議で、すぐにでも抹殺、と答はでた。だが殺されたダンクネス本人は一人断固拒否した。何故かは言わずとも分かるじゃろ？」

シロさんが語る更なる真実に、シユカさんの体は見る見るうちに変化していった。顔中に冷や汗をかき、瞳は潤み、歯がよくかみ合わずガチガチと音を立てている。

「抹殺執行の任は運よくわしに任されて、この偶然にこの馬鹿は必死にわしに頼んできた。結局わしは、お主から羽を一枚もぎ取る事しかできんかったわ」

やれやれといった表情で、シロさんはダンクネスさんの背中を見つめる。

シロさんの視線を感じたのか、ダンクネスさんはこちらを振り返り、柔らかくほほ笑んだ。

「ダンクネスさん。あなたは・・・」

「クロドさん。あなたとお友達を巻き込んでしまったの事は本当に申し訳ないと思っっているわ、ごめんなさい。でも、あなたが来てくれて、シロナを連れてきてくれて」

少し間を開け。

「ありがとう」

今日初めて見た、この上ない笑顔でダンクネスさんは言った。

お礼を言うと、ダンクネスさんはゆっくりとした足取りでシュカさんに歩み寄る。

すでにシュカさんの顔からは大粒の滴がポロポロと流れ出し、少しでも刺激を与えれば死んでしまうのではないかと錯覚してしまうくらい、弱弱しかった。

そのままダンクネスさんは、シュカさんの目の前まで歩みよると、すっと体を屈め、シュカさんを覆うようにダンクネスさんの両手が体を優しく包み込んだ。

「うう……う……ああああああああああ……あああ  
あああ」

ついに限界を迎えたシユカさんは、激しく狂ったように、いやまさに狂いながら泣きだした。

時が止まった街に、泣き声が風のように流れ、体に悲しみが染み渡る。

〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉

どれ程時が経っただろうか。だが時が止まった街には、まったく関係なかった。

「うつく……ひ……く……く……く……く……く……」

先程よりは収まった来たが、まだしゃくり声をあげながらシユカさんはダンクネスさんの腕の中で泣いていた。その光景は、何十年ぶりに再会した親子のようにも映った。

しかし、親子は今また別れようとした。

ダンクネスさんはシユカさんを包んでいた腕をゆつくりと下げ、立ち上がった。よく見ると、いつの間にかダンクネスさんの体は、腿から先が透明になり完全に消えていた。

「ダ、ダンクネスさん、それ……足が」

「ありがとうクロドさん。あなたに会えて本当に光栄だったわ」

顔はシユカさんを見つめながら、ダンクネスさんは僕に語り出した。

「誠に身勝手ですが、どうかルシユカの事、シロナの事、よろしく  
お願いしますね」

「よろしくって・・・そ、それって？」

「『運命の神アスナ』に会って下さい、そこでシロナの事を聞ける  
はずです」

そう告げると。何かを悟ったのか、ダンクネスさんは遙か高い空を  
見上げ、こう呟いた。

「ルシユカちゃん、残念だけどお別れね」

いきなり名前を呼ばれたシユカさんは、ここでようやくダンクネス  
さんの体の異変に気がついた。

「あ、足が・・・あたし・・・のせいなの!? それに、お、お  
別れて・・・ど・・・どうゆう事!?!」

目の前の異常に、今まで包み込んでいた悲しみの感情が吹き飛び、  
シユカさんは大きく叫弾した。

「大丈夫、あなたのせいじゃないわよ。ただ、ちょっと力を使います  
ぎちゃっただけ」

シユカさんの不安そうな顔に、優しく語りかけるダンクネスさんの  
顔は、まさに聖母のようだった。

「ちよつと天界に還つて、少しだけ休むだけよ」

笑顔を向けながら、だから、と続け。

「また、もう少しだけ。いい子でお留守番しててね」

幸せに満ちたダンクネスさんの顔からは、一片の不安や悲しみもなかった。ただ一筋の涙だけが、頬から滴り落ちた。

悲しみの涙ではなく、幸せの涙が。

「ま、まって！こ、今度はちゃんとお留守番するから！私がこの街を……人間を守るから！！だから……だから！また返つて来てくれるんでしょう……？　ダンクネス様！！」

シユカさんは必死に悲しみの感情を抑え込み、涙声で叫ぶ。

こうしている内にも、ダンクネスさんの下半身はすでに消えて、胸のあたりまで無くなっていた。

ポンツと右手をシユカさんの頭に寄せ、優しく温かい手でゆっくりと頭を撫でる。くしゃくしゃになっていたシユカさんの髪の毛が、そこだけ綺麗にまとまっていく。

「ええ、必ず帰ってくるわ」

ダンクネスさんの胸が消えた。

「だってそうでしょ？」

ダンクネスさんの左手が消えた。

「この街が。ルシュカちゃんの隣が」

シュカさんの頭の上にある右手が消えた。

「私だけの帰る場所よ」

柔らかな笑みと共に、ダンクネスさんの頭がすーっと消えた。

時が止まった街に、止まっただけの風が再び吹き出した。

## 第十六話：動き出す時間（前書き）

やっと、ついに、ようやく、ダンクネス編の話が終わりました！！

何カ月もの間、憑神の話も止まってしまうましたが、ついに動き出せました……。

本当に本当に、ここまでこれた事を感謝します。

## 第十六話：動き出す時間

チュンチュンと、少しうるさい位の雀の鳴き声が、僕の耳に響いた。それが目覚ましの代わりになり、予定していた時間よりも早く起きてしまった。

ふと、僕は窓枠の方へ顔を向けると。

白い、壮麗な女性が腰かけていた。

朝日を浴び、神々しい雰囲気をもとった女性はこちらの視線を感じ、ゆっくりと顔を向け口を開いた。

「おはよう、主様」

「おはようございます、シロさん」

シロさんは柔らかくほほ笑むと、僕の方へ歩いてきた。

「やはり、よくは眠れなかったか？」

「いえ、牧師はただ朝が早いですよ」

そんな、牧師全体を誤解させてしまう嘘をつき、僕はベットから立ち上がる。

ポキポキ、と軽快な音を鳴らし、体の調子確かめる。

「今の時間分かります？」

「ふむ。太陽の位置から推測するに……8時あたりかの」

「あ、分かるんですか？」

思いがけない特技を披露され、少し戸惑う僕。

「ん。そういえばお主、昨日懐中時計は返してもらったはずでは？」

あ、そういえばそうだったっけ。

昨日の朝、シロさんに許可なく貸してしまい、そのまま消えた僕の愛用の懐中時計は、昨日の晩に無事に無傷のまま帰って来たのだ。

そう、愛する友人と共に。

「シロさん、マナはまだ寝ていますかね？」

愛する友人の名前を言い、僕はシロさんに訊く。

「うむ、まだぐっすりじゃな」

「そうですか」

昨日の事件、マナも巻き込まれたとはいえ、ずっと眠らされていたようなので、もうそろそろ起きてくると思うが、まだ少し不安を隠せない。

「なに、心配はいらんじゃろ。少なくとも、昨日のように血だらけ、

と言った事にはならん」

「またそんなことになっていたら、僕は発狂しますよ……」

例え幻想でも、またマナの血だらけの姿を見るのはごめんだ。

そんな事を考えていた時。

ガチャリ。

ドアの開く音が響き、音の方を向くと、自室のドアを開けマナが入ってきた。

髪の毛はボサボサで寝ぐせだらけ、眠気眼の瞳で何とか歩き、僕の顔を見た。

「おはよう〜クロちゃん。何か、久々だね〜。ふわ〜」

大あくびとともに呼ばれた僕は、マナに駆け寄る。

「おはよう、マナ。とりあえずベットに座りなよ」

マナの肩をつかみ、ベットへと誘導する。

そのままベットへ座らせ、僕はシロさんが腰かけている窓枠の隣にもたれかかった。

『やはり、マナは昨日の事知らないようですね』

『ふむ。気が付かぬ内にさらわれ、気が付かぬ内に返されたからの

『お

』でもやっぱり、昨日の事は伝えておいた方が』

『そうじゃな。どうせ後であやつに会うはずじゃ、今の内に状況説明でもせんと、あとが面倒じゃ』

シロさんとの心の会話し、決断した僕は落ち着きながら語り出す。

「マナ落ち着いて聞いてね、昨日の事なんだけど……………」

くくくくくくくくくくくくくくくく

「それでどうなったの？」

「あの後、シユカさんはマナ（懐中時計も一緒に）を返してくれて今日のお昼にダンバートンの南入口で会う約束をして別れたんだ」

あの後、とはダンクネスさんが消えた時の事だ。

「そっか。じゃあ、ルシユカちゃんはちゃんと救われたのかな……？」

「どうだろう……。最後はあんな別れになっちゃったからね、それでもダンクネスさんの想いが伝わったなら、少なくとも前よりはましになったと思うよ」

何百年間に渡って、積もられた誤解の塵は、そう簡単に消えたりはしないと思う。例え誤解が晴れても、どんなに最後がよくっても、自分のしてきた事が正当化されたり、ハッピーエンドに向かう事は



周りでは、昨日行われた『復活祭』の余韻が残っており、人々は口々に『ダンクネス様』と言っている。

その言葉がより鮮明に脳に焼きついている僕達は、何とも言えない消失感が僕達を包み込んだ。

結局のところ、予期せぬ出来事によりマナとの『復活祭』を見る約束は断たれたが、来年こそ見ようと意見が一致した事によって、来年もこの街にマナと来れる口実が出来てうれしかった。

「ふむ。昨日の出来事、周りのこ奴らにも見せてやりたいのお」

「そんなことしたら、この街の歴史がひっくり返るでしょうね。なにせ、形式上この街を救ったのはルシユカさんですからね」

「じゃあじゃあ、ルシユカ教とかも出来ちゃうかもね？ まさに下剋上だね」

「ふんつ。真実を教えないで、今の偽りの真実が救われる。皮肉じやな」

「例え偽りでも、その者が救われるなら、その者に偽りを教えてやる。そしていつか、偽りは真実にも匹敵する程になる。そしてそれがこの街を生きさせているんだと思うよ」

「何じゃ？ お主今のは聖職者として、いかん発言じゃな」

「今日のクロちゃん詩人さんだね」

「あー、何かスラスラ言えちゃったけど、多分誰かの受け入りだから気にしないで」

僕が牧師になる前、あの日から少し経った後に教えられた言葉だ。

さて、そろそろ南口だ。と思ったその時。

ピタリ、と全てが止まった。

鳥も人も空も風も時間も。

動くのは僕達3人と。

時間を止めた張本人の、シユカさんだけだった。

「こんにちは、皆様」

「こんにちは、シユカさん」

シユカさんはニコリと笑い、僕達を出迎えた。

その笑みは、昨日とは違い何か吹っ切れたような、どこか美しい笑みだった。

「まずは昨日のお詫びをさせていただきます。昨日と昔に、多大なるご迷惑をかけて、本当に反省の極みです。それにマナお嬢様、あなたを人質にさせてしまい、本当にすみませんでした」

「あ、だ、大丈夫だよ！」

マナはシュカさんと会うのは一様これが初で、この時が止まる魔法も初見なのでそれが拍車をかけ、結構きよどつていた。

そしてシュカさんは深々と、心身にお辞儀をし、僕達に謝罪した。昨日は僕とマナに向けられた言葉で、昔とはシロさんに向けられた言葉だろう。

「それとシロナ様」

ふいに話にシロさんの言葉が出てきて、シロさんは少しきよどつた。

「な、なんじゃ？」

「あなたには、お礼の一つでもしなければなりません。ですからこれを受け取って下さい」

シロさんは Dankネスさんのお願いにより、シュカさんの抹殺命令を無視し助けた。そこに負い目を感じているのか、シュカさんはその口にする右手をシロさんに向かって突き出す。

プワワワワン。

突き出された右手が青白く白光し、その光がゆっくりとシロさんの体に流れ込む。

その光景はとても壮麗で、マナと僕は思わず目を奪われた。

数秒間で光は消え、シュカさんは手を下げた。

「お、お主」

「これでシロナ様の体に変化があるはずです」

そう完結にシュカさんは言うと、綺麗に笑った。

シロさんはその言葉を聞き、すぐに理解したのか自分の左手を凝視している。

「手が、手があるぞ」

「え？」

「感覚がある、ここに左手を握っているとゆう感覚が」

シロさんは左手の指をグーにしたりパーにしたりと、動かし指をギョツと握る。

ここで補足すると。

シロさんは昨日突然に実体が入った、が、それはシュカさんの影響で与えられた一種の虚像で、本当に戻ったわけじゃなかったのだ。

昨日シュカさんから聞いた話では、街を離ればシロさんの実体は消え、また元の幽霊体に戻るそうだ。

だったら、今のシロさんの発言は一体？。

「シロナ様に、私の魔力を差し上げました。ですがシロナ様は神なので、私ごときがあげた魔力では、それが精一杯です」

「え、それってどういう事ですか？」

「シロナ様はこの街から、私から離れると実体が消えてしまいます。ですが、私の魔力を直接注入したおかげで、シロナ様は完全とはとても言えませんが、実体を取り戻しました」

「うむ、確かに感じるぞ。この感触、この感覚、何百年ぶりの憂いじゃ」

そうシロナさんは言うと、左手を愛おしそうに見る。

「でもでも、シロナちゃんって昨日実体に戻った時、その感触もあつたんんじゃないの？ まさに支離滅々だよ」

マナが今僕が聞こうとした質問を先に言ってくれた。

「ふむ。確かに体を触れる、体がある感覚、といった感覚はあつた。が、今完全に戻ったこの感触と比べると、まったく違うものじゃ」

「今あげた魔力では、体のごく一部しか実体に戻す事しか出来ません。ですから、注意して下さい」

シユカさんは注意を促すと、また深々とお辞儀をした。

「いや、いいんじゃない。これには、わしも多大なる感謝をするぞルシユカ。天界にいるダンクネスも、今のお主の姿を見れば安心じゃ」

「……ありがたいお言葉です……」

昨日逝ってしまったダンクネスさんの事を思い出したのか、シユカさんの言葉は震え、眼には薄く涙があった。

「それで皆様は、これからどうするつもりで？」

「ん？ そういえば考えておらんかったの、お主どうするつもりじゃ？」

「え、ああ。僕は一度、僕の住んでいる町に戻りたいと思います」

「ふむ。では、マナはどうするつもりじゃ？」

「私はどうしよう・・・私も一度村に帰らなきゃなあ」

その言葉を聞いて、すかさず僕は言う。

「だったら一旦デルの村へ行こう。後の事はそこで考えようと思います」

我ながら決行適当な考えだが、道の真ん中で考え事もどうかと思うので、そうすることにした。

「わかりました。ではこれ以上皆様を引きとめるのもいけませんね」

「ふむ。世話になったの、ルシユカ。お主、今度こそやり遂げるのじゃぞ」

まずはシロさんは答える。

「心より承知しています、またあなたと会える事を楽しみにしてい

ます」

シロさんの眼を見て、確固たる決意がある事を示したシュカさんに、シロさんは優しくほほ笑んだ。

次に僕が答える。

「色々とありましたが、シュカさん、この街の事頑張ってください」

「はい、クロド様のおかげで全てが解決したと言っても過言ではありません。ぜひまたいらして下さい、次に会う時はもっとよい天使になってお待ちしています」

ダンクネスさんを見るような、そこまではいなくても、それに匹敵するような尊敬の眼差しで僕を見据え、シュカさんは神々しく言った。

最後にマナが答える。

「ルシュカちゃんとはあんまりお話しできなかったけど、絶対ぜーったいまた来るから！ダンバートンよ！私は帰って来た！」

少々興奮気味に、マナはどこかで聞いたようなセリフ吐いた。

「お次に来る時は、マナお嬢様とお話できる事を心より楽しみにしております。どうかご無事にお過ごしください」

別れの挨拶が済み、シュカさんは右手を天高く掲げた。

「それでは皆様、いってらっしゃいませ」

壮麗で儂く美しく綺麗に、シニカルに笑ったシユカさんは指を鳴らす。

シユカさんの止まっていた時間が動き。

ダンクネスさんの動かしたかった時間が動き。

シロさんの動かなかった時間が動き。

この世界の時間が動き出す。

僕たちはデルへ向けて、また動き出す。

## 第十七話：クリードへ

心地い夜風が吹く、春の夜空。

夜空に星が煌めき始めた時に、僕達3人はマナの住む村デルへと着いた。

「ふー、到着」

「お腹空いたー！」

「懐かしいのお」

それぞれバラバラの事を言い、僕たちは村の入り口に跨いで置いてある、アーチ状の看板を潜り村に入った。

そのまま直接マナの家へと向かい、今日はマナの家を厄介する事にした。

話が色々大変になりそうなので、シロさんには消えてもらい、現在はリビングにある椅子に腰かけている。

『ふむ。またお主たちの飯を喰う所を、ただただ見ているのか』

むすつとしながら、シロさんは喋った。

『すみません……。それにシロさん、完全な体がないからどうせ食べれないじゃないですか』

その言葉がカチンと来たのか、凄い表情で僕に迫る。

『言わずとも知つとるわ！ふん！体が戻った暁には、お主のお金が底をつくまで喰ってやるからの！』

『そ、それは簡便を……』

こんな風に心の内でシロさんと会話していると、二階へあがる階段から足音が聞えて来た。

足音の主はマナで、どうやら着替え終わったようだ。

「おかあさーん、ご飯まだ？早くしないとマナちゃん、粉塵爆破しちゃうよ」

いきなりの爆破テロ発言を شدしたマナだが、もうマナのこの様な言動には慣れているので、特には突っ込まず料理をしているマナのお母さんの方へ顔を向ける。

「はいはいー。もう出来るからお料理テーブルに持って行ってちょうだい」

マナは言われた通り、出来あがった料理をキッチンからリビングの机へと持ち運ぶ。

僕もお腹が空いていたので、お手伝いすることにした。

シロさんはそのままリビングに待機し、僕たちが運んできた料理に目を奪われていた。

『いつか喰いにきてやるっ』

白い神様はそう独りごちて、料理から目をそらした。

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

「ふく、何とか食べれた〜」

今日はちゃんと心の準備もしていたので、何とかマナから僕の分の料理を死守する事が出来た。

「あの魚の煮漬け、卵とじ……」

シロさんは晩御飯に出てきた料理を思い出しているのか、さっきからブツブツと晩御飯に出てきた物を反芻はんすうしている。

「体の一部が戻るようになって、まだまだ不便じゃな……」

そう、シロさんはシユカさんから貰った魔力により、体の極一部だけを実体化させる事が出来るようになったものの、まだまだ出来る事に限りがある。

現に、現在シロさんを悩ますご飯問題も、その出来る範疇に大きく飛び出している。

例えば片手を実体化させて、スプーンを握れるようになったとしても、口は実体化されていないので食べ物には食べられない。

例えば口を実体化させて、汚いが、口を直接食べ物に押し当てても、胃や体の臓器が実体化されていないので、そのまま地面へと落ちて

しまつ。

つまり、現在出来る事は、精々一人でドアを開ける事や、手を握ったり物に触れたりする事だけだ。

「後は、お主を殴る事も出来るぞ?」

ポカッと後ろからシロさんに殴られた。

「勝手に人の考えを読まないでください」

「いいではないか、牧師が神に殴られるなんて人類初じゃないのかの? だったら感激の極みとゆうものじゃ」

「牧師をドマゾみたいに言わないでください」

まったくこの神様は……。

「それで? これからどうするんじや?」

サラリと話の方向をそらし、シロさんは僕に質問してくる。

「あーそうですね。まずは明日、村を出て数時間歩き、僕の住む町『クリード』に向かおうと思います」

「クリード? はて、聞いた事ないのお」

「恐らくあの町が出来たのは百年ほど前って聞きますから、シロさんの生きていた時代にはなかったのかもしれないね」

「何じゃ随分と若い町じゃな」

「若いんですか？」

「百年如きじゃ、わしの生きてきた極一部でしかないぞ。そうじゃなあ」

一旦言葉を区切り。

「まず、人の住む町で例えるなら、わしの生きてた時代ではこう区切っておった」

「出来てから二年経つ物を『集落』出来てから二十年経つ物を『村』出来てから百年経つ物を『町』出来てから三百年経つと『街』と呼ぶ。大きさの規模によつて今では名称が異なるようじゃが、わしの時代ではどんなに大きくて栄えていても、年期がはいつたらんと『街』までそうそういかん」

「へえーそうなんですか。昔の人はレトロ好きだったんですね」

「そんな古臭い物が好き、みたいに言うな」

ポカッと、また実体化した左手で頭を殴られた。

「別に古いから、といった短絡的に物事を捉えておらん。昔からある物、つまりは現代まで残っている物。言いかえれば、そんな昔から現代まで滅びず、生きながらえている事を現してある。『集落』も二十年もそこにあれば、それはもう『村』と呼んでよい代物じゃ。『村』も百年も滅びず栄えたら、それは人々が大勢暮らせる『町』ではないか。『街』もしかりじゃ」

「なるほど、結構深い事考えるんですね、昔の人は」

ポカッと、また同じ所叩かれた。おかげでダメージが先程から一点に蓄積して痛い。

「知恵があると言え。現代はそれなりに治安がよさそうじゃが、昔は戦争などが多かった。その中で生きてきた人は、聡明な知恵を持つんじゃ」

「そうなんですか・・・ご教授ありがとうございます・・・」

頭を押さえ、なるべく癪に障らないよう素直に言う僕。

「うむ。それで？ 話がそれだが、結局どうするんじゃ」

「えつとですね、まずは明日の朝デルの村を出ます。そのまま東に歩き僕の住む町『クリード』へ向かいます。そのまま僕の家に行き、町にある町立図書館に行つて文献を読みたいですね」

「文献？ 何を調べるんじゃ？」

「ダンクネスさんが最後に残した言葉『運命の神様アスナ』について調べたいんです」

「ぬ、そういえばそのよーな事言つとたつな」

この人は・・・あの場面に居合わせていながら、もう忘れていたのか・・・。

「ならわしは知つとるぞ、そやつの事」

「あ、そうか。すっかりシロさんから聞くとゆう手段を忘れていました」

「お主なあ・・・まあよい。名前から分かるようにアスナは運命を司る力を持つ神じゃ」

「つまり未来が分かる、とゆう事ですか？」

昔の事を必死に思いだしているのか、シロさんをこめかみを叩きながら答える。

「いや、そんなものじゃなかった気がする。確か本人から聞いた話では『運命を見通す力ではなく、運命を作り出す』と言つとったかの」

運命を作り出す？ それは一体全体どうゆう事なのだ？

「まあ本人から聞きだすが一番じゃな。あやつとは面識もあるし、ダンクネスの時みたいにごチャゴチャした過去もない筈じゃ。わしの知る限りではな」

「だったら今回は安全に済みそうですね」

「だったらいいの」

今回もまたあんな危険な目に会うのではないのかと、内心ハラハラしていたが、どうやら僕の心配損で済みそうだ。

「でも、何でダンクネスさんはアスナに会えと言ったんでしょうかね。運命の神にシロさんが昔に何が起きたか訊け、とゆう事でしょうか」

「ふむ。それだけは確かめようがないの」

ダンクネスさんは天界へ逝ってしまった。シロさんによれば、生きてはいるが、当分この下界には降りてこれないそうだ。どうしても彼女に会いたいなら、僕は一旦死だらいいそうだ。

「それでお主よ、マナの事はどうするんじゃ？」

「そうですね・・・今回の事もありましたし、また神がらみになりそうなので危険がありますね。必然的にマナはここでお別れですかね」

「ぬう・・・仕方ないの」

本当はマナと一緒にダンバートンまで行けたのが異例なのだ。マナはこの村の村長の跡取り、さらにはデルの村の村長、つまりはマナのお父さんは娘命の超絶娘好きなのだ。

今回はマナのお父さんは病気で倒れていて、半分抜け出す形でダンバートンに行ったのだ。マナのお母さんはむしろお父さんの意見とは逆で、早く外の世界にお嫁にでも行って、幸せに暮らしてほしいそうだ。だからマナのお母さんは、僕たちと一緒にダンバートンへ行くのも許してくれたのだ。

出来る事なら僕だってマナと一緒に各地に行きたいが、当然ながらマナのお父さんが黙っていない。

もし明日一緒に村を抜け出したら、地の果てまで追いかけて来るだろう。確実に。

だが、あくまでも最優先事項はマナの身の安全だ。今回は奇跡的に無傷で済んだが、次もこうなるとは限らない。何も神に限った話ではない、世の中のどこで何が起きるか分かったものじゃない。だったら最も安全な、この村にいてほしい。

「じゃがお主よ、マナの事じゃから『絶対について行く』と言い張るかもしれんぞ」

「ですから明日は、早朝に太陽が完全に昇る前に村を出たいと思います、マナには悪いけど」

「ふむ・・・いたしかたないの」

以外にもシロさんは、マナとの別れがそんなにも惜しいのか、暗い表情になりどこか遠くを見ていた。

「ま、主様よ。わしは朝が弱いからの、寝てるから起こさず身長に勝手に村を出てくれ」

前言を撤回。シロさんに別れの悲しさなどなかったようだ。その遠くを見る顔は、意味なんてなかったのかよ！

「なーに、牧師は朝が早いんじゃない？ 朝のお強い神の下僕に願いますの」

「ぐぐぐ」

言葉巧みに、僕の言い返せないセリフを言い、あの時ついた嘘のツケが回って来てしまった。

「牧師って……大変だ……」

）　）　）　）　）　）　）　）　）　）

時刻は、まだ午前5時前。

太陽も昇っておらず、辺りはまだまだ薄暗かった。

「うう……寒い。いくら春でも、この時間は冷えるなあ」

白い息が口から吐き出され、空気に溶けていく。

現在は、すでに村を出て小一時間ほど歩いている。

マナの家のリビングに置手紙を置いてきたので、マナの心配はいらないだろう。

そして隣には、ぐーすかと寝息を立てているシロさんがいる。僕が歩けば勝手についてくるので、シロさんは快適な眠りについたらまま、フワフワと浮いている。

「はあ……ついていない……」

白い息と一緒にため息が漏れ、僕はひたすら歩く。

僕の住む町『クレイド』へと向かって。

番外：現在までの二人の設定（前書き）

一章では話の投稿間隔が大きく離れてしまい、メインの二人の設定があやふやになっていると感じ

ここで、今までの話で出てきた二人の設定と、少しの簡単な補足をしたいと思います。

## 番外：現在までの二人の設定

クロドⅡノワ 職業：牧師 所属宗派：ネリウス教会

クリードに住む、クリード支部ネリウス教会のたった一人の牧師。  
ネリウス教会に所属し、よく教会のお偉い方から色々な雑務めいわいを受け、  
町をあげる事が多い。

本人いわく、この世で神様が一番嫌い。

昔、クロドに何があったかはまだ記述されていない。

しかし、あるきっかけにより、戦士の神シロナにとり憑かれる。

クロドが持つ力

シロナがクロドの中に入り、同調した時だけ発揮する力。

体の基礎体力など、全てのパラメーターに影響し、常人では真似できない運動能力が手に入る。

治癒力も比較的に向上し、鋭利な物で腹部を切られても、数時間すれば元に戻る。かすり傷程度なら、数十秒で完治。

ネリアス＝シロナ 没年：推定300年前 職業：戦士を守護する神

戦場を駆け回る戦士達にとって、守り神として崇められていた神様。『戦乙女』『安全と混沌を守護する者』『断罪と裁断の剣』<sup>(剣)</sup>など、沢山の呼び名があった。

生前は戦の神とあって、戦闘能力は神様達の中では群を抜いていた。現在は謎の人物に殺された事により、肉体を持たない幽霊の状態になっており、戦闘力もほとんど皆無。記憶も曖昧で、自分を殺した人物の記憶は無い。

あるきっかけにより、クロドにとり憑く事に成功し、現在は共に旅をしている。

とり憑いた目的は二つあり。一つは、自分を死に至らしめた人物とその背景の記憶を取り戻す。もう一つは、クロドから『魔力』を少しずつ吸収し、徐々に肉体を取り戻すため。

### シロナが持つ力

ダンクネスの一件により、ルシユカから魔力を直接貰い、現在は拳や足首から先など、体の一部だけを実体化出来る。

クロドの心の中に直接話しかける事が出来、二人だけで会話が可能。

姿は他人から見えないよう消える事も（クロドには見える）現れる事も自由。消えている間だけは、空中に浮かべる。

魔法などはまだ使えない。（魔力があれば別）

クロドから魔力を貰う量を増やせば、その分クロドの側から離れる事が可能。

クロドから魔力を供給し、一定に蓄積することに肉体が手に入る。しかし、手脚一本完全に修復するには、人間一人の魔力では何年もかかる。

## 魔力

人間には一人一人に魔力が備わっており、その量は個人差がある。しかし、今の人間には自分に魔力があるかどうかなど、シロナのよくな者に教えてもらわねば一生気づかない。

昔の人間は魔法も使えたが、神たちによって力を剥奪された。

神は魔力を使う術を知っているので、万物の頂点にいると考えられている。

人間は魔力を完全に使い切ると、二度と魔力を充填出来ない。少しでも残っていれば、徐々に回復する。

神は使い切ってもまた魔力は充填できるが、誰かに分け与えてもらわなければならない。

神

神は一人ではなく『戦の神』『祝福の神』『運命の神』など、沢山の種類があり、各々特異な力や魔法を使える。

シロナは戦の神だが、シロナだけが戦の神ではない。（同じ分野の神でも、不特定多数いる）

神を殺すには、神の手によってか、もしくは魔法を使わなければならない。

二人の現在の目的

ダンクネスが消える間際に言った「運命の神アスナに会え」とゆう言葉を受け、シロナの記憶を元にアスナがいると思われる北へと向かう。

【二章】第一話：ネリウス教会（前書き）

今回から一新、第二章として始めました。話のカウントも一からです。

## 【二章】第一話：ネリウス教会

太陽が僕たちの真上に昇った頃、やっと僕の住んでいる町『クリード』へと着いた。

「ほらシロさん、着きましたよー」

僕は声でシロさんを起こす。勿論それはシロさんの体が触れないからだ。

結局シロさんはデルの村を出発してから、今まで一回も起きなかった。

今でもプカプカと気持ちよさそうに宙に浮かび、幸せそうな顔で寝息を立てている。

「ほらほらー」

シロさんの眠りを覚ますには声をかけるしか方法がないので、僕はただただ声をかけ続ける。

「シローサーンー……はあ、不便だな……」

今僕がいる所は、クリードの北入口の手前にある小さな馬小屋の近くだ。商人や旅人、楽団に雑技団などの来訪者たちが乗ってきた馬達を繋ぐため、基本的に町の入り口には馬小屋が設けてある。

周りを見渡すと結構な数の馬が繋がれている。ざっと数えても二十頭はいるだろうか、町の中に楽団や雑技団でも来てるのかな？

現在シロさんは僕以外人目には見えないマナーモード（クリードへ向かう道中暇だったので、僕が勝手に名付けた）の状態で、勿論周りにいる馬達にも見えていない。

だからして、僕が必死にシロさんを起こすためにかけている声は、他人から見たらかなりの異常者に映るだろう。馬には人の言語を話す事が出来ないので、誰かに公言される心配はない。だが、もしこの姿を人に見られれば、今まで築き上げてきたこの町の僕の評判が著しく低下するだろう。

僕はクリードにたった一人しかいない神父なのだ。だから人々は僕を頼り、教えを説いてくれと何時もせがまれる。もしそんな僕が後ろ指を指されるなんて事が起きたら、僕は絶対に我慢ならない。何をしてたか追及されたら『ちよつと神様と会話をしました』と相手が納得か諦めるまで言い張ってやる。なーに、嘘はついていない、目の前の神に誓って真実を訴えてやる。

何がおかしいのか『ふふふ』と意味もなく笑った。その間も馬達は僕の事を不思議そうにがん見している。

「お主、何か変な事でも考えているのか？ 気持ち悪い感情がぬるぬると伝わるんじゃないが」

「ふふふふ……はっ！シロさんおはようございます」

いけないいけない……つい最悪の未来の予想図を見ていたら、頭の中がすっ飛んでいたようだ。

「コラコラ、何事もなかったように話を戻すな。わしの睡眠を妨げ



毎年祈りを捧げ崇拝している『神』がここにいるのだ！だったら何も恐れる事はないのだ！！！！

と、言いたい所だが。はっきり言って全てのトラブルの元凶はその『神』なのだ。本末転倒もいいところ、もはやこれじゃ天罰に近い。しかも神様直々に体を張ってだよ？

つまり、今の僕には自分が住む町にさえ、何かの脅威があるのではないのかと、心の余裕が追い込まれているのだ。

もはや僕が安心して休める場所は一つしかない。

『セリウス教会』

三姉妹の神の一人、三女に当たる『セリウス神』を崇拝する正教会。僕が仕えているのもこの教会だ。別名『神の家』と呼ばれている、この町の唯一の教会で、この町一の荘厳な建物だ。

まず宗教と一口に言っても、その宗派は多数ある。細かく説明するときにないので、勢力的に代表を挙げるとしたら、この三つが拳がるだろう。

まずはこの町にも点在する『ネリウス教会』だ。

『ネリウス教会』は三つの教会の中で群を抜く信者数を誇り、ざっと数千万はいると聞いた。大体の町なら確実に一つは『ネリウス教会』の支部が建っているものだ。

『ネリウス教会』はその信者数の多さから、お布施金が泉のように湧き出てくる。そんな資金源の豊富さを活用し『セリウス教会』はやたらめったら色んな所に教会の支部を建てまくっている。噂では山の頂上や砂漠のご真ん中、断崖絶壁の上やはたまた水の中など、もう何がしたいのか分からないくらい建てまくってるそうだ。

『神の家』と呼ばれているのは、『ネリウス教会』がどこの場所にも建っているから。つまり神様がどこにしよう、ゆっくりと休める場所。それが『神の家』と呼ばれる所以らしい。

二つ目は『アヒウス教会』

三姉妹の次女に当たる『アヒウス神』を崇拜しているのが『アヒウス教会』。別名『神の衣』と呼ばれており、信者数は少ない物の、その一人ひとりの信仰力は計り知れないとゆう。『ネリウス教会』は信者は多いが、根っからの信者と言う人はそんなにいない。たまに祈りを捧げるのを忘れるし、教会にだってそんなに行かない、ちよつとかじつただけのような人が多く、中にはこれを信者としてカウトするには、幾らなんでも苦しい者だっている。

そんな『ネリウス教会』とは正反対で、『アヒウス教会』は信者の一人ひとりが古株の信者ばかり。まさに根っからの神崇拜者で、狂信と言われるほどだ。少数精鋭とはまさにこの事。ちよつとした気持ちで『アヒウス教会』に入ろうものなら、あまりの教えの厳しさにかえがすぐに変わり、逃げ出す人も少なくない。拳句の果てには逃げ出した人を異端者として縛りつけれる、何て事例もある。

と、ここまで聞くとかなりのイカれたカルト宗教に見えるが、ちゃんという所だつてある。

先術の通り『アヒウス教会』の信者たちは熱心な人たちばかりで、毎日欠かさず朝昼晩にお祈りを捧げる。ちよつとでも性格がねじ曲がつてたり、途中で諦めてしまふ半端者などがいたら、みんなすぐに『アヒウス教会』を去つていく。そして必然的に『アヒウス教会』には誠実で真面目な良い人しかないのだ。

ちよつと狂信な所もあるが、人としては出来ているので、宗教を信じていない普通の人々などからは結構人気が高い。

ちなみに『神の衣』と呼ばれてる理由は、その熱心な信仰にある。

衣服は着る人の言う事に口答えをしない物だ。勿論生きてないからね。『アヒウス教会』が出来て、信者のあまりにも真剣で熱心な信仰ぶりを見た人々は『決して神に逆らわない者』『神の第一の僕』『ただ神の元に纏う者』そんな信者を衣服に例えて『神の衣』と呼ばれたのが起源だとか。

残る一つは、謎に満ちた『ペネウス教会』

三姉妹の長女に当たる『ペネウス神』を崇拝する『ペネウス教会』は僕もその全貌を知らない。

信者数も不明、総主教や司祭の名前も不明。別名『神の食』と呼ばれているが、意味もまったく分からない。

先術の二つの教会に属する牧師は僕も含めて沢山いるので、何人が知り合いもいるが、この教会の牧師だけは知り合いが居ない。

僕が唯一知っているのは『ペネウス教会』は他の町に教会を決して建てない事だ。本部があるのは王国『ミッドランド』。

しかし、『ネリウス教会』も『アヒウス教会』もこの王国だけは支部を建てない。いや、建てさせてくれない。この王国は完全な『ペネウス宗教』の崇拜国で、他の宗派を弾圧、徹底的な監視の目で他の宗派は絶対に教えられない。

何故信者数も不明なのに、三大勢力として数えられているのか矛盾が生じるのだが、恐らく王国全ての人民が信者なのだと推測出来るので三大勢力に挙げられる。とまあ、ここまでは分かるがまだ矛盾点もある。

『ペネウス宗教』は王国にだけその教えを説き、修道士や信者などを集めている。

でも何でその教えを他の町に説かないのか。何でミッドランド王国はそこまで『ペネウス宗教』に拘るのか。教えが素晴らしいならその教えを広めるのが宗教ではないのか、それとも『アヒウス宗教』みたいに教えが厳しいので他の人には理解できないと思いき教える気が無いのか。

『ネリウス教会』のお偉い方に訊いた事はあるが、いくら訊けど話をはぐらかされてしまい満足する答えは分からなかった。

元をたどると。

この三つの宗派は元は一つの物なのだ。

名前は『セント・メル・ネンテ教』三姉妹の女神を一つの『神』として祭っていたそうだ。しかもこの三姉妹の女神は、一人ひとりが他に類をみない力を持っていた。

しかし、時代が進むごとにつれ三人の女神を一つの宗派が独占して崇拜するのは愚信だ、と他の宗派達が唱え始めた。だがそれは建前で、本当は力の強い神がほしかったから、今自分たちが崇拜している神より、より効力がありそうな神がほしかったから。人が神を選ぶとゆう、あつてはならない考えの元で、結果的に三姉妹の神は散り散りになってしまう。

そして現在、散り散りになった三姉妹の女神は名を変え『ネリウス』『アヒウス』『ペネウス』として、人々に強く崇拜されている。

話を戻すと、とにかく今の僕には休む場所がほしいのだ。

だからして、この僕の二本の足の歩みが早くなるのは分かる。だったら普通は喜びと安堵の感情が心に満たされるのも分かる。だが先

程から僕の心に、気味の悪い感情しか溜まらないのは分らない。  
吐き気を催す嫌な予感と、水を頭からぶっかけられた様な冷や汗が  
流れ、何時の間にか僕は駆けていた。

ある一点を目指して。

「お、おいお主。何故そんなに急ぐか？何か用事でもあ……る……  
……！」

シロさんの言葉が途中で止まり、僕の足が止まる。

『ネリウス教会』が燃えていた。

## 第二話：祈る人

目の前に広がる光景は、はたして現実なのか。それすらも理解できないまま僕は地面へと膝を折っていた。

燃えている。激しくて、狂おしくて、神々しい。

灼熱の業火が教会全てを包み込み、バチバチと怒り狂ったように音が炸裂する。

「あ……あ……？」

僕は言葉とは言えないような、嗚咽ともとれる声をあげていた。

「これは、いったい……どうゆう事なんじゃ？」

分からない、分かりっこなかった。

燃えている教会の周りには町の人々と、信者やシスター達が僕と同じく膝をついている。大半は両手を胸の前で組んでブツブツと呟いている。

すると。手を組んで祈っていた一人が僕に気が付き、こちらめがけて走ってくるのが見えた。

「ク、クロド様！」

「シスター……レナス」

それは一人のシスターだった。

服の切れ端が少し焦げていて、いつも頭に被っていた黒い頭巾がな  
く、現状の残酷さを表していた。

名前はレナス・アグナー。ネリウス教会、クリード支部のシスター  
長で、とても優れている女性だ。

日々の朝昼晩のお祈りを欠かさないのは勿論、教会の秩序や制度に  
も徹底とした日々を送る女性だ。町の人々の苦悩や懺悔を親身に聞  
き（本当は僕の仕事なんだが）数十人いるシスター達を束ねる率先  
力にも長けていて、町にいる全てのシスターから尊敬の眼差しで見  
られている。まさにシスターの鏡である。

さらには、その清楚な顔立ちと放漫な肉体も拍車をかけているのか、  
この町での彼女の評価は凄まじい事になっている。

精神的にも、肉体的にも、彼女は出来た人だと僕は常日頃思ってい  
る。

しかし、何時も冷静さを忘れない彼女であってさえも、この状況下  
では親とはぐれた子供のように落ち着きを失っていた。

「い、いきなり教会が燃えてしまい！みんなで鎮火しようとしたん  
ですが！でも、火の勢いが強くて！」

「シスターレナス、落ち着いて下さい」

僕の言葉を聞き、レナスはゆっくりと動悸を沈めようとする。



炎は懺悔室を数分で喰いつくし、隣の部屋へ、そのまた数分でまた別の部屋へ……もはや手の施しようのないほどの圧倒的スピードで、教会を飲み込んだ。

何故火の手が上がったのか、一体誰が火を点けたのか、それとも自然発火なのか。何だに分からないまま。

今は住民たちの必死の消火活動により、教会の火は何とか鎮火したものの、教会の白く壮麗だった壁は黒く煤まみれ、町一番の高さがあった柱はバラバラの長さで砕け落ち、屋根の上にあった十字架のシンボルは、屋根が崩れて内部の教壇へと落ちていた。

残酷すぎる元教会の姿に、みな悲観な視線を投げかける。

この町のシンボルとも言える教会が全焼したのは、この町にとって大きな打撃になるだろう。

「これから……どうすればいいでしょうか？ クロド様……」

レナスが弱い言葉を放つ。

僕だってどうしたらいいのかわからない。

「まずは……死傷者の確認と手当ですね。建物は燃えて消えてしまっても、また建てる事が出来ます。しかし、命に替えはききません」

「は、はい。了解しました」

そう言つてレナスは、遠くに集まっているシスター達の方へと走つて行つた。

とりあえず状況確認は彼女に任せて、僕はこれから町長のところへ行かなければ。

「シロさん、これから町長さんのところへ行きましょう。火元の原因や犯人捜しよりも先に、信者たちの不安定な心境をどう修正させるか話さない」と

「ふむ。相当滅入つとるようじゃいな」

顔面蒼白の死者のような顔をしている者、目に涙を浮かべ嗚咽を漏らし泣き崩れている者や、失神して気絶している者までいる。

気持ちは分かる。信じ信仰していた神の家が燃えたとあつては、その罰当たりな行為が天罰となつて降りかかる可能性。特にシスター達にとつては最悪の惨事だろう。

シスター達の大半は拾われてきた捨て子である。赤ん坊の頃からこの教会と育ち、暮らしてきたのだ。教会はシスター達にとっては故郷とも言える場所、自分の唯一の居場所が無くなつてしまった事と同等の出来事なのだ。

僕だつてシヨックだ。

この教会とは10年の付き合いがある。初めて務めた教会で、牧師として任された記念すべき最初の場所。僕にとつても、この教会は

家同然の場所だ。

不意に目頭が熱くなり、立ち上がり急ぎ足で歩いて目を冷やす。

近くにいたシスターに町長に会いに行ってくる、とレナスに伝えるよう頼み、この場を後にする。

神聖な場所であろう教会の前からではなく、地獄への入り口と化した惨憺たるこの場所から。

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

町はやはり騒然としていた。

どこもかしこも教会が炎上した話題で持ちきりで、町長の家へと行く途中何度も住民に『大丈夫なんですか？』など色々聞かれたが、急いでいたので適当にかえして足を急いだ。

数分後。

ようやく町長の家が見えてきた。

アーチ状の大きな形の家で、所々装飾が施されている町長の家へとたどり着いた。

ドンドンッ、と扉を二回叩く。ノックとゆづより、殴っているような音だ。

すぐに町長の奥さんが扉を開け、驚きの顔を浮かべ中へと招き入れた。シロさんも一緒に。

町長はリビングの椅子に深くもたれかかる様に座り、どこか苦しそうな表情だった。

「おお、戻っていたのかクロド君。何とタイミングのいいことだ。実はな」

「分かっています町長さん。教会の事ですね」

僕は町長の言葉をさえぎり、本題をすぐさま出した。

「うむ……まったく罰当たりな事よ。町の警備隊が総出で犯人を捜索しているが、逮捕は難しいだろう……」

「いえ、それよりも先に住民とシスター達の精神面を配慮をした方がいいです。あのままでは自殺者が出てもおかしくはありません」

町長さんはさらに苦い顔を浮かべ言う。

「そうだな……それだけは避けなければな。とりあえずシスター達には当分町の議会所で暮らしてもらおう、あそこなら部屋数も多くて暮らすには妥当だろう。勿論食料の配給もしよう。至急、準備が整い次第に教会の再建設も手筈しよう」

「ありがとうございます町長様。クリード支部ネリウス教会の代表、牧師クロド・ノワの名から最大の感謝と敬意を申し上げます」

「いやいや、クロド君と私の仲ではないか。困った時は助け合っ、  
いかなる助力も厭わんよ」

そう言つて町長さんはようやく緩やかな笑顔を見せた。

この人が町長で本当によかった。僕は改めて町長さんの人柄に感謝  
した。

思ったよりも早くに問題が片付きそうなので、少しだけ僕の心にも  
余裕が出てきた。

「ふむ。それで気になっていたのだが、そこにいる美しい女性はど  
なたかな？　もしかクロド君の？」

しまった……すっかり忘れていた。

教会の事で頭が一杯だったので、シロさんについての事はまったく  
考えていなかった。

どう答えようか僕が必死に言葉をかき集めている時、シロさんが口  
を開いた。

「御初にお目にかかれてとえも光栄じゃ、噂から町長殿の評判は御  
聞きしておる。今の迅速かつ聡明な問題解決をするやり取りをこの  
耳で聞き、噂以上の寛大で良識な方とお見受けした所じゃ。あと、  
わしの事はシロナとお呼び下され、こやつとはちよつとした用事で  
つきそつとるだけじゃ」

ペラペラとシロさんの口から、思いも入れないような言葉が次々と

出てきた。

この現象にかなり驚いたが、それ以前にシロさんが相手を尊重して丁寧語で話せる事が何よりも驚きだった。

「いやいや、私は町長として町の代表として、いや人間としてやる事をやっただけですよ。こちらこそお会いできて光栄ですよ、シロナ嬢」

「ふむ。そんな謙遜する事ないのにお、まったく底の見えぬ寛大さを持つ主様じゃ。わしは感服しっぱなしじゃ、のう主？」

「そ、そうだねシロさん」

何だ何だ？ どうしてシロさんはこんなにも町長さん褒めちぎっているんだ？ まったくシロさんの思惑がつかめない。

「で、では町長さん。シスター達にこの事をすぐに伝えたいので、この辺でおいとまさせていただきます」

「ああ、そうだね。早く彼女たちを安心させねばね。また何かあったら寄っておくれ」

「はい、わかりました。それでは、ネリウス神の御加護があらん事を」

「また会える日を、町長殿」

「こちらこそ、クロド君とシロナ嬢をネリウス神が常にお守りにならん事を」

く く く く く く く く く く

「ねえ、シロさん」

「なんじゃ？」

「どうしてあんなに町長さんをよいしょよいしょしたんですか？  
確かに素晴らしい人ですが、シロさんが他人をあそこまで褒めるな  
んで、その、想像出来なくて」

「む、さらっと失礼な事を言う奴じゃ。そんなもの決まっておろう  
一間空けて。」

「良き相手には敬意を払う、それは人も神も同じ事じゃ。違うか？  
薄ら笑みを浮かべ、シロさんは堂々と僕に言い放った。

「まあ、そうですねが」

これはどう見ても嘘だ。付き合いこそ短い、シロさんの大体の性  
格は把握したつもりだ。確実に腹の中では違う事を考えている。あ  
ながち自分の将来への、何かの布石かもしれない。

そんな会話をしつつ、僕たちはあの地獄へと化した教会前へと到着  
した。

そこには数十分前と同じ光景が広がっていた。怪我人はちらほら確  
認できるが、あまりたいした怪我でもなさそうだ。

焼けて崩れた教会のすぐそばにレナスとシスター達の姿を発見し、すぐさまレナスの元へと駆け寄る。

「クロド様！」

僕の姿を見つけるなり、レナスは表情を明るめ、まるで僕を神を見るような目でこちらに小走りで近づいてくる。

しかし表面は笑っていても、中身は披露困憊しているのが容易に見て取れた。他のシスター達も同じような感じだが、レナスは特に疲労感が溜まっているようだ。

「お疲れ様シスターレナス。疲れている所を悪いけど、状況説明をお願いしますよ。」

「い、いえ！そんな！えっと、現在シスター35人中12人が火傷等の軽傷を負い、重傷者、死者はいませんでした。町民の方々にも数人怪我人が出ましたが、特に問題はありません。しかし……」

レナスが途中で言葉を濁す。

「しかし？」

「やはり肉体面よりも、精神面に傷を負った者が多く、中には『ネリウス神様の身元へと行く』と言う者まで現れ、非常に危険な状態に変わりはありません」

やはりそうか……。

「分かりました。心に重傷を負った者は僕から話をつけます」

「そう言っただけだと大変助かります、クロド様……」

「いえ、気にしないで下さい。僕もこの教会の、シスター達の家族ですから」

僕はなるべくレナスを安心させるよう、精一杯の笑みで応える。

そのまま僕はシスター達が集まる方へ顔を向け、大きな声で語りかける。

「シスターの皆さん！よく御聞き下さい！この地獄の業火のような火災から誰ひとり命を落とさなかったのは、常日頃から信仰に勤んでいる我々に対するネリウス神のご加護のおかげです。もし我らの中に自ら命を絶とうなどと考えている者は、それはネリウス神への冒瀆に他なりません！我らの教会が燃え、隼土と化しても、我々はまだこうして生きている！クロド＝ノワの名に懸けて、必ずや教会の再復興を約束します！！ですから皆さんも希望を捨ててはいけません！」

クロド様……クロド様……とシスターの口々から僕の名前が漏れる。目には涙を浮かべ、手を顔に覆いながらも必死に感謝の言葉を言っていた。レナスも僕の隣で、みんなに聞こえないように涙を堪えて鼻をすする音が聞えた。

不意に、心の中にシロさんが話しかけてきた。

『流石じゃな、お主。ここらでようやく牧師らしい、いや、人間らしい言葉を言えたもんじゃ。面白い弁明じゃった』

クツクツと小さな音をたてながらシロさんは笑った。やはり本物の神から見たこの光景は、愚かしく映るのだろうか？

『茶化さないでくださいシロさん。この町の教会の長として、僕としても必死なんですから』

『ふふ、悪かったのぉ』とシロさん言い、シロさんはシスター達から目を離し、薄ら笑みを浮かべながら空を見上げた。

気を取り直し、さらに僕は続ける。

「町長さんがこの町の議会所を、我々のために貸していただけようにして下さった！当分はそこが我々の家、いや教会になります！ですからすぐに荷物をまとめ、移動します。皆さん、町長さんに感謝の祈りを捧げましょう！」

そう言い僕は腕を胸の前で組み、片膝をつけて目を閉じる。

レナスや他のシスター達も僕と同じポーズをとり、みな祈りを捧げる。

ただ一人だけ、その場で笑みをこぼし空を見上げている、神を除いて。



### 第三話：あの日から

事件が起きた最悪のあの日から、はや三日が経とうとしている。

僕たちクリード支部ネリウス教会のみんなは、町長のご厚意により新しい教会が建つまでの間、町の議会所で暮す事になった。

シスター達も最初は困惑していたが、己の役分担などをシスター長のレナス「アグナー」の完璧な指示によって振り分けられ、今では少しづつ落ち着いて自分の役務を果たしている。

ここにきて、さらに彼女の大切さが身に染みた。

「.....異常が、現在のシスター達の状態です」

「そうですか、思ったよりも早く落ち着きを取り戻して安心しました。ご苦労様です、シスターレナス。あなたがいて、本当に助かりました」

「い、いえそんな！私何かにクロド様のお褒めの言葉などもつたない！私は私の職務を果たしただけです」

顔を赤らめ、レナスはあたふたと答えた。いつも冷静な彼女からこんな反応が返ってくると、とても新鮮だ。

「そ、それでは私はシスター達の様子を見て来ますので！し、失礼します！」



僕はあまりこの仕事をしない。レナスが肩代わりしてくれるから。職務放棄とも言えるだろうが、僕もレナスも住民も今の状態で不満はないらしいので、つついさぼりがちになってしまう。表面上では、忙しくて手があかなかった時の、僕の代役って事になっている。ちなみにシロさんは、他の人からは見えないマナーモードの状態。懺悔に来た人の告白を聞いては、ニヤニヤとしながら一人楽しそうだった。

『まったく、本当に人とは面白き者よのお。なぜにして、お主に罪を告白すれば神に許されると申すのじゃ？ 一度犯した罪が無くなるなどぬかす方が、罪人じゃないのかの？』

心の中にシロさんが直接話しかけてくる。

『そうは言われても、僕は聖職者なんで何とも言えませんが……。やっぱり誰かに自分の過ちを告白する事によって、少しでも負担を和らぎたいのが本音かもしれませんね。勿論、本気で犯した罪を償いたいと思う人もいますが』

『ふむ。そーゆー解釈の仕方なら、わしにも理解しうるの。まあ、戦の神たるわしには関係ないがの』

そう言つてシロさんはクツクツと笑う。

『関係ない……。と言うと、ではどの神に告白すればいいんですか？』

『んあ？ そんなもの知らぬ。わしは自分の知りたい事だけを知り、知りたくないものは何も知らん。そんなもの気にせんで、お主たち

が崇拜している、そのネリウスとか言う神でいいじゃろ』

『まあ、そうなんです。って、シロさんネリウス神を知らないんですか!?!』

『知らーん知らーん、まったく知らーん』

半分おどけながら、シロさんはへらへらとした口調で言った。

本当、何だこの神様は………。

神とは思えぬお茶らけた姿に、僕は呆れかえっていた。

例え仕える神が違ってもレナスや他のシスター達が、こんな神様を見たら己の築き上げた信条に亀裂が入る事だろう。レナスなんか卒倒するかもしれない。

『そんな事より主よ。一つ大事な事を忘れておらぬか? とゆうよ  
り、忘れておるな』

キリっとした顔で、いきなりシロさんは質問してきた。

『大事な事…….? うーん……』

『こりゃ』

謎の掛け声と共に、実体化した右手で頭を小突かれた。

『ダクネスが消える間際に言ったあの言葉じゃ。よもや、それす

「らも忘れたとは言わぬよな？」

ダンクネスさんが言った言葉……？

『ん……あゝあゝ。すみません、教会の事で頭が一杯でして。えゝえゝえゝ、はいはい。勿論覚えてますよ？』

『……まあよい。して、わしの本来の目的も覚えておろう。じゃから、なるべく早く行動を開始したいのじゃが』

ダンクネスさんが、消える間に僕たちに残した言葉。

「『運命の神アスナ』を探して下さい」

そして、シロさんの元来の目的。自分を殺した相手を探す、だ。

『しかしですね、僕の属するこの町の教会があなってしまった以上、容易にこの町から出る事はできませんし……』

『お主は神の言う事が聞けぬと申すのか？ 牧師でありながら？ 聖職者のはしくれが？』

『い、いや。ですが僕が仕えているのは、ネリウ』

『きーけーぬーのーかあー？』

僕の言葉を遮り、不満たつぷりの顔を僕に近づけながらシロさんは言う。

『なるべく善処してみます……』



シロさんの話によれば、運命の神アスナは『メルネンテス』とゆう街にいますとゆう。

しかし、シロさんが生きていた時代は相当昔、推定300年前という膨大な時間が経ったてしまった昔らしいのだ。つまり、現代にそのような街の名前を僕は聞いた事はなく、当然無くなっていても不思議ではない。

あの日から、四日目の朝。僕は約束通りクリードにある町立図書館で、過去の滅びてしまった街についての本を一通り読んでみた。だが、有力な手掛かりは満足に得られなかった。

少し思い出したシロさんの証言により、分かった事はその街の気候はずっと寒く、天候が安定していない地方だった。

「となると……北の地方だよなあ。人が暮らす地図にも載ってる場所と言えば『エルナス村』『ケニツシュ村』と、あとは『風の生まれ故郷アルト』と『芸術の開拓地ミミア』と呼ばれる町が二つ。あと奇学の街『ギルントス』と呼ばれる有名な街があって。後は最北一有名な『ミッドハイド王国』だったかな」

「まったく聞き覚えのない名ばかりじゃ。それに”おつく”ってなんじゃー?」

シロさんが眉を細めて、僕に訊いてくる。

「王国と言うのは、王、つまりその街一番の権力を持つ貴族や豪族が統治する街の事です。その街の代表者を王様と言い、街ではなく

国と呼ぶんです」

「……よお分からんが、随分と時代は複雑になったんじゃな」

シロさんの理解力が意外に低い事には構わず、僕はそのまま続ける。

「王国まで行く、とまでは断言できませんが。とにかく寒い地方と言つと、今挙げた名前のおこなに行けば、少しは有力な情報があると思いますよ」

「だったら話は簡単じゃな、即刻荷物まとめて出発じゃ」

「い、いやですから……僕はまだこの町を離れるわけには……」

現在は事件から四日目の夜で、僕に用意された少し広めの部屋でくつろいでいたとこだ。ちなみに僕の家は勿論他のシスター達と一緒に、教会にあつたわけで、実を言つと危うく僕も路頭に迷つたところだ。

資金面は、この前説明したと思うが、ネリウス教はお金持ちなので定期的に教会本部から街町の教会支部に、お金が支給されるとゆう風変わりな制度だ。昨日、本部の使者が毎月のお金を渡しに来たので、渡しつつに教会の出来事も本部に報告してくれるよう伝えたとこだ。だから、全て燃えて無くなってしまったが、何とかシスター達や僕はお金だけは困らずに済んだ。次の支給は通常の倍をくれるそうだ。

いくら神を信じようと、お金が無ければ生きる事すらままならない。

正直、ダンバートンでのマナの食事代やその他もろもろ（特に話してないが、裏で実は色々買っていた）が僕の財布を着実に死へと追い込んでいて、とても助かった。

話を戻すが、僕は今一体どうやってこの町から出ようかと、非常に難しい問題に直面していた。

状況が状況だけに、僕だつてこの町の教会の代表としてレナスやシスター達を置いて、この場から離れたくない。当分はこのままクリードで過ごし、もう少し問題が縮小化してからのが一番だ。

恐らく僕の願いで、レナスにこの場を託すと言ったらきつとレナスは嫌な顔せず『了解しました、クロド様』と嫌な顔せず言うのは容易に想像できた。だからこそ、僕はこの場をレナス一人に託したくなかった。

教会が燃え、シスター達や人々が必死に手を合わせ祈っていた、あの地獄のような光景が目によみがえる。いつもの冷静なレナスは、その面影をまったく残さずして、一人の女性として恐怖を抱き、泣きそつな顔をしていた。

あんな顔を見てしまった以上、いつもみたいに彼女だけに頼るのは、到底僕には出来なかった。

しかし妙案も見つからず、五日、六日、七日、と時間だけが進んでいく。

八日目の朝になり、事件が起きて早くも今日で一週間が経った。町の人々やシスター達も十分に落ち着きを取り戻し、消えかけていた笑顔も次第に見せるようになった。

「おはようございます、クロド様」

「おはようございます」

「おはようございます」

レナスと二人のシスターに朝の挨拶を受け、僕はようやく取り戻しつつある日常に浸っていた。

「おはようございます、シスターレナス、シスターミネ、シスターオル。清々しい、いい朝ですね」

僕は今起床したばかりなので半分眠気眼になっていて、鏡を見なければ規模は分からないが所々髪の毛が立っているのが感覚で分かる。少々お見苦しい姿だが、彼女達はそれをまったく気にするそぶりは見せない。まあ、家族同然の付き合いを数年も一緒に過ごせば、それくらいの関係は築けるものだ。

僕やシスター達の朝は早い。聖職者の決まりとして、早朝に起床するのは当たり前。朝のお祈りや、ミサなど色々とする事があるため、僕たちは結構多忙なのである。

レナスと二人のシスターは、僕よりも早く起きていたのか、服装をきっちりと着こなしている。しかし、よく見てみると黒いシスターの服には、所々焼けた跡のようなものがあり、生地の色と混ざっていてあまり目立たないが、あの日の事件のものしさを確実に物

語っていた。

着替えない理由は簡単で、スベアの服は教会もろとも焼失。決してあの日の戒めとして着ているのではなく、シスター服は直接本部が作ったものでないといけない決まりがあるため、新しい服が支給されるのを待つていなければならぬ。確か今日届く話だったはず。

「ではクロド様、外で他のシスター達を待たせているので、また午後に」

「はい、今日も頑張ってくださいシスターレナス。ですがあまり無理もしないで下さいね」

にっこりと僕が言うと、レナスは「は、はい！で、では失礼します」と大きく返事をしたかと思うと、早歩きで二人のシスターを置いて行ってしまった。心なしか顔が赤くなっていたように見える。

置いてけぼりをくらった二人は、何が面白いのかクスクスと笑いながら、僕の顔を一瞬見て別れの挨拶を告げてレナスの行った方へと小走りで向かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱり寝ぐせが変だったかな」

不思議に思いつつ、そう独りごちて僕はレナス達とは反対の方向へと足を向けた。

そして僕の隣には薄らと半透明のまま、空中にプカプカと浮かんでいる白い神様が、グーガーグーガーと寝ている。

恐らく彼女が起きていれば、眠気も一気に飛ぶような一撃が彼の頭に炸裂するはずだったろう。

## 第四話：奇学

気持ちのいい朝だった。大きく白い雲が、魚のように空を泳いでいく。

町の議会場からそう遠くない場所に、僕たちはいた。目的は昼食をすませるため、現在はその帰りである。

僕は青白いまっさらな空の下、大きく伸びをした。

「ん〜！…….はあ。平和だなあ〜」

教会が燃えた事件から、早くも一週間の時が経った。

ダンクネスさんの助言に従い、真相を探るべく北の大地へと向かう。しかし、現状は非常に脆く危うい。上手くやらねば、整いかけた均衡が一気に崩れる恐れがある。

「主様よ。ちと太陽が眩しい。弱めてきてくれぬか」

隣で僕にそんな事を言っているのは、やはりシロさん。シロさんの着ている、簡素な白い服に太陽光がはね返り、眩しくてあまり直視できない。

「…….遠まわしに、僕に消えてくれって事ですか？」

「なんじゃ、随分と被害妄想がいつとるの。まあお主一人が消えてこの眩しさが緩和されるなら、それも考えもんじゃな」

「結構ストレートに言われた!!」

青空の下、僕のツッコミが軽快に響いた。

「……ぬ」

フツと。いきなりシロさんは、他人から姿が見えないマナーモード状態になった。

「クロド様ー」

どうやら誰から来たようだ。シロさんの存在は教会のみんなには教えていないので、あまり他人の目には映らないようにしているのだ。謎の人物が数メートル手前まで近づき、それがレナスだと気がついた。彼女は小走りでこちらに向かってくる。

「やあ、シスターレナス。気持ちのいい天気だね」

「はい。とても清々しくて心が洗われます」

レナスは太陽の眩しさに負けないくらい、満面の笑みで言った。

いつもはあまり表情を変えないレナスだが、ここ最近笑顔が増えた気がする。

「クロド様。お一人で一体何をなされてたのですか？」

「ああ、いや。特に理由は無いけど、昼食を終えて帰る途中考え事  
していてね」

勿論レナスにも、シロさんの存在は知らせていない。

紹介をしてもいいのだが、シロさんの存在は特別説明が面倒で、色々ごまかしてもしなければいけない。

「そうだったのですか。では、クロド様は今お暇を余しているでしょうか？」

「うん、そうだね」

「……なら。もしもよかったら私と」

急に、レナスの言葉がよそよそしくなった。顔も徐々に赤くなり始めた。

「う、うん？」

「少し……町を歩きませんか？」

「そうだねー……うん。今日は天気もいいし、室内にいるのはもったないからね。僕の方こそ頼むよ」

「は、はい！」

レナスは頬を赤くしながら、元気よく返事をした。珍しく声が随分と大きかった。

そんなレナスを見て、シロさんは先程からニヤニヤとしっぱなしだった。

「それじゃあ、どこに行きましようか？」

「あ……すみません。特に決めてませんでした……」

「あはは。なら町をブラブラしないかな？ ゆっくりと歩きながら話すのもいいと思うんだ」

「すみません、無計画で……それでよろしくお願いします」

こうして僕とレナス、そしてシロさん。二人と神一人のお出掛けが始まった。

〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉

僕たちは今、町の中央区。ガーデン地区と呼ばれる、多種多様な色んなお店が立ち並ぶ所に来ていた。

必要な物の買い出しなど、屋外に出る仕事の大半はシスター達の仕事だが、特にレナスは場の指揮と責任者も兼ねて仕事をしているので、教会の中からあまり外には出ない。勿論この教会での最高責任者は僕なのだが、よく留守を任すレナスの方が、実質リーダー的な役割を担っている。まったく面目ない事である。

町の人々もレナスの人柄を高く買っており、老若男女問わず彼女は住民から慕われている。

僕だって慕われているといえはそうだが、幽霊牧師と冗談で言われた時はシヨックで丸一日立ち直れなかったのは、誰にも言えない秘密の一つだ。

「うーん、この辺も久々に来たな」

「はい、私もあまりこの辺りは来ませんから、ちょっと新鮮です」  
人通りは多すぎず少なすぎず、二人が横に歩いてても邪魔にならない程度の混み具合だった。

シロさんはマナーモード状態なので、ふわふわと空を優雅に漂いながら、ゆったりと観光している。

『どこもかしこも、わしの生きとった時代には無かったものばかりじゃなあ。特にアレなんか、何に使うのか見当もつかん』

心の中にシロさんの声が響き、シロさんが指を指して先を見ると、そこには照明器具などを扱っている店があった。

『なんじゃあの黒い箱は？ 材質は鉄かのお・・・おわ！光おつた！火を点けるそぶりは無かったが・・・もしや魔法！？』

一人でワーワー！と盛り上がっている所を水をさすようで悪いが、僕は正直に答える。

『アレは自光器ライトって言う照明器具ですよ。簡単に言っちゃうと中に光源があつて、それが発光するんです。奇学技術の街『ギルントス』が作り上げた蠟燭に変わる、画期的な新しい日用品です』

『ふむ？ して、あの中には何が入つとるんじゃ？ 一人でに光る物など、太陽と数人の神しかわしは知らんぞ』

一人でに発光する神がいる事に少々驚きつつ、説明を続ける。

『確か、ナントカって技術者が雷が持つエネルギーを見つけて、どうたらこうたらして……えっと……』

視線をレナスに向け、救いを求める。

「ねえ、レナス。いきなりだけどちょっと質問いいかな？」

「あ、はい。何でしょうか？」

「あの中身って知ってる？」

僕は例の自光器<sup>ライト</sup>を指さした。

「鉄箱型の自光器<sup>ライト</sup>ですか。あまり詳しくはありませんが、中にはガラスで出来た卵のような形状の球が入っており、さらにその中に鉄線が円を描いて挿入されてあって、スイッチを押すとエネルギー変換が行われ鉄線が光る……だったと思います」

『だ、そうですね』

『お主が誇らしげに言つな』

「ついで」

ばかりと、レナスには見せないよう実体化した拳で頭を小突かれた。

「え？」

「あ、いやちよつと小石に躓いてね」

「そうですか。それでクロド様、どうしていきなり自光器ライトの中身など御聞きになつたんですか？」

「あーえ〜つと・・・そ、そうそう、あれを作つたギルントスの技術力つて凄いよね。僕は今だにあの自光器ライトを見ると、つくづく感心するよ」

目は完全に泳いでいたが、何とか言い訳を述べた。

「ああ、はい。そうですね。奇学が出来たのも、それを応用して物を造り出したのもあの街が最初でしたからね。噂では、すでに馬に変わる、革命的な乗り物も出来たようですよ。あの自光器ライトも数年前のタイプらしく、すでに手のひらサイズにまでコンパクト化されているようです」

「へえ〜。レナス、結構詳しいね。もしかして奇学に興味があつたり？」

「確かにそうかもしれませんね。物が光る原理や、あんな不可思議な物を作る奇学はとても魅力的です。ですが私はシスターであり、ネリウス様に捧げた身であります。それに自光器ライトなど無くても、私は蠟燭があればそれで十分です」

僕も、火を点けずに光る自光器ライトを見た時は驚きを隠せなかつたが、

ほしいかと言われれば微妙である。現在の僕も蠟燭さえあればそれで事足りるし、高いお金を払ってまで手に入れたとは思っていない。

『ふーむ。そんなにも己の信仰は大事かのお。わしには到底分らん事じゃな。まあ、わしも蠟燭で十分事足りるのは同意見じゃ』

そりゃ神には信仰なんて言葉、もっとも遠い存在だしね。

『そう言えば先程から出とる『奇学』とは何じゃ？』

『奇学ですか？ ああそつか。あれが出来たのはまだ数十年前でしたからね。平たく言ってしまうえば、物事の現象を人工的に操る物、みたいなものでしょうか。物が地面へと落ちるのも、火が燃えるのも、全て理由や法則があるんです。それを応用しているのが奇学です』

『ほう。そのような考えはわしの時代にはなかったの。物が落ちようが、火が燃えようが、別に気にならんかった。過程より結果が全てと思つてたしの。今の人間の考えは、ちと違うようじゃ』

腕組みをしながら、シロさんは言った。

「ライト自光器は蠟燭みたいに勝手に消えちゃったりしないから便利だけど、やっぱり値段は高いままだね。それにあんまり他の町には出回ってないようだし」

「そうですね。一つあれば便利と言えばそうなんですけど、あまり今は贅沢できませんしね」

「だったら今度、本部に頼んでみようか。自光器ライトを一つ供給して下さいって」

「駄目ですよクロド様。あまり本部に頼るようじゃ、この町の教会の示しがつきません。燃えちゃいましたが、その不幸に甘えてはいけません」

「あははは……まあ、ギルントスに行く用が出来たら一つ買ってくるよ。あそこならきつと安いだろうし」

『それならお願いしますね』とレナスは笑いながら答える。

そのまま自光器ライトの置いてある店を過ぎ、そのまま道なりに進んでいく。

レナスとこんなたわいのない話をしたのは、一体何カ月振りだろうか。

よく町を空けるとはいえ、まったく会えない訳じゃない。会おうと思えばこちらから会いに行けばいいし、そもそもレナスは町の住民とシスターのパイプ役も兼ねているので、僕に最近の傾向などを逐一教えに来てくれる。

ただ、話す内容が仕事の事なだけ。こうやってレナスの町を歩き、ちよつとして世間話などお互いしたいなど考えた事もないだろう。別に話がしたくない訳ではないが、変に現状の関係を意識してしまふのだ。プライベートの場でも、常に上司と部下のような上下関係が発生してしまう。レナスは特に仕事が真面目なので、仕事のオン

とオフの切り替えが上手ではない。

ふと横目を向けると、レナスがじっとこちらを見つめていた。

「どうかしたかな？」

「いえ、ただちょっと気になりました」

レナスは僕からスツと視線を外す。

「クロド様は、また何か御用があるのでしょうか？」

「え？」

「教会が燃えたあの日。あの日からずっとクロド様はいつもと違う顔をしていました。何か大切な事があるかのような、ずっと何かを考えているような、そんな顔をしています」

レナスは眉を顰めながら、僕に言った。

ガツンと後頭部を殴られたような衝撃が走った。僕は心底驚いた。いや、今更なのかもしれないが。そしてある事に気がついた。

今日の、この珍しい二人きりになる彼女の目的が。彼女は僕の心情を敏感に察し、僕を散歩に誘った。内容が他のシスター達に聞かれないよう、彼女なりに考慮して。

「伝えたいけど言えない、けどどうしても言わなきゃいけない。それが何なのか私には分かりませんが、きっとそれはクロド様にとっ

て大切な御用なのですよね。心の優しいクロド様の事だから、教会の件や私たちの安全が心配で、言つに言えない」

スラスラと僕的心情を読み取っていくレナスに圧倒つされ、僕はまったく口が開かなかった。

レナスは全能な女神のように言い続ける。

「確かに今回の事は、あまりにも辛く酷の状態です。今クロド様が町から居なくなってしまうたら、他のシスター達の動揺も想像がつかます。ですが、それ以上に私たちの事で、クロド様が悩み、苦しみ、目的を達つせない事が、私やシスター達にとって一番酷な事です」

もはやぐうの音も出なかった。今すぐにこの場に座り込み、彼女に謝りたかった。僕はそんなたいそうな人間ではない。僕は牧師でありながら神の存在を憎悪し、嫌悪感に苛まれ、馬鹿にしている僕を彼女は知らない。

そして何よりも、礼を言いたかった。僕は、感謝の言葉を慈雨のように叫びたい衝動に駆られた。

このような人間に巡り合えた僥倖を、誰かが仕組んでいたのなら、僕は感謝するだろう。その神だろうと。

後ろにいる白い神は薄らな笑みを浮かべ、こちらをただただ静かに見ている。あの神は最初から気がついていたのだろうか。

「ありがとうレナス。君は本当に有能で頼りになるシスターだ」



「ありがとうございます。しかし、くれぐれもご自分の安全を優先して下さい。私たちよりも早く神の元へ逝ってしまわれては、今度は私たちが何をするか分かりませんから」

レナスは笑みを浮かべながら、サラリと恐ろしい事を言った。彼女なりの冗談なのだろうが、本当にやりかねないので少し顔が引きつる。

「それじゃ、あんまりここで立ち話をして風邪をひいたらいけない。そろそろ出発するよ」

「はい、そうですね」

ビューツと冷たい風が僕とレナスの間を吹き抜ける。結局彼女は、一度も僕の帰りの日を訊いてこなかった。

「ネリアス神の御加護が二人に幸を与えんことを」

「ネリアス神の御加護があらん事を。レナス、君にもね」

僕は体を彼女から背け、町の北門へと向かって一步を踏みしめた。

「いつてらっしやいませ。クロド様」

後ろからレナスの声が小さく聞こえる。

「いつてらっしやいませ。シロナ様」

後ろから聞こえる声は、小さく震えていた。

一人の牧師と、一人の神。

北の大地。奇学が生まれた地でもあり、僕たちが探す真相がある地。  
奇学技術の街『ギルントス』へと向かって、二人はまた動き出した。

## 第五話：アルト

目が覚めると、そこは暗い部屋だった。

体中にまとわりつくような嫌な空気と、割れた窓から入る断続的な風の音。部屋の中は暗い闇の空間なのにもかかわらず、配置されている家具や調度品がしっかりと目視で認識できる。

ふと顔を下に向けると、目の前には大きな物体が二つ並んで倒れている。

片づけなければ

何故そう思ったのか自分でも分からないが、体が無意識に動き、謎の物体を両手でつかみズルズルと引きずる。

今いるこの場所も、この手に持つ物体の正体も、今向かおうとしている所も、私には何一つ分からなかった。ただ、体が奇械きかいのようにひとりで動く。

少し歩くと、割れた窓ガラスから入った月光が謎の物体の先端に当たり私は歩みを止める。

そこにうつつたのは何も無い顔面だった。

短い髪の毛が乱雑に掻き毟られ、顔には苦悶の表情でも浮かんでそうなのにも無かった。



頻繁に他の町に行く僕にこそ、馬による移動方法が必要なのではないか。それなのに、それなのに……。

「だったらお主、クリードを出る前に馬の一頭でも借りればよかるうに。あの町長に頼べば、一頭くらい快く貸してくれると思うがの」

「僕は馬に乗れないんです」

「………なに？」

「僕は生まれつき高所恐怖症で、極度の乗り物音痴なんです。馬上くらいの高さなら克服しましたが、どんなに頑張っても乗りこなせないんです」

「………お主は本当に情けないやつじゃなあ」

ため息をつきながら、シロさんは不意に前方を見た。

「ぬ。お主のお仲間が来たぞ」

そう言われ、僕も前を見ると、数十メートル先に人影らしき物が一つこちらに歩いてくる。

「通行人でしょうか。しかし妙ですね。この道はクリードとアルトを繋ぐ、長い長い一本道です。馬もなしにこの道を通るなんてまさか！あの人も馬に乗れない口では！」

僕は少し興奮気味に言い、シロさんからは冷たい視線と一緒に『情けないやつ』と小言で言われたが、僕の耳には届かなかった事にといた。

だが、これは本当に不思議な話だ。だが、一旦この話は置いてこつ。

まず話さなければいけないのが、現在の僕たちの目的。

僕たちが目指す最終目的地は北の地の中間にあたる街。奇学きかくが生まれし街ギルントス。馬に乗って途中の町に宿をとらず、野宿をしても最低五日以上はかかる。徒歩で行こうものなら、何週間かかるだろうか。さらに途中の町でバリバリ宿をとり、少しだけ観光も出来たらいいな、と思っっている僕たちなら尚更だ。

そして現在目指す目的地は『風の生まれ故郷アルト』と言う小さな田舎町だ。クリードからアルトまでは一本道なので迷う事は無いが、いかんせん遠い。クリードから馬に乗って朝に出発しようと、お昼すぎに到着するのが限界だ。だからこそ、僕は馬に乗れないハンデイクヤップを意識して、あのような早すぎる時間に出発したのだ。

時刻は、もうそろそろお昼にさしかかる。クリードを出てから歩きっぱなしで、やっとアルトまで中間の折り返しと言った所。晩御飯の時間に着けばトントントンだ。

ここで話を戻すと。あの人は少し妙なのだ。

この道歩いているとゆう事は、つまりクリードかアルトのどちらかに用がある、とゆう事だ。あの人は僕たちとは反対な場所から来ているので、つまりアルトからクリードに向かう通行人だ。

しかしなぜあの人は歩きなのか？ 先ほども言った通りこの一本道は長い。クリードからアルトまで歩いたら半日以上かかってしまう。

考えられる可能性は二つ。

あの人は僕と同じ、何らかの理由で馬に乗らずに来ていいのか、もしくは単に乗れないのか。それとも特に理由は無く、気分だけで歩いてるだけか。

もう一つは、あの人は旅人とゆう可能性。

町から町へと行き来する商人は、馬を荷車につないで運んでもらって移動しているので、可能性としては0だ。通行人を襲う盗賊なら、必ず複数いるだろう。単独で襲う者もいるが、それは極稀の存在で、それは盗賊とは少し違う名前呼ばれているがここは省略しよう。もしかしたら仲間が物影に隠れているだけかもしれないが、この辺は一人隠れるような物影が無いのでその可能性も0だ。あの人が盗賊である可能性は拭えないが、可能性としては低い。

だが、旅人なら可能性は高い。

西へ東へ北へ南へ当てもなく旅をする、自由気ままな生活を送る。それが旅人。

旅人は主に一人が普通。馬に乗る者もいるが、馬の餌代や馬を繋ぐための料金など、収入が無いに等しい彼らには、自分の馬を人は少ない。

したがって、今こちらに歩いてくるあの人物は旅人である可能性が高い。

僕がそう考察してるうちに、その人物の姿が目視出来るほどの位置まで近づいた。

歳は三十代だろうか。少しボロくなったマントを纏い、手には皮で出来た大きなバッグを持ち、年期の入った皮靴がよく目に付いた。

「こんにちわ、旅人さん」

僕は彼が旅人であると判断し、先に挨拶をする。

「おお、これは牧師様。こんにちわ。そちらの麗しいお嬢さんもうもこんにちわ」

「ほほう？ やはり滲み出る美は隠せないようじゃな。そなたは長寿タイプじゃな」

自分の美貌について褒められたシロさんは、ニコニコしながら実体化させた右手で旅人さんの肩をバシバシと叩いた。彼も少し顔が引きつっていた。

「私、詩を謡いながら旅をするヴァイントと申します。牧師様はクリードの？」

「はい。クリード支部の教会の牧師、名前をクロドと申します。隣にいる彼女は修道女見習いのシロナです」

僕とシロさんが一緒に行動していると、思いのほか目立ってしまう。傍から見たら、古いドレスを着た綺麗な女性と、神の使いである牧師が一緒にいるのだ。嫌でも目立つ。

とりあえず、前々から考えていた、こうなった状況を合理化するための都合合わせの言葉を言ってみた。

「おや、そこのお譲さんはシスター様ですか。いやいや、修道服も随分と変わったのですね。とてもお似合いです」

「ぬ。そうかそうか？ いや、ネリウス様に感謝せぬとな。のう、牧師様？」

シロさんはジロリと蛇のような目を僕に向け、僕の背中から冷たい汗が流れる。話は上手く信じてくれたが、シロさんにこの事を説明する事を忘れていた事に今気がついた。

『この説明は後でキッチリするようにの』

心の中にシロさんの言葉が呟かれる。

「それで牧師様。これからどちらに？」

「あ、えっと今はアルトに向かっています。今晚はそこで一泊しようかと」

「……やはりそうですか。無理にとは言いませんが、お止めになった方がよろしいかと」

そう言いながら旅人さんは、今来た道を振り返った。今気がついたが、旅人さんの顔は少しやつれていた。

「何かあったんですか？」



「ふん。愚問じゃな。あのような話を聞いて、何食わぬ顔で見ないフリをするなど出来ん。あやつの話が本当なら、きつとわしのような存在が絡んでいてもおかしくはない。うまくいけば、答えが簡単に見つかるかも知れぬ。それにおまこそ、本当は何が起きたか確認したいんじゃない？」

「そうですね……。人知を超えた出来事が起こったなら、きつとアルトの住民も混乱しているでしょうし。一介の牧師として、人と町の状態を見極めたい所です」

「だったら他に言う事は無いじゃろ。先を急ぐぞ」

そう言ってシロさんはズンズンと先へ進んでいく。僕も慌ててついて行く。

はたしてこの先にいるのは、本当に悪魔なのか。

それとも神なのか -

## 第六話：再びの事件

アルトに着いたのは、夕日が完全に落ち月が空を支配した夜中だ。

当然、外にはこの時間帯では誰も居ない。みな自宅で晩御飯を食べている時間だ。

僕たちは（とゆうより僕は）疲れた体を癒すため、町の中央広場から少し離れた宿『木漏れ日の風』へと向かった。

ガチャリ、と重たい扉を開け中に入ると、すぐに宿の主人と目が合った。

「いらつしやいませ。ご宿泊ですか？」

「はい。人数は二人で、一泊お願いします。部屋は一室で結構です」

「かしこまりました。部屋は二階に上がって左手の奥でございます。こちらが鍵です。くれぐれも無くさないようお願いします」

「料金は？」

「明日の朝で結構です。お客様、とてもお疲れのようですよ」

宿の主人の心遣いにお礼を言い、部屋の鍵を受け取った。僕はそのまま鉛のように重くなった体を引きずり、二階の階段を必死に上る。

シロさんは僕以外誰も見ていない事はいいいことに、ふわふわと浮きながら僕の後ろを付いてくる。

若干の不満感を抱きながら、なんとか階段を上り終え部屋へと向かった。

扉を開け中を見渡すとベッドが二つに小さなテーブルが窓際に一つ、服掛けに椅子が三脚あり机の上には林檎が二つ置いてある。二人でも十分すぎる広さで、さらにシロさんはスペースをまったくならいたためとても部屋が広く思えた。

すぐさま僕はベッドに吸い込まれる様に近づき、ボフツと体をベッドへゆだねた。

「ふむ。なかなかの間取りじゃの。お主もとつとコレ喰うて寝るんじゃな」

そう言うと僕の頭からゴンと鈍い音が響き、頭の横に真っ赤な林檎が転がった。もはや痛みや苦情を訴えるのもおっくうな僕は、そのまま無言で林檎にかじりついた。

シロさんはそんな僕の光景を見てウンウンと言葉に漏らし、ベッドの横にある二枚組の窓を開けた。

「景色もそこそこ良いようじゃ。ここからなら朝日がよく見えそうじゃな」

そんな呑気な事を言いながら、気持ちの良い夜風が部屋に入ってきたその時。

トントントン。

部屋の扉からノックが聞え、ゆつくりと扉が開く。

「失礼しますお客様。お疲れの所申し訳ありませんが、先程お伝えするのをわすれ　　ああ、いけません！」

部屋に入ってきたのはこの宿の主人だったが、言葉の途中いきなり血相を変え部屋の窓へと走り出した。

「なぬ!？」

窓の前に立っていたシロさんはいきなりの出来事に困惑しながらも、転がる様に横へと飛びのいた。そのまま主人は窓の前に立ち、窓の外に顔を出し念入りに注意しながら窓を閉めた。

突然過ぎる主人の奇行に、僕もシロさんもしばらく固まってしまった。

そんな僕たちの顔を見て、ハッと我に返った主人は慌てて頭を下げ早口で言った。

「す、すみませんお客様!とんだご無礼を！」

「い、いえお気になさらずに。しかし、いきなりどうしたんですか?」

「その、実は………現在この町は、恐ろしい怪物の脅威にさらされているんです」

「恐ろしい怪物とな?」

間髪いれずシロさんが言及する。

「はい。私が今この部屋に来たのもそれが理由です。夜中は窓の戸締りに気を付けて、決して窓は開けないようお伝えしようと来た訳なんです。が……すでに窓が開いておられてついあのような行動を。本当に申し訳ありませんでした」

また主人は深々と頭を下げ、少なくともさっきの奇行は理由があつての仕方ない行動だったらしい。

「それで主人よ。その怪物とやらの話も訊きたいんじゃないの？ わしはとーても気になって、これでは今日は眠れんぞ？」

「すみません、ご主人。僕からもお願いします」

「……………そうですね、分かりました。本当は明日の朝一番にでもこの町を出発していただきたい所でしたが、先程のお詫びとして話させていただきます」

僕は主人に椅子に座るよう促し、ゆったりと主人は椅子に着き険しい表情のまま静かに語り始めた。

「まずはこの町からお話しましょう」

ここアルトは、風の生まれ故郷と呼ばれている理由は、近くに大きな渓谷があり、そこから発生した風はこの地方では一番最初に生まれる風と言われております。その渓谷から、生まれたての風がアルトに一番に来るのでそう呼ばれています。

よい風は人の生活を豊かにし、人々にも笑顔を与えると私たち住民

はそう思っています。現に我々はこの豊かな風を使って風車で麦を煎ったりするなど、大いにこの風に助けられています。人々も常に笑顔が絶えず、事件などちょっとした盗み程度しか起きた試しがありません。

そんな笑顔が溢れ、幸せが生まれる町でした。

ですが、突如として平穩は崩され、悲惨な大事件が起きてしまったのです。

あれは一週間ほど前の事です。

私が町の外れにある風車で、倒れている二人の子供を見つけたのが始まりでした。

発見されたのは、この宿からすぐ近くにある家の子供でした。二人は仲の良い友達で、とても元気な子でした。ですが二人はよく門限を破り、夜遅くに帰っては親に叱られていました。今回も家の門限を破り、風車の近くで二人で遊んでいたのでしょうか。

私もこの二人の事はよく知っており、以前も中々帰宅しないこの二人を探してくれるよう親に頼まれた事があったので、すぐにあの二人だと分かりました。

急いで倒れている二人の元へと駆け寄り、声をかけました。しかし、うつ伏せのままピクリともしない二人に、私は、疲れて眠ってしまったのかな？ と適当に考え、二人を抱きかかえようと思いました。

その時。表に向き返った子供の顔が、私の目に飛び込んできたのです。

あの時の光景は一生忘れません。今まで生きてきて、あそこまで悲惨な光景は見た事ありません。

その二人の顔には

何も無かったのです」

「っえ？」

「ふむ……」

「どうゆう事ですか？」

「言葉のまま、あの二人の顔には何一つなかったのです。目も鼻も口も眉も顔には何も無い、ただ顔の凹凸と髪の毛だけがあり、まるで殻を取った卵のようにツルツルでした。思わず私は子供の体から手を離し、子供は仰向けのまま地面に転がりました」

その時の事を思い出したのか、酷く怯えた表情を浮かべながら主人は続けた。

「私も混乱と恐怖のあまりそこからの記憶が曖昧なのですが、私は二人を抱えて町の兵舎に向かったそうです。警備兵の呼びかけに兵舎へ来た二人の母親はその場で卒倒して、今でも寝込んでしまっています。精神的ショックが強すぎたんでしょうね……」

無理もない。自分の愛する子供が突如猟奇事件に襲われ、この世の

出来事とは思えない惨状になったのだ。シロさんは怪訝そうに少し眉をひそめ、僕は不確定な胸騒ぎがフツフツと湧きおこってくる。

「すぐに町一番の医者呼び子供たちを診てもらいました。最悪の結果を誰もが予想していましたが、診断結果にみな驚きました。なんと二人とも生きていたんです！」

「そ、そんな！顔には口も無ければ鼻も無いんですよ？なのに生きている……？」

「はい、その通りです。顔には口も鼻も無く呼吸は出来ないはず。胸も呼吸をしている動きはない。なのに生きています。心音はしっかりとしており、顔以外に目立つ怪我は無く、首筋に手を当てれば脈も力強く打っていました」

「その童わいに意思はあったかの？」

先程から口を閉ざしていたシロさんが質問する。

「い、いえ。失神してるかのように手足はだらりとしていて、完全な睡眠状態だと医者は言っていました。今でも医者は毎日診察に子供たちの家へ行って診察をしてるんですが、あの日のまま何も変わっていないようです」

「ちょ、ちょっと待って下さい！その事件が起きたのは一週間ほど前なんですよね？その間は食事はどうしてたんですか！？口が無ければ呼吸同様何も出来ないはずですが……」

「……そちらの問題も最初は考えていたんですが、二日三日時間が経てど子供たちのお腹はまったく凹みませんでした。つま

り空腹にならないんですよ、あの子たちは」

「そんな事って……」

「この世ではありえぬな」

僕の言葉に合わせたか知らないが、シロさんが続けて言った。

部屋の中に沈黙が流れ、主人のため息が一つこぼれ、窓は強い風を受けガタガタと震えるように鳴く。このような不可解な現象をこの世の言葉で片付けられるとするなら、僕はある言葉しか知らない。

『魔法、じゃな』

僕の考えをくみ取ったのか、シロさんが心の中で呟いた。

『……やはりそうですか』

『実際にその童達の元へ行くのが一番じゃが、この様な奇奇怪怪な現象を起こせる力は魔法しかありえぬ』

魔法。この世の理には縛られず、それゆえに扱える者はこの世にはいない。魔法を使えるのはこの世の者ではない者。

我々人類がこう呼ぶ者

『……神』

『断定は出来ぬが、その可能性が一番高いのう。動機は分かるぬが、少なくとも人の仕業ではなからう』

部屋の中は、先程から風に打たれ窓ガラスが煩く音を鳴らす。僕とシロさんは二人にしか分からない会話で話しているため、主人の目からはあまりの衝撃に黙り込んでしまったかのように見えたのだろう。主人は慌てて謝った。

「す、すみません！お客様を癒すのが仕事の宿の中で、このような話をしてしまい申し訳ありません！！」

「いえ、お気になさらないで下さい」

「うむ。わしから聞いたんじゃ、そちが謝る必要はない。失礼したの、わたしたちもそろそろ眠りにつきたい故、お互いこの話はここで終わりにしたいと思うんじゃが、どうじゃろう？」

「は、はい。そうですね。これ以上お客様のお休み時間を取る訳にもいきませんし。では、失礼させていただきます」

椅子から立ち上がり、若干のふらつきが心配だったが主人は最後に一礼して部屋を出た。

「出発早々、いきなり怪事件に遭遇してしまいましたね」

「ふん。数十年しか生きられぬ人間、特にお主はもつとこの様な経験に感謝すべきじゃ。生きている内にここまでわたし達に関わるなんて、聖職者としてはそれこそ血の涙を流してでも喜ぶところじゃ」

「それ、喜んでるんですか………?」

聖職者だからと言って、それは幾らなんでも極論だろ。と言葉には出さずにおく。

「まあよい。わしはもう疲れた。難しい話はまた明日にでもすればよい」

「疲れたって、シロさん一歩も歩いてないじゃないですか！しかも道中時々うたた寝してましたし、どこの眠り姫ですかあなたは！！」

「あーもう騒がしい奴じゃなお主は。と・に・か・く、わしは眠いんじゃない。これ以上の理由があるのか？ ないよの？ じゃからして寝るー！」

そう言うとシロさんは体を空中に浮かべ、そのまま横になる。

目で早く明かりを消せと合図を送られ、僕もかなり疲れているので渋谷部屋の中の蠟燭の明かりを消して回る。着替えも放棄し、すぐさまベッドへと潜りこむ。柔らかな感触を体中に浴びながら、頭の中で先程の話を検証したが、意識がゆっくりと抜け落ちていく。

シロさんは、今一体どんな事を考えてるのだろうか？ それともすでに寝てしまったのだろうか？

そのような事を疑問にしながら、僕の意識はそこで途切れた。

## 第七話：勝負

今日の雲行きは随分と怪しい日だった。どんよりと墨を含んだ筆で擦りつけた様な雲が、途切れ途切れで空を流れる。お世辞にも気持ちの良い朝とは言えない。

朝方目が覚め、少々警戒しながら部屋を見渡しても特に異常はなかった。例の悪魔は来なかったようだ。

身の安全を確認し、すぐさま部屋から出る。すでに起床していたシロさんも、黙って後ろから付いてくる。階段を下り受付に座っていたご主人に簡単に挨拶し、あと二日ほど泊めてくれるよう頼み追加の料金を払った。

想像通りご主人は必死に僕たちの奇行を説得してきたが、最終的にお客の意思を尊重しているご主人は渋々承諾した。多少の罪悪感を感じつつ宿を出て、今は町の南に建っていると聞いたこの町の兵舎に向かっている。

「空も町も嫌な空気じゃな」

シロさんが怪訝そうにつぶやく。確かにそうだった。行く途中どこか軽い朝食を摂れる店に寄ろうと考えていたのだが、どこもかしこも店は開いてない。それどころか住民が誰一人として外にいない。いくら朝方とはいえ、この時間帯に誰もいないなんてありえない。無人なのかと錯覚してしまう程の空虚な景色だった。

まるでゴーストタウンだ。と僕はポツリと言った。

僕は多少の空腹を我慢しつつ、湿った土がむき出しの道を歩いてく。ぼちぼち歩くと、兵舎らしき団幕が飾り付けされてある建物が見えてきた。入口には一人の軽装の兵士が立っており、兵士がこちらに気がつく少し身構えた。恐らく見慣れない僕たちを警戒しているのだろう。

「おはようございます。一つお尋ねしたいんですが、ここは兵舎でしょうか？」

「そうですね……あなたは？」

「申し遅れました。隣町のクリードから来ました牧師です。こちらは見習いのシスターで、僕の従者を務めています」

「おお、牧師様でしたか。ご無礼な態度をとってしまい、すみません。何分現在この町は第二次警戒状態です」

暗い表情だった兵士は、僕たちの存在を確認しホツとしたのか身構えるのを解いた。

「いえ、お構いなく。それで、ここは兵舎で間違いありませんか？」

「あ、はいそうです。しかし、クリードの牧師様がこんな辺鄙な場所に何用でしょうか？」

兵士は眉をひそめ、再び少し警戒を強めた。

「少々、この町で起きている事件を耳にはさみまして。職業柄、巡

礼で各地をよく回る僕達のような者は、良くも悪くも多数この様な事件に遭遇しているんです。その経験を少しでも事件解決へのご助力に貢献したいのですが、どうも情報不足なんです。まずはこの町の兵士の方々からご意見、もしくはご協力をして頂けないかと思いやって参りました」

「成程、事情は分かりました。ですが……」

兵士は歯切れの悪い口調で言葉を止め「少々お待ち下さい」と早口で言い残し、兵舎の扉を開け中に引っ込んだ。

「どうじゃろうか。無理そうか?」

「恐らく、あの兵士の位はあまり高くないんだと思います。独断で物事を決めかねて、隊長の意見を聞きに行っただんでしょう」

現状が現状なだけに、もしかしたら下級の兵士たちは何かあったらまずは隊長に話を通し、決して独断で判断してはいけないと言いつけられてのだろうか。

まあ確かに、何が次の惨事を招くか分かったものではないからね。

数分が経ち、戻って来た兵士が中に招き入れてくれた。

部屋の中は外からの外見とは違い、以外にも広かった。六角形の形でそれぞれの隅には武器立てが置いてあり、部屋の真ん中には木で出来た長机が一つあり、長椅子が机を挟むように机の左右に一つづつ置かれている。机の上には鉄で出来た頑丈そうなコップがいくつも乱雑に置かれており、ほのかに酒の匂いも部鼻につく。

見渡す限り中にいる兵士は五人。最初に出会った門番役の兵士が一人。図体が大きく屈強そうな兵士が一人。中肉中背の人の良さそうな顔をしている兵士が一人。少しお腹が出てビールっ腹の兵士が一人。背は僕と同じ位の、男性としては低い背丈の兵士が一人。

みな同じ軽装の皮のレザーを着ており、腰には皮の鞘に収まった剣を携帯している。みなどこか顔がやつれており、陰鬱とした空気が流れていた。僕たちが中に入るとみな視線をこちらに向け、一人の兵士が話しかけてきた。

「あなたがクリードの牧師様ですか？」

一番友好そうな顔の中肉中背の兵士だった。

「はい。ネリウス教会クリード支部の牧師、名をクロドと申します。以後お見知りおきを」

一礼して挨拶すると、五人の兵士たちも軽く頭を下げた。どうやら見た目ほど悪い人達ではないのだろう。

彼はそのまま話を続ける。

「ネルから話は聞きましたが、あの事件について詳しく聞きたいんですって？」

どうやら門番の兵士の名はネルと言っらしい。しかし、目の前の中肉中背の兵士は友好的に話しかけてくれてありがたいが、何が可笑しいのか先程からニヤニヤと笑みを絶やさない。そこが酷く不気味だった。

「はい。ネルさんから僕の言い分を聞いたとは思いますが、どうかご助力お願いできませんか？」

「ふむ。隊長は何て言っただんだネル？」

「た、隊長はあまりこの話を聞いてくれませんでした。隊長はお前達の判断に任せる、と一言だけ言っていました」

「ふーむ。成程成程。俺達の判断に任せる……………ねえ。どうするよ、みんな？」

不気味な笑顔のまま彼は周りの兵士達に視線を配る。他の四人は特に何も言わず黙ったままで、僕は段々と部屋の中が息苦しくなった。

「みんな特に意見なしか……………よし！こうしよう」

ポツと手をつき、不気味な笑顔のまま彼は一つの提案を口にした。

「牧師様、ここは一つ勝負をしましょう」

「はい？ と、言いますと？」

「簡単な事です。牧師様はここにいる五人の中から好きな奴を選んで、一回勝負の腕相撲するんですよ。それでもし勝てたなら、何でも好きな情報を言いますよ」

「……………ほう」

「そ、そんな！」

シロさんが悪態付くように一言漏らし、僕は思わず声を荒げる。幾らなんでも不条理な話だ。普段鍛えている兵士に、僕のような者が勝てる訳がない。

「もしもの話しですよ？ 牧師様がこの事件を解決して下さいても、牧師様が、我々アルトを守る兵士達よりも非力だったら、俺たちの面子丸つぶれです。ですからね、ある程度の腕っ節を証明してほしいんですよ。この事件を任せられるに足る方が確かめたいんです」

兵士は苦笑交じりにだが、まるでこの状況を楽しんでいるかのよう  
に笑う。

「あなたはこんな非常時にも自分たちの面子を気にしているんですか！？ 早急に事件を解決したくないんですか！？」

「……………確かにこの様な時自分達の事を優先させるなんて、一介の町の警備兵が言っている事ではない。それは分かってますよ。ですがね、余所から来た訳の分からん奴に解決されたら、それはそれで困るんですよ」

ここにきて初めて彼から笑みが消えた。無表情のまま彼は続ける。

「我々はずっとこの町を守り、愛しています。しかし守るとはいえ、この町はとても治安がいいんです。だから我々の仕事はもっぱら町の見回りや、住人から頼まれた色んな手伝いをこなす毎日。勿論平和なのは好い事ですよ？ ですがね、突如として襲ってきたこの不可解な事件。これを自分たちの手で解決出来なかったら、我々の存在は一体何なんです！？ ただ飯ぐらいの無能集団ですか！？……………これは我々にとっても試練なんですよ。分かっていますよ」

い

彼の語る力強い言葉。その威圧感とあまりの剣幕の強さに、僕は思わず一步後ずさっていた。シロさんは腕を組みジツと彼を見ている。

「さて、無駄話が過ぎました。それでどうしますか？」

彼は一瞬にしてまたあの笑顔に戻り、僕たちは選択を迫られる。

『主よ、これは願ってもないチャンスじゃ』

突如、シロさんが僕の心に語りかけてきた。

『どついう意味ですか？ 何か勝算が？』

『主は忘れておらぬか、わしの力について』

『シロさんの力……？』

少し悩む。そしてすぐに思いだした、最初の出会いの事を。

『思い出した様じゃな。なら話は簡単じゃろ？』

ふふ、とシロさんは薄い笑みをこぼし彼を見据える。そうか、あの時シロさんは悪態をついたのではなく、予想外の好条件に勝利を確信していたのか。

そして、僕にもその勝算が見えてきた。これならきつと勝てる。



「自己紹介がまだでしたよね。申し遅れましたが、俺はミーネルつて言います。あの酒の飲み過ぎで腹が出ちまつてる彼はルマ。俺の後ろに立ってる彼はマミアス。牧師様の後ろにいるのはネル。そんなで牧師様が勝負を挑んだ彼は」

「ガルビンだ」

屈強そうな、いや実際屈強だろう兵士、ガルビンは自分で名前を告げた。体格差は頭一個分もある。

「牧師さん、あんた本当に俺とでいいのか」

口以外の顔のパーツがまったく動かないガルビンは、少し警戒するように言った。

「はい、構いません。ですが、本当にガルビンさんがこの中で一番力があるんですか？」

僕は挑発っぽく訊いた。

僕の言葉を聞いたガルビンさんは、近くに置いてあった鉄で出来た頑丈そうなコップを手に取り、両手で力を込める。すると、驚く事にグニヤリとコップが変形し、底も綺麗に一緒に真っ二つに折ってしまった。挑発しといてなんだが、僕は今すぐ逃げ出したかった。

だがこれは作戦なのだ。ここまで相手に発破をかけて状態で勝負に勝利すれば、相手は何も言えないはず。とシロさんが言っていた。

「俺はここじゃ二番目だ。一番は団長。だが俺で十分だ」

ガルビンさんはギョロリと目玉を動かし睨むように僕を見る。僕は蛇に睨まれた蛙の如く、体が固まりそうだった。

『ふむ。その団長とやり合いたい所じゃが、恐らく部下達で十分と言われるのが落ちじゃ。ここはガルビンとやらを倒して、こやつらの薄ら笑みを浮かべた醜悪な顔を叩き潰してしまおうぞ』

シロさんの強烈で攻撃的な言葉に、僕は内心引きつった。戦の女神であるシロさんにとって、自分より弱い者に勝ち誇った顔されるのが気に食わないのだろうか。若干シロさんのボルテージが上がっている事が、内心を通して直接伝わってくる。

「では、早速始めようかと思いましたが………って、お譲さんは見ないんですか？」

「ふん。見なくとも勝敗など分かりきっておる」

不敵な笑みを浮かべながらシロさんは扉を開け、外に出て行った。おかしな態度をとるシロさんを見てミーンネルさんはきよんとした表情になるも、僕の情けない姿を見たくないのだろう、と解釈したのかすぐにニタニタと笑みが戻った。

しかし、これも作戦の内。とゆうより仕方のない行動なのだ。

他人の前で、僕の中に入る訳もいかないから。

僕は隣を見ると、今外に出て行ったはずのシロさんがいた。半透明でふわふわと浮いている状態で、表情は不気味さと恐怖を醸し出している。恐らく笑っているのだろうか、子供が見たら一発で号泣だ。

ミネルさんなんかより何百倍も怖い。

勿論他の人達には見えていない。僕だけ目視出来る、マナーモードの状態だ。

『さあお主、この阿保共に身の程を教えてやるんじゃ』

そうやってシロさんは僕の体にスーツと入って来た。その瞬間、爆発的にエネルギーが体を滑走する。生命のガソリンとでも言うのか、体中に力が漲り、途端に体が軽くなる。

そう、これがシロさんの力。戦の女神が使える祝福の力。体の基礎代謝が異常なまでに発達し、傷の治りが早くなり、全てのステータスが何十倍にも飛躍する。まさに神の力と言うべきか。この状態の僕と同じ土俵に立てる人間など、この世にはいないだろう。

ちょっと言い過ぎだろうか。だが、それ程の力なのだ。

『どうして僕はこの事を忘れていたんでしょうか。この力を使っていれば、昨日はあんなにヘトヘトにならずに済んだのに……』

『仕方なからう、わしも主も書いてる阿保も忘れておったんじゃか』

『書いてる阿保？』

『何でも無い』

何だかメタ臭がしたが、それはさておき万全な状態になった事をガルビンさんに告げる。

長机に僕とガルビンさんは向かい合うように座り、周りに他の三人が集まる。僕の後ろに来たネルさんは、とても心配そうに声をかけてくる。

「牧師様、こんな勝負は馬鹿げてる。勝てっこありませんって」

「大丈夫ですよ。まあ見ていて下さい」

さも自分の力のように振る舞う自分自身に、少々の罪悪感を覚えながらも、心の内は少しの畏怖と勝利への自信が渦巻いていた。

「ではお二人さん。手を組んで」

無言のまま僕とガルビンさんは右手を手を組む。ガルビンさんの腕回りは、僕の細腕を二本横に並べても足りなくらいの太さだった。手は熊手と同じ位大きく力強く、彼の顔を見ると獅子のような眼で組んだ手を見ていた。

誰が見ても口をそろえて無駄な勝負だ、と言うだろう。僕もそう思う。これじゃまるで大人と子供の喧嘩だ。通常なら赤子の手を捻るよりも簡単な事だ。通常ならば。

ミーネルさんは僕たちの組んだ手を両手で包みこみ、勝負の開始を告げる。

「では。よい………始め!」

開始の音が聞えバシッ！と力を込める音が部屋に響いた。勝負はどうなっているのか見ようとしたが、目の前は真っ暗だった。どうやら、いつの間にか僕は目を閉じていたのだ。

白状するならば、本当は勝てるかどうか半信半疑だったのだ。何せシロさんのこの力を使ったのは一カ月程前の事だ。もしかしたら負ける可能性もあるのでは？ と疑問を持ってしまつのも仕方ない。

だが、僕とネルさんの心配はまったくの無駄だったようだ。

恐る恐る目を開けると、顔を真っ赤にしているガルビンさんがいた。額に欠陥が浮き上がり、とてつもない力が右手に込められている事がよく分かる。周りに目をやると、ミーネルさんの顔が固まっていた。笑みは完全に消え、口をぱくつかせている。

後ろを振り返ればネルさんが真っ青な顔で僕を見ていた。ガルビンさんの後ろにいたマミアスさんは、地べたに尻餅をついた状態で僕たちを見ていた。

組んでいる手を見ると、その力の差が愁然と広がっていた。ガルビンさんの右手はプルプルと震えながら、必死に左に向かつて倒す力を込めているのが見て取れるが、僕の右手はまるで何事もないかのように不動のままだった。まったく力を込めていない様な、僕の右手はそう見て取れる。

力の差は歴然だった。僕は目を閉じている時、ガルビンさんが力を込めている事にすら気が付かなかった。今も感じない。未だに、ただ手を握り合っているような感覚のままだ。

僕自身も大きく驚嘆していたので、数秒間呆けてしまった。

『さっさと決めんか、お主』

シロさんが勝利への催促をし、我に返った僕は促されるまま右手を軽く左に倒す。僕が力を込めた事に気がついたガルビンさんはさらに顔を赤くし抵抗を試みるが、まったく効果は無く、ガルビンさんの手は角度を変えながら地へと吸い込まれるように傾いて行く。

太陽が落ちるも必然なように、ガルビンさんの手も落ちていく。

ポスツと軽い音を立てながらガルビンさんの右手の甲が机に着き、手を離すとそのままガルビンさんは後ろに倒れこんだ。ゼーはーゼーはーと荒い息を立てるガルビンさん。彼の右手を見ると、痙攣してビクビクと動いていた。

周りの人達は目の前で起きた事が、現実である事を理解出来ないのか、暫く無言のまま微動だにしない。どうやら、身体的にも精神的にも完全に勝負あったようだ。

気がつけば体からは先程の力は感じ取れず、後ろの扉がガチャリと開いた。僕は後ろを振り開ける。ガルビンさん以外の三人も同様に開かれた扉に目をやる。

そこには圧倒的勝利に酔いしれた、抑揚したシロさんが立っていた。そして、力強く漠然と言いつつ放った。

「さあ、話してもらおうかの」



## 第八話：隊長と牧師

「この事件について、どこまで知ってます？」

「最初の被害者が二人の子供と、発見者が『木漏れ日の風』のご主人だった。手口はこの世とは思えない不可解なやり方。という所までです」

「分かりました。ではお話ししましょう」

ミールアさんは一呼吸開け、ゆっくりと語り出す。周りの兵士たちもそれを静かに聞き入る。顔は苦しそうだつた。

「次に事件が起きたのは事件から二日後、被害者は町の南門を入つてすぐ目の前にあるパン屋の奥さん、バーバラさんです。ここに来る途中通つたはず。犯行は最初の件と同じ、顔にある物全てが無くなつており、呼吸も食事も出来ないはずが今現在も自室のベッドで横になっています。犯行時刻は晩の九時過ぎ、友達の家から帰宅する途中での出来事です」

「……バーバラさんはとても優しく、いつも笑顔で太陽のような方でした。あそこの旦那さんが作るパンも美味しくて、町では有名な夫婦でした……」

涙ながらネルさんが補足した。

「しかし、どうしてバーバラさんはそのような時間になつてまでも家へと帰宅したかつたんでしょうか。まさか最初の事件の事を知ら

ない、何て事はないはずでしょう？」

僕は不思議に思った事を率直に訊く。すぐさまミールアさんが答える。

「その友人の証言を元に要約しますと。その日、バーバラ奥さんがこの友人宅にパンを届けに来たのが発端でした。友人との世間話が少しだけのはずが夜まで長引いてしまったらしく、友人は泊まらせていけばいいと考えていたのですが、バーバラ奥さんは友人の制止も軽く流して帰宅してしまっただけです」

よっぽど愛する旦那さんの元へ帰りたかったんでしょ。とミールアさんが付け加える。

「次に襲われたのは北の門に近くに住んでいる、ケビンさんという方です。バーバラ奥さんが襲われた次の日の事でした。犯行手口は前に二件と同じで、現在は診療所で入院しています。犯行時刻は夜の〇時過ぎ、現場は自宅で窓を割り侵入。特に荒らされた形跡はなく、就寝中に襲われた模様です」

「近所にケビンさんの聞き込みをすると、一人暮らしのお爺さんなんです。明るくとても前向きな人だったらいいです。よく近所の子供たちに昔流行った遊びを教えたり昔話をしてくれる楽しい人、という評判の良い方です」

ネルさんがすぐに補足する。

「ふむ。犯行が荒っぽくなったの」

シロさんが静かに唸る。理不尽な謎の犯人に、怒っているのだろう

か。

「そうですね。三人も被害者がですと、流石に住民は誰も夜に出歩く事はしなくなりました。まだ太陽が昇った時間に活動する人はいましたが、最近では滅多なことでは外に出るのをやめました」

「そっか、だから来る途中誰も外にいなかったのか。少し合点がいった。」

「俺達も毎日朝から晩まで交代で見回りをしているんですが、この目で犯人の姿さえ見た事ありません」

今度はミールアさんが静かに唸った。

「目撃情報もとても少なく信憑性に欠けていて、この情報を住民たちに流すかどうかまだ決めかねているんです」

「それ、聞かせてもらえませんか？」

「ですが……」

ミールアさんが渋ると、後ろからガルビンさんが声をかけた。

「俺は勝負に負けたんだ。牧師さんに聞かせてやってくれ」

思いがけない言葉に内心驚きつつ、それを聞いたミールアさんは渋々答える。

「本当に荒唐無稽の情報ですから、あまり鵜呑みにしないで下さいよ？ 情報を二つ、一つは犯人は地面から家の屋根へと飛び乗れる

ほどの跳躍力の持ち主で、飛び乗る際謎の金属が軋む音が聞こえた  
そうです。二つ目は」

少し間を開け。

「何と女性らしいです」

「え？」

無意識に驚嘆の声が出た。犯人が女性？

「周りは暗く犯人の曖昧な形でしか目視出来なかったそうですが、  
胸があり髪はやや長めで、体格は中柄の女性、だそうです」

とりあえず聞いてみたが、本当に荒唐無稽の話だった。何も知らな  
い人が聞けば、の話だが。少なくとも、僕たちにとっては大きな収  
穫になった。

「っと、この話はあくまでもご内密にお願いしますよ。これ以上お  
かしな情報を流せば、住民たちが混乱してしまいますからね」

きつく念を押し、ミーネルさんは疲れた表情で椅子にドカッと座っ  
た。ふと気がつくと、部屋の中には僕とシロさん、ミーネルさんと  
ネルさん、そしてガルビンさんだけになっていた。他の二人の兵士  
がいなくなっている。

「どうしました？ ああ、時間がきたのでミアスとルマの二人は  
見回りに行きましたよ。この三階へ上がると、そのまま町を囲む  
城壁の上へ繋がってるんです」

まあ所詮アルトの城壁なんて素材は木なので、火でも投げ込まればそれで終わりなんですがね。とミーネルさんは苦笑交じりに言う。

「しっかし、牧師様の怪力に驚きましたよー。まさか本当にあのガルビンに勝つちまうなんて、これも信仰の賜物なんですかね？」

ははは、と笑いながらミーネルさんは不思議な物を見る目で僕の腕を見つめる。

「本当ですよ。最初ガルビンさんに勝負を挑んだ時は、僕失神しちゃうところでした」

苦笑しつつネルさんも僕の腕をジッと見つめる。

「お前なら、隊長と渡り合えるかもな」

と、当の本人のガルビンさんも僕の腕を穴を開ける勢いで見つめる。

い、居心地悪い……。

「そーじゃろそーじゃろ？ ふふん。主らも精々精進するんじゃない」

シロさんが自信満々に誇らしく言う。確かに全部シロさんの力なんだが、傍から見たら、何で君が誇らしげなんだ？ と言う風に思ってしまう。

シ、シロさん気がついて。他の三人が目をパチパチさせてますよ！

「ま、まあとにかく俺達が知っている情報はこれくらいです。牧師



ネルがきよとんとした表情で聞き返してくれるが、俺はそれを無視して後ろを振り返る。そこには一人の男が立っていた。

俺たちの隊長だった。

俺達が着ている軟弱な皮のハードレザー何かとは比べ物にならない、銀で出来た形の良い鎧。あの流形状で、体にピッタリと合っている鎧を見る度に俺は心が引き締まる。腰には銀のロングソードが一本、鞘は無く、無駄な飾りっ気は一切なく、まさに斬るための代物だ。

額には一文字の傷跡があり、それが隊長の威風さを大きく誇張させる。瞳は三白眼で、鋭い眼差しで前を見据えている。聞いた所によると睨んでいるのではなく、ただ目つきが悪いだけだと嘆いていた。

「あ、隊長」

「隊長」

ネルとガルビンが言い、敬礼しながら背筋をぴんと伸ばす。

隊長の目と俺の目が合い、隊長は軽く口を開く。

「あの二人、行ったのか？」

いつ聞いてもまったく慣れない、体の芯に響く強い声だ。

「はい。丁度今行ってしまいました。何か御用なら、引き止めて来

ましようか？」

俺も背筋を伸ばし、隊長の目を中心に見ながら答える。

「いや、いい」

隊長はポツリと言い、長椅子の端に腰かけた。ガチャガチャと着ている鎧が鳴く。

「おかしな二人組だったな」

「えっ。そう言われればそうでしたね……。ん？　ところで何で隣町の牧師様がアルトに来てるんでしょうね？　ここには教会も建ってないし、巡礼の帰りに訪れたんでしょうか」

ネルが不思議そうに首を傾げる。それは俺もあの二人が来た時から思っていた。

「この町に来た理由はどうあれ、何故牧師がこの事件に首を突っ込んできたのか」

「それは先程伝えた通りだと思いますが？」

「巡礼でよく各地を回っているからこの様な類の事件には慣れていゝる、だったか。それがどこまで本当か」

隊長は噛みしめるように呟く。ネルはそんな隊長の態度を見て、さらに首を傾げる。

「隊長はずっと見ていたんですか？」

俺が先程から疑問に思っていた事を聞く。

「いや、ガルビンと勝負をする所からだ………ガルビン、あの牧師の力どうだった」

突如話を振られ、少しどきまぎしながらもガルビンは答える。

「はい。とつと勝負を決めようと最初から全開で倒したんですが、牧師さんの手はまったく動きませんでした。数秒後、牧師さんは気がついたように手に力を込めてきて、俺は抵抗したんですがまったくの無駄の足掻きでした」

俺はあの時の勝負を思い出す。そう言われればそうだ。どうしてあの牧師様は最初から力を込めなかったのだろうか？ 余裕の表れだったのだろうか？ もしかすると牧師様は、あの時初めて自分の力の強さに気がついた？ いや、考えすぎだ。

「ふむ」

隊長が一言だけ漏らし、しばらく部屋の中に沈黙が流れる。

「それに、あの従者。気になるな」

口火を切ったのは隊長で、独り言のような言い方だった。

「あのシスター様ですか？」

ネルが言う。



とりあえず僕たちは、歩いて町を一周する事にした。数十メートル以上ある木造の堀が町を囲んでおり、入口は北門と南門の二つだ。僕たちが来た道は南門に繋がっている。道中住民に逢えれば何か話を聞こうかと思っただのだが、結局疲れて宿に戻るまで誰ひとりとして出会えなかった。

そう言えば朝も昼もまだだったなあ……。

グーグー、とお腹の中から不協和音が聞こえる。胸に仕舞ってある懐中時計を取り出し時刻を確認すると、時刻は三時を回りおやつ時というやつだった。

現在僕たちは、宿の客が寛ぐロビーの椅子に腰かけ机に突っ伏している。シロさんは一人で考え事をしたいらしく、他人から見えないマナーモード状態で隣の椅子に腰かけている。座る意味は無いんだけどね。

それはさておき、今僕はかなり困っている。どんな生物も絶対に感じる抑えきれない欲求。つまりお腹が空いたんだ。

食事を摂ろうにもこの店も閉まっており、買い物すらままならない。一体全体、この町の住民はどうしているのだろうか？　これでは兵糧攻めである。

「お客様、お口に合うかは分かりませんが、どうぞこれを」

突然顔の横から主人の声がし、視界にパスタの料理が現れた。

「じ、これは？」

「お昼ごはんに作った簡単なパスタなんですが、少し残ってしまってます」

ご主人は優しい笑顔で答え、お茶の入った木で出来たコップとフォークを机に置く。湯気こそたつてはないが、まだ微妙に温かさそうだ。キノコと野菜を茹でたパスタと一緒に炒めた、といったところだろうか。美味しそうな匂いと、空腹も手伝い胃が痙攣を起こす。

「どうぞ」

僕のギラギラとした視線に気がついたのか、ご主人が食事の合図を送ってくれて、僕は挨拶もなしにフォークを取り、凄い勢いでパスタを喰らう。

「そう言えば、お客様のお連れのお譲様はどちらに？」

「もぐ、んぐ……えっと、一人で町を見回りたいと言っていましたんで、まだ外にいるかと思えます」

僕は適当に事情を話す。本当はご主人の目の前にはいるんですがね。口には出さないが。

「左様でしたか、しかし心配ですね。今のこの町で女性一人で出歩くなんて」

そう言っつて、ご主人は心配そうな顔のままカウンターへと戻って行った。

僕は自分の欲求を満たすためさらにペースを速めた。何度か喉に詰まりそうになったものの順調に空腹を解消していく。



あの笑顔の女性の元へと。

## 第九話：最初の接触

開けた上空は完全に闇に落ち、満月が美しく光っている。気持のよい夜風とは裏腹に町の中はさらに不気味さを増し、閑散とした空気も一緒に流れてくる。

ご主人から頂いた遅い昼食を終え、聞き込みをするため再び外に出た僕たちはまず、第一・第二被害者の両親と、第三被害者の旦那さんに会いに行くことにした。

しかし、ご主人に教えてもらった住所へ向かったはいいものの、警戒されているのかまったく呼びかけに応じてくれなかった。

よほど他人に恐れているのか、見ず知らずの僕たちの信用はまったくないようで、第三被害者の旦那さんは外に出てきてくれたのだが「早くどこかへ消えてくれ」と懇願されるほどだった。彼の目は深い悲しみに満ちていた。

しょうがなく周りの住宅にも何軒かベルを鳴らしたが、誰も出て来てはくれなかった。

一度宿に戻り、二人で試行錯誤して話し合った結果少々身を危険にさらす事になるが、夜に外を歩けばいずれあちらから来るのではないのか。という考えにいたった。

現在はアルトの西門がある場所に、シロさんと二人で夜の町を散歩中。木で出来た門は老朽化が進んでおり、所々ボロボロで朽ちてい



時刻はもうすぐ22時。家の明かりも殆ど消えており、道もかなり暗く見えずらいため月光が頼りだ。

「襲われた人間から魔力の痕跡を調べるのが一番手っ取り早いじゃがのお」

そう言つて、シロさんは右手の人差し指を額に当てて唸りだした。

ふと思つたのだが、シロさんは髪の毛から服まで真っ白なので、傍から見ると月の光を浴びて軽く発光してるっぽく見える。

そのせいか、より幽霊っ気が強かった。

「そういえばシロさん幽霊でしたね」

「なんじゃ突然に」

「いや、なんでも。ただいつもより幽霊っぽいなって」

「お主もなるか？」

「怖!!」

かなり鳥肌が立った。この人（幽霊）が言つとシャレにならないから余計怖い。寝ている間にコロツと逝かされて、朝起きると「仲間じゃな!」と言つ光景が簡単に目に浮かんだ。

白さんはケタケタと笑いながら月を見上げる。シロさんの長い髪の毛がふわりと舞、流れ星のように上下に流れる。少しうっとおしい

のか前髪を後ろに追いやる。

改めて見るとやはりシロさんは綺麗な人だな、と思った。今更だが、  
けど僕は牧師として女性に対する煩惱は抱かないよう心がけている  
ので、すぐに思考を切り替える。下手したらシロさんに伝わって色  
々いじられるのは御免だ。

が、その瞬間だった。突如、左手の方から謎の音が耳に響き出した。  
金属が擦り合わせた様な、それとも軋むような異様な金属音。ガリ  
ガリガリ、ガチャガチャガチャと。

「なん  
」

僕が一言言い終える前に、シロさんの体を音がしていた左から右方  
向へ何かが貫通した。何かが通ったのは分かったが、それがどんな  
物かは目でまったく捉えられなかった。

シロさんも一瞬自分に何が起こったのか把握できず、何かが通り過  
ぎた自分の胸のあたりに視線を落とす。

二秒後にようやく自分のとるべき行動に気づき、僕は首を右に向け  
た。

そこには、一人の女性がいた。

闇夜に溶け込むような肩まである長い漆黒の髪の毛。片膝をついて

背中をこちらに向けているため顔は確認できない。体格は僕より少し小柄で、着ている服は所々ボロボロで元の生地は白だったのだから、黒い汚れが染みとなって大半を占めていた。

僕の脳裏にある言葉が浮かんだ。

『謎の金属音が鳴り響き、犯人は中柄で黒髪の女性』

今日聞いた犯人の情報と同じ事が今起っている。僕はすぐに彼女がこの一連の犯人、もしくは重大な鍵だと悟った。

ふいに体が軽くなり、溢れんばかりの力が全身に漲る。

『よいか主、絶対にあやつから目を離すでないぞ』

心の中から珍しく焦ったような声で、シロさんの言葉が聞こえてきた。どうやらシロさんが僕の体に入ったようだ。

言われた通りに僕は彼女を見る。丸まった背中が徐々に伸び、片膝が地面から離れ立ち上がる。右手を見ると、冷やかな蒼い靄がかかっている。空気は震わせているような謎の右手は禍々しくもあり、神々しくもあった。

『あの右腕は……?』

『分からん。じゃを感じるぞ、あの右手から禍々しい程の魔力が溢れておる』

そして、ゆったりと十秒ほど使い彼女はゆっくりとこちらに向き直

った。その顔には、まったく表情はなかった。

虚ろな目だけがカツと見開かれ、ただじつと瞬きもせずこちらを見ている。僕の目と彼女の目が自然と被り合う。無意識に身が縮まり、萎縮する。それほどの眼光だった。

思わず目を逸らしそうになったが、必死に耐える。

すると、またもやあの謎の金属音が響き出した。音源はやはり彼女の方から聞こえてくる。

ガリガリガリガリガリガリガリ、ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ。

音が止んだその刹那。僕は咄嗟に左の脇に跳んだ。すぐに後ろを振り向くと、先ほどと同じ状態の彼女がいた。

僕の目は少しだけ捉えていた。音が止んだ瞬間、彼女は両膝を少し曲げると押し込めたバネのようにこちらに跳躍したのだ。少なくともこの動作を見る事は、普通の人間にはできない。シロさんの力を借りているこの体、この動体視力だからこそ見えたのだ。

先ほどシロさんの体の中を横切った正体は、どうやら彼女自身だったようだ。

恐らく少しでも目を逸らしていれば、何が起こったか分からないまま僕はシロさん同様、彼女に攻撃されていた。シロさんは実体が無いため、偶然にも助かったが、人があの化け物じみたスピードの体当たりを食らえば、人間の骨など容易く砕けてしまっただろう。

この強化された体がどこまでの衝撃に耐えられるかは分からないが、出来る事なら当たらない事にこしたことはない。

『変じゃ……あやつ右手からは魔力は感じるが、あの両足からは何も感じぬ』

『まさか、あのスピードは彼女自身が起こしたって事ですか？』

『断定はできぬ。じゃが、少なくともあやつは人間のはずじゃ。わしらのような神でもない、ただの人間のはずじゃが……』

『

確かに見たところ外見は普通の人間と変わらない。神のダンクネスさんや天使のシユカさんなど、この世の者ではない人たちは、自分の周りになると空気がまるで違ってくる。彼女はゆったりと立ち上がり、こちらに向き直る。先ほどと同じように。

しかし今度は金属の軋むような音は聞こえず、彼女はこちらに向かつて駆け出した。ただの人間にしては、走りも恐ろしく早かった。まるで一歩目から全速力を出してるかのようなスピード。

普通どんなに足が早くても、最高速度を出すためには助走が必要だ。しかし、彼女の場合は違った。少し油断していると、数十メートル程あつた空白があつという間に埋められる。

猛進してくる彼女は絶えず僕の目を見ている。僕は頭を必死に冷静にさせる。

彼女はあの靄の掛かった右手を振りかざし、僕の顔辺りを狙って思いつき殴りこんできた。手を振りかざすスピードも、並の人間と

は比にならない速さだった。しかし、先程の突進のようなスピードではないため、落ち着いて目で追い顔の前に手をクロスさせガードする。

『ダメじゃ！避けるんじゃ！！！』

突如シロさんの怒昂が僕の体から響き、慌てて後ろに一步下がる。結果、彼女の右手は空をきった。

『今じゃ！！』

シロさんが叫ぶ。

だが、僕はそのまま後ろに後退する。

『何をしとる、チャンスじゃろうに！！もしや躊躇しとるのか、あやつに！？』

『あ、相手は少なくとも人間なんですよ？ 今の僕のパワーで攻撃したら、きっと彼女の体は耐えられません』

『阿呆！そんな事をいつとる場合か！あやつはお主の事を殺しに、いや顔を取りにかかつとるんじゃ！！』

僕はハツと彼女の右手を見る。顔を取ると言う到底説明できない現象を引き起こせる、この世の法則を受け付けない魔法。あれが、顔を取る武器だったのか。

くっ。だから顔を狙って攻撃してきたのか！

先程シロさんの忠告を無視して手でガードしていたら、一体どうなっていたのだろうか。答えは分からないが、分かった頃にはきつと悲惨な状況になっているだろう。

土を力強く踏む音が聞こえ、彼女はまた右手を振り上げこちらに駆けている。

『よいか、あやつの右手には一切触れるでないぞ!』

彼女の右手が振り下ろされ、僕の顔に当たりそうになるギリギリまで引き付け、すぐに後ろへ飛ぶ。しかし彼女は今度は食い下がらずに、右手を振り下ろした勢いを利用してそのまま体をひねり、回し蹴りをしてきた。

咄嗟に手で顔を守ったが、運よく距離が足りなく寸での所で蹴りは当たらなかった。だが回し蹴りの風圧が顔を殴る。

これが蹴りで起こせる風なのか!?

若干よろめきながら、急いで彼女との距離を空ける。

彼女は蹴りを入れた姿勢のまま固まっており、表情は合った時からまったく変わらない。ずっと見開かれた瞳、眼球がギロリと動き焦点を僕に合わせる。血が凍るほどの視線、光が全くない死人のような目だった。

『いい加減腹をくくれい!!』

シロさんはいい加減痺れを切らしたか激しく激昂した。

し、仕方ない。女性にあまり手を上げたくないけど、軽く足を狙って動けなくさせよう。

僕は覚悟を改め、今度は僕のほうから彼女へ向かって走り出した。右足を引き、フルパワーの半分ほどの力を込めた蹴りを彼女の左足首を狙う。強化されたこの足の蹴りなら、少なくともこのパワーで打撲位の威力はあると踏んでいる。

僕の右足と、彼女の左足首が激しくぶつかる。

ガキインッ！！

案外すんなり当たった蹴りは、鍋を叩くような音を響かせた。途端、僕の右足首から激痛がした。

「いつ！！」

彼女は蹴られた左足に視線すら送らず、急スピードで右手を僕の顔めがけて突き出してくる。

痛がつている暇もなく、僕は必死に横へと体をダイブさせ難を逃れる。右足に広がる、ジンジンと響く痛みを耐えながら素早く立ち上がり、後ろに五歩ほど後ずさる。

『どっつしたんじゃ！？』

『わ、わかりません。何故か僕の蹴った右足のほうが痛くて……』

まったくわけが分からなかった。どうして蹴った方の僕が痛がってるんだ？ それに彼女の足に当たった時、どうしてあんな音が。

僕は自分の右足に気を遣いつつ、体制を整える。

視線を彼女に戻すと、どうした事が漸く顔を左足に向けている。

やっぱり彼女にもダメージがあったのか？ と思い僕も彼女の左足首を見る。しかしそこで見たものは

「……………凹んでいる？」

そう、つぶやいた瞬間。彼女の小さな口が開かれた。

「左足、足首上部に、軽度の損傷を確認。修復のため、一時館に帰還します」

彼女が等々喋ったのだ。しかし、聞こえてきた声は酷く無機質で、どこか物悲しい声だった。

そのまま彼女はここで初めて僕から目を逸らし、踵を返した。

そして、またあの不気味な金属音が耳に響き出した時、僕は自然と叫んでいた。

「ま、待って下さい！！あなたの目的っていった」

僕の声を遮り、彼女は上空へ高く跳躍し西門を飛び越し、向こう側に飛んで行ってしまった。

僕はそのまま、じっと門の向こうを見つめていた。

向こう側にある、何かを。



そのおかげで昨日の晩、彼女が残した言葉が繋がった。

さしずめ、今の僕たちは犯人捕縛のために向かっている。勿論昨日の出来事は誰にも言っていない。西門の近くには民家はなかったのだ、証言者もいないだろう。

警備兵のネルさん達にこの事を伝え、犯人捕縛に協力してほしい所だがそれは相手がただの人間だったらの話だ。

彼女は人間のように人間ではない。なら、彼女は一体何なのか。

シロさんは、彼女の正体は『神』でも『天使』でもない、この世の理に従う者、つまり人間であると言った。だが、その『人間』にも彼女はうまく当てはまらない。パズルのピース自体が違うから当てはまらないのか、それとも入れる場所が違うだけでいずれ当てはまるのか。

他人の顔を奪い取る魔法の右手イレギュラーを持ち、謎の金属音を体から発し、爆発的な突発力と人間離れした跳躍力を持つ足。そして、その硬度。

今日実験してみた所、昨日彼女の足に入れた蹴りと大体同じ位の蹴りを酒瓶に当てると、酒瓶は蹴りが当たった場所を中心に砕けた。つまり、僕の足は完全に凶器と化している事が立証された。

しかし、その蹴りをもってしても彼女の足は無事だった。少なくとも骨に罫が入ってもおかしくない、奇跡的でも打撲は必至。それが

彼女は痛がる素振り一つ、表情すら変えなかった。

そして何より驚いたのは、蹴りが当たった表面が凹んでいた事だ。パツとしか見えなかったが、あれは間違いなく凹んでいた。いや、陥没していたと言った方がいいだろうか。

彼女は『人間』なのか『それ以外』なのか。どうして被害者を襲い、その顔を取るのか。疑問は積もるばかりで、まったく解決しない。

「主、あやつに会ったらどうする気じゃ」

シロさんが試すように訊いてくる。

「今度は躊躇いません」

僕はすぐに答える。

「うむ。それでよい」

数分歩き、西門の表側に到着した。表面も長く放置されていた形跡があり、ツタや草木が取り巻いていた。

そのまま例の館につながっていると聞く、情報の一本道に入り終始無言で進んでいく。

道中は特に何も起こらず、十分程で館の前にたどり着いた。

こちらは先程見た西門よりも酷い老朽化っぷりだった。外見で判断すると館は二階建てで、所々レンガの壁は崩れ落ち、窓ガラスは割れ放題で、入口の二枚扉も片方が外れかかっている。

「随分とほつたらかちにされてたんですかねえ」

「見た所四〇五十年は経つとるの」

外れかけの扉を気かけながら静かに開け、警戒して中に入る。

入った先は広いロビーで、黒く変色しつつある絨毯が敷かれており、床もそこらじゅう抜けてあって天井は今にも崩れて来そうだった。

それなりに裕福な人が住んでいたのか、汚れた騎士の甲冑や大きな柱時計など高そうな調度品が目につく。

「どうです？ 何か感じますか？」

「いや、今の所魔力は感じられぬ。じゃが昨日のように、わしの感知できる範囲から外れた場所から突進されたら終わりじゃからな」

そう言うと、シロさんはスーツと姿を消し僕の体に入って来た。確かにあの化物じみたスピードで遠くから攻撃されたら、生身の僕はそれで死んでしまう。

「幽霊にはなりたくないですしね」

昨日の会話を思い出し、少し自嘲気味に僕は言った。

力が漲ってきた体に勇気づけられ、先に進む。行ける道は三つ。左右の通路と、奥にある壊れかけの階段。

僕はまず、階段を選んだ。特に理由はなかったが、しいて言えば勘だろうか？

ベキ、ベキキ、と階段を一步上ることに小刻みに木の軋む音がロビ―に虚しく鳴り響く。崩れ落ちる心配をよそに、無事二階に到着。この階段は二階の通路に繋がっているようで、左右に行ける扉がある。今度は右手の部屋を選んだ。

ドアノブが外れており、少し入りづらい扉を開けると、そこは応接室のような部屋だった。埃だらけのソファ―にガラスの長机。壁には動物の頭の剥製が飾っており、少し不気味だった。

しかし、それ以外に異変はなく僕は自然と少しだけ気を緩める。

「立派な部屋ですね。この館も、きっと昔は綺麗な所だったんしよ  
うか」

『わしだって昔はもっと綺麗じゃった』

「はいはい」と、どうでもよい情報を教えてくれたシロさんを軽く流し、僕は部屋の奥に一つある扉に向かう。この人の性格は、昔からこうであったのだろうか？ とふと疑問に思った。

ゆっくりと扉を開け、中を窺う。誰もいない事を確認し中に入る。

今度は長細い部屋で、両脇を大きな本棚が囲んでおり、部屋の奥に

は立派な机と椅子があつた。僕は机の前まで歩く。埃を被っているせいかかなり汚く見えるが、埃を少し払いのけるだけで綺麗な机の表面が見えた。

「ここは、きつとこの館の主の私室ですね」

『随分と本があるのお』

周りを大きな本棚たちが部屋を囲んでいるので、部屋の圧迫感が強い気がする。僕は辺りを見回し、机上に倒れている四角いケースに気がついた。それを手に取り表に返すと、これは写真立てだという事が分かった。

埃を息で払うと、そこには五十代くらいの老紳士と十代の女の子が写っている写真が見えた。この館をバックに、二人より添って写っている。二人とも満面の笑みで、幸せの絶頂という言葉がよく当てはまる。

「この老人が、この館の主でしょうか」

『隣にいる小娘は、こやつの娘かの』

「写真に写っている館もまだ綺麗ですし、この写真よほど前の物なんでしょうね」

少なくともこの写真は五十年くらい前の物だろう。恐らくこの老人はすでにお亡くなりだ。この女の子も、今生きていればお婆さんだ。

「この写真と、昨日の彼女と何か関係がありそうですね」

『ふむ』

「もう少しこの部屋を調べてみましょう」

僕はまず、彼女とこの館の関連性を知りたかったので、重要な物が仕舞ってありそうなこの机を最初に調べる事にした。

二つ引き出しがあり、開けてみると片方は何も無くもう片方には一冊の小さな本があった。黒皮の表紙で、中を開けると最初のページには『物量的法則と質量的変換』と真ん中の空間に書いてあり、ページを捲る。2ページ目には、何やら見た事のない図形や謎の言葉の羅列が書いてあった。

何かの数式だろうか？

10ページほどあるこの本は、9ページ目まで謎の図形や言葉がギッシリと詰め込まれており、最後のページには『最愛なるマイのため』という言葉で締めくくられていた。

「マイ……この写真の子の名前、でしょうか」

『マイのためと書かれておるといふ事は、その訳の分からん文字はこの小娘に何か関係しとる、という事かの。お主は、この本に書いてある文字の意味が分からないのかの？』

「はい。あの図形も書いてあった言葉の意味も、僕には分かりかねません。ですが、最初のページに書いてあった『物理的法則と質量的変換』と言う言葉は、恐らく奇字の一つだと思います」

『奇学……ふむ。ならわしは完全にお手上げじゃな。その質量とか何とかの意味すら分からん』

「僕にも詳しくは分かりませんよ」

奇学、か。まさかこんな所で、奇学に関わるなんて思いもよらなかつた。これが彼女とどう繋がるのかは分からないが、今度は本棚を調べる。そうしたら出てくるわ出てくるわ、奇学に纏わる本だらけ。奇学の領域に疎い僕に内容はサツパリだったが『人体』『生命』『細胞蘇生』『脳伝達』『医学』など、全ての本には『人間』に関連したワードが入っている事に気がついた。

『しかし、中々アヤツに会わないの』

シロさんが不思議そうに言う。この館に入ってすでに三十分程経過している。部屋数が多いせいか、今の所彼女がいた痕跡にはたどり着いていない。

「とりあえず、この部屋の探索はこの辺りにして次に向かいましょ  
う」

僕は入って来た扉を慎重に開け、応接室を抜け、廊下まで戻り応接室の向かいの扉に近づく。

すると、ある異変に気がついた。

「ん？ この辺の床、妙に綺麗だ」

他の床は塵や埃が溜まり薄らと白いのだが、この目の前の扉の下から階段までの一部の床には埃などが無くなっていた。まるで何かを引きずったような跡だ。

僕は警戒心を強め、ゆっくりと扉のノブに手をかける。

扉を開ける。

すると、部屋の中で立っている彼女が僕の目に飛び込んだ。

ドクンッ！！

心臓が想像以上に跳ね上がり、鼓動が速くなる。急すぎる出会いに、思わず過呼吸になる。僕は咄嗟に身構えた。

が、彼女は動かない。

『ぬ・・・・・・・・・・気がついておらんのか？』

僕の中から、シロさんが静かに言った。僕の視点から彼女は真横に立っており、確かに僕の姿は完全には彼女の視野には入ってないが、気がつかないわけがない。

どうする事も出来ず、僕はただ呆然と立ちすくむ。一瞬でも彼女から目を離さないよう努力した結果、嫌な汗が滝のように体を潤す。

『・・・・・・・・・・そうじゃ！何か物足りぬと思ったんじゃが、魔力じ

や。主よ、アヤツの右手を見てみい』

シロさんは何かを思い出したように呟いた。

僕は言われるまま、彼女の右手を見る。そして、僕も気がついた。

「あの右手じゃない！」

『うむ。こんなにもバツタリと出会ってしまったのは、そのせいじやな。もしアヤツの右手が昨日と同じ魔力を発する靄があったのなら、先程扉を開く前からわしはアヤツの存在に気がつけた。じゃが、今は』

今の彼女の右手には、あの蒼い靄はかかっておらず、細い五本指がある普通の右手だった。

これに少しだけ安心した僕は、意を決して忍び足で彼女に近寄る。一步、また一步と眠れる獅子を起こさぬよう近づき、彼女の正面へと回った。彼女の頭は稼働する限界まで下に垂れており、よく見ると方が落ち両手もプランと力なく垂れている。まるで、糸の切れた操り人形のようにだった。

ゴクリと生唾を飲み込み、僕は身を屈め下から彼女の顔を覗き込む。

その顔には昨日見た、あの怖ろしいほど見開かれた目は閉じてあり、気持ち良さそうに寝ているようだった。

『どつという事でしょうか』

今更だが、彼女を起こしてしまう心配があったため、僕は心の会話を切り替えた。

『のう、主。コヤツの顔、どことなくあの写真の小娘に似ておらんか？』

『えっ？』

僕は少し念入りに彼女の顔のパーツを見て、あの写真の女の子の顔を思い出す。

『そう言われれば……確かに似てますね。でも、あの写真の子が今もこんな若い訳がないし……』と言ふ事は、あの子の娘？』

『少しだけじゃが、繋がってきたの』

僕は顔を上げ、視線を部屋に戻す。見た所この部屋は子供寝屋だ。子供用のベッドや暖炉に小さな机と衣装箆笥。ぬいぐるみも暖炉の上に飾ってある。

僕は再び忍び足で彼女のそばから離れ、小さな机に近づく。彼女の存在に気を配りながら、机にある一つだけの引き出しを開けた。

中には先程同様一冊の本があり、手に取る。

表紙には金の刺繍で『リガイル・マイ』と縫われてあった。どうやらこの本は、あの写真の子の日記帳のようだ。少々悪い気がしたが、

僕は中を開く。

が、保存状態が悪かったのかインクの字が潰れ、どのページも解読は出来なかった。残念と思いつつも、ホッと胸をなでおろす。

ゴトツ。

後ろから物音がした。

頭の上か水をかけられたように、一気に体温が下がる。自分では見えないが、きっと今の僕の顔は青ざめているだろう。僕は静々と振り返る。

垂れていた彼女の頭が、元の頭があるべき位置に戻っていた。額に脂汗が浮かぶ。

数秒後、彼女は動き出した。まるで焦らすように、のそのそと上半身を反らし首を曲げ僕の方を向く。音のない動きで彼女は目を開けた。僕は昨日のあの狂気の視線を思い出し、体が大きく震える。

僕と彼女の視線が必然に混じ合う。そして、彼女は一言呟いた。

「いらっしやいませ、お客様」

## 第十一話：機械奇人

今日は珍しくお客様が見えられた。随分と久しぶりの来客だ。私が再起動し実に七百四十九日と十四時間三十二秒ぶりだ。

一人は白髪の若い男性。大人びた表情をしているが、どこか少年さが抜けていない顔だ。白く足もとまでつきそうな長いコートを羽織つてり、胸の辺りには金の刺繍で何かの紋章が縫われている。首には銀で出来た十字架の首飾りがかかっている。

もう一人は女性。長細く髪の毛先まで美しく、プラチナのような輝きを放っている。顔は小さく瞳は大きく、瞳孔は鋭く少し猫に似ている。白いドレスのような物を着ているのだが、フリルなどの一切の装飾が無く、胸の真ん中に大きなリボンが付いている小ざっぱりとした服だ。しかし、その服が彼女の魅力をより引き出させている。

お二人には談話室でお待ちになってもらっている。その間私は一階の調理室で紅茶を淹れるため、階段を静かに下っている。どうゆう訳か、階段を一步踏みしめる度にギイと音がする。それだけではない。

周りを見れば壁や床は老朽化してボロボロで、調度品は好き放題に蜘蛛の巣が張り巡らされ、所々埃だらけだ。

一体自分は何をやっていたんだ。どうしてこんなに館内が汚れ、崩れているのか。自分が掃除を怠るなど今までにない。まさかさぼっ

たわけではないだろうか？　だが、どうにも最近の記憶が思い出せない。

しかし、現在の第一目標は来客者に紅茶を運ぶ事。きっと彼らも博士を訪ねてきた偉い方なんだろう。

なら、博士にお伝えしなければ。……しかし博士はどちらにおられるのだろうか？

\*

「お待ちせいたしました」

応接室に入ると二人がこちらを見た。二人とも一瞬私と視線を合わせると慌てて違う方を向いた。私は彼らと向かい合う形でソファーに座った。ソファーも埃をかぶっていたが、お客様の手前で払うわけにもいかないので、構わず座る。

そういえば今着ているもボロボロだ。いつの間に古着に着替えたのだろうか？　まあ丁度よかったと考えておこう。

「手ぶらで参って誠に申し訳ないのですが、現在管理していた紅茶

の葉が全て駄目になっており、珈琲も検討したのですが生憎扱っていないかったので……」

台所も他の部屋同様荒れており、いつもの場所に管理していた茶葉は腐っていた。ティーカップも割れている物や欠けている物、どれもこれも使い物にならなかった。

「……いえ、どうもお構いなく。僕たちもあまり喉は乾いていなので」

「それともう一つ。大変申しにくいのですが、博士は現在外出中でして……ご用件があるのなら私が言伝を請け負いますが」

「博士、とは？」

男性の方がきよとんとした顔をした。

「？ 博士に御用がある技術省の方ではないんですか？ ならあなたたちはどんな御用で？」

「えっと、僕はクリードの牧師を務めてまして隣の彼女は付添いの従者です。要件は……」

「アルトで怪事件が起きておる、それについての事情聴取じゃ」

ずっと黙っていた従者の女性が口を開いた。何故か彼女は私の顔を見ず私の右手をじっと見ている。

「左様ですか？ 私はそのような事が起こっているとは、まったく存じ上げていませんでした。それでは、何故他の町のあなた方がここへ？」

牧師の方がおずおずと言った。

「アルトの警備兵の方たちに頼まれたからです。少しでも人員を裂くと被害が食い止められない…とかで」

まるで慌てて話を合わせた様な口ぶりだった。どうも引つかかるが、博士に用が無いのなら私の方で対処して早急にお帰り願いたいところだ。一秒でも早く、あの忌々しい汚れを館から除去しなければならぬ。

「…分かりました。では、何から話しましょう」

「じゃあまず、あなたのお名前を窺っていいですか？」

「私ですか？ 私の名前は…」

そこでピタツと思考が止まった。名前、私の名前は…？

頭に靄がかかってうまく思い出せない。博士の事ならどんな事でも分かるのに、自分の事について考えると、そこで頭の中がおかしくなる。

「…どうかしましたか？」

牧師の方が心配そうな様子で話しかけてきたが、従者の方は毅然と険しい表情で私を見てくる。すると、彼女は静かに訊いてきた。

「お主とその博士とやらの関係は？」

「…私と…博士の関係？」

私は無意識に彼女の言葉を反芻していた。その瞬間ピツ、と頭の中で音がした。無意識に自然と口が開く。

「私は博士の…娘…創られた…娘」

「創られた？」

牧師の方が不思議そうに訊いてくる。

一体どういう事か、次第に頭の霧が晴れてきた。彼女の言葉を聞いた途端に積もった雪が溶けるように、記憶が目覚めていく。そうだ、私の名前は

「私の名前は、マイ<sup>メルネンテ</sup>アトラス。リガイル<sup>メルネンテ</sup>アトラス博士によって創られた最初の機械奇人。マイ<sup>メルネンテ</sup>アトラス零型です」

第十一話：機械奇人（後書き）

更新遅れて大変申し訳ないです。

非常に短いですが、ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3319g/>

---

憑神

2011年10月5日19時47分発行